松山市文化財調査報告書157

南久米片廻り遺跡
久米窪田森元遺跡

2012

松山市教育委員会

財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団

埋蔵文化財センター

南久米片廻り遺跡
久米窪田森元遺跡

2012

松山市教育委員会
財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター

序

本報告書は、昭和60年、62年に実施された、松山市東部、久米地区での民間開発に伴う２遺跡の発掘調査成果報告書です。

両調査地が所在する久米地区には、道後平野を代表する古代の遺跡として名高い国指定史跡「久米官衙遺跡群 久米官衙遺跡 来住廃寺跡」があります。７世紀前半代に始まった地方の役所施設の整備・発展、これに伴う町並みの移り変わり、さらに遺跡群の一角に創建された古代寺院の様子などが、合計100次を越える調査により詳しくわかってきています。さらに周辺地域での調査により、この官衙中枢域を中心とした周辺施設の広がりや、人々の生活域・生産域などの様子も明らかになりつつあります。また、このエリアには古代ばかりではなく弥生時代・古墳時代を中心に、古くは縄文時代から新しくは中・近世に至るまで、各期にわたる遺跡が分布しており、今回報告する２遺跡もそれらに含まれるものです。なかでも特に注目されるものに、久米窪田森元遺跡の土坑から出土した縄文時代後期の土器群があります。道後平野には縄文時代後期以前の遺跡は非常に少なく、これらの土器群は当地の縄文土器の移り変わりを考えていく上での重要な資料と注目されていたものです。このような資料を本報告として公開できる運びとなりましたことは、埋蔵文化財保護に携わるものとしてまことに喜ばしく、これもひとえに調査・整理にあたりご協力、ご指導いただいた多くの方々のご尽力によるものと心よりお礼申し上げます。

本書が、埋蔵文化財の保護思想の啓発や調査研究等にご活用いただければ幸いに存じます。

平成24年３月

松山市教育長

山内　　泰

例　言

1．本報告書は、松山市教育委員会が1985（昭和60）年に松山市南久米町で、また、1987（昭和62）年に久米窪田町において実施した、「南久米片廻り遺跡」、「久米窪田森元遺跡」の発掘調査報告書である。

2．南久米片廻り遺跡の調査は、レストラン建設に伴う調査として株式会社富屋興産の協力のもとに、久米窪田森元遺跡の調査はドライブイン建設に伴う調査として岩見恒子氏の協力を得て実施された。

3．遺物の実測･製図、遺構図の製図等は、丹生谷道代、矢野久子、多知川富美子、矢鋪妙子が行った。

4．遺構の撮影は、調査担当者が行い、遺物撮影・写真図版の作成は大西朋子が行った。

5．遺物の縮尺は、土器を１／４にすることを原則とし、土製品、鉄器・鉄製品、石器・石製品を１／２で掲載している。

6．使用した方位は磁北である。

7．久米窪田森元遺跡出土の縄文土器について、愛媛大学 幸泉満夫准教授にご指導いただき、その編年的位置についてのご寄稿を付編として掲載した。記して感謝申し上げます。

8．本報告にかかわる遺物・記録類は、松山市立埋蔵文化財センターに保管されている。

9．本報告書の執筆・編集は、栗田茂敏が行った。

本　文　目　次

第１章　はじめに …… 1
１．遺跡をめぐる環境 …… 1
（１）地理的環境 …… 1
（２）歴史的環境 …… 1
２．刊行組織 …… 5
第２章　南久米片廻り遺跡 …… 9
１．調査に至る経緯 …… 9
２．調査組織 …… 10
３．調査の成果 …… 10
（１）調査の概要と層序 …… 10
（２）１区の調査 …… 14
（３）２区の調査 …… 28
４．まとめ …… 41
第３章　久米窪田森元遺跡 …… 45
１．調査に至る経緯 …… 45
２．調査組織 …… 46
３．調査の成果 …… 46
（１）調査の概要と層序 …… 46
（２）縄文時代の遺構と遺物 …… 49
（３）古代の遺構と遺物 …… 58
（４）その他の遺構と包含層出土・表採遺物 …… 64
４．まとめ …… 67
付　編 …… 69
津雲Ａ式土器の細分に向けた若干の考古学的考察　愛媛大学法文学部 幸泉満夫 …… 69

挿　図　目　次

図１　調査地と周辺の主要遺跡 …… 3
南久米片廻り遺跡
図２　調査地位置図 …… 9
図３　調査地全測図 …… 11
図４　１区西壁面土層図 …… 13
図５　竪穴建物ＳＢ２平面図 …… 14
図６　ＳＢ２断面図 …… 15
図７　ＳＢ２遺物出土状況 …… 16
図８　ＳＢ２出土遺物（１）…… 18

図９　ＳＢ２出土遺物（２）…… 19
図10　ＳＢ２出土遺物（３）…… 20
図11　円形周溝状遺構ＳＤ１・溝ＳＤ２ …… 21
図12　竪穴建物ＳＢ１ …… 22
図13　ＳＢ１出土遺物 …… 22
図14　ＳＢ１遺物出土状況 …… 23
図15　竪穴建物ＳＢ３ …… 24
図16　ＳＢ３出土遺物 …… 25
図17　竪穴建物ＳＢ４ …… 27
図18　ＳＢ４出土遺物 …… 27
図19　１区表採遺物 …… 28
図20　２区Ｔ１、Ｔ２土層図 …… 29
図21　ＳＲ１出土遺物（１）…… 30
図22　ＳＲ１出土遺物（２）…… 31
図23　ＳＲ１出土遺物（３）…… 32
図24　２区集石遺構 …… 34
図25　集石遺構出土遺物（１）…… 34
図26　集石遺構出土遺物（２）…… 35
図27　集石遺構出土遺物（３）…… 36
図28　集石遺構出土遺物（４）…… 37
図29　集石遺構出土遺物（５）…… 38
図30　集石遺構出土遺物（６）…… 39
図31　集石遺構出土遺物（７）…… 40

久米窪田森元遺跡

図32　調査地位置図 …… 45
図33　調査地全側図 …… 47
図34　南北主軸ライン土層図 …… 49
図35　土坑ＳＫ１ …… 50
図36　ＳＫ１出土遺物（１）…… 51
図37　ＳＫ１出土遺物（２）…… 52
図38　ＳＫ１出土遺物（３）…… 53
図39　ＳＫ１出土遺物（４）…… 54
図40　ＳＫ１出土遺物（５）…… 56
図41　ＳＫ１出土遺物（６）…… 57
図42　土坑ＳＫ４・ＳＫ４出土遺物 …… 58
図43　溝ＳＤ２出土遺物 …… 59
図44　溝ＳＤ４ …… 60
図45　ＳＤ４出土遺物（１）…… 62

図46　ＳＤ４出土遺物（２）…… 63
図47　土坑ＳＫ２・ＳＫ２出土遺物 …… 64
図48　土坑ＳＫ３ …… 65
図49　包含層出土遺物 …… 66
図50　表採遺物 …… 67

付　編

第１図　久米窪田森元遺跡ＳＫ１出土土器の器種組成 …… 69
第２図　初期縁帯文期の器種・文様系統組成 …… 69
第３図　初期縁帯文深鉢ⅰ口縁の諸例 …… 70
第４図　初期縁帯文深鉢ⅱ口縁の諸例 …… 70
第５図　外面施文型ブラシ状文の諸例 …… 71
第６図　松山平野周辺における深鉢底部の変遷 …… 72
第７図　津雲Ａ式の細分に関する予察 …… 73

図　版　目　次

南久米片廻り遺跡

図版１　調査前の調査地（北より）　ＳＢ２、ＳＤ１・２検出状況（西より）
ＳＢ２調査状況（東より）
図版２　ＳＢ２炉址遺物出土状況（西より）　ＳＢ２完掘状況遠景（北西より）
ＳＢ２完掘状況近景（東より）
図版３　円形周溝状遺構ＳＤ１と溝ＳＤ２（東より）　ＳＢ１検出状況（南より）
ＳＢ１調査状況（南より）
図版４　ＳＢ１遺物出土状況（１）（北東より）　ＳＢ１遺物出土状況（２）（東より）
ＳＢ１完掘状況（１）（南より）
図版５　ＳＢ１完掘状況（２）（北東より）　ＳＢ３調査状況（１）（北東より）
ＳＢ３調査状況（２）（東より）
図版６　ＳＢ３遺物出土状況（１）（西より）　ＳＢ３遺物出土状況（２）（西より）
ＳＢ３完掘状況（１）（南東より）
図版７　ＳＢ４完掘状況（南西より）　集石遺構（南西より）
集石遺構瓦出土状況近景（１）
図版８　集石遺構瓦出土状況近景（２）　Ｔ１調査状況（西より）
Ｔ２調査風景（北東より）
図版９　Ｔ２調査状況（西より）　Ｔ３調査状況（北より）
調査地全景（北より）
図版10　ＳＢ２出土遺物（１）
図版11　ＳＢ２出土遺物（２）、ＳＢ１・ＳＢ３出土遺物、ＳＢ４出土遺物（１）
図版12　ＳＢ４出土遺物（２）、ＳＲ１出土遺物（１）

図版13　ＳＲ１出土遺物（２）、集石遺構出土遺物（１）
図版14　集石遺構出土遺物（２）
図版15　集石遺構出土遺物（３）

久米窪田森元遺跡

図版16　調査地遠景（西より）　表土掘削風景（南より）
ＳＫ１・ＳＤ５検出状況（北より）
図版17　ＳＤ５完掘状況（北より）　ＳＫ１遺物出土状況（１）（南東より）
ＳＫ１遺物出土状況（２）（南西より）
図版18　ＳＫ１遺物出土状況（３）（南東より）　ＳＫ１遺物出土状況（４）（北西より）
ＳＫ１下層倒木痕調査状況（南東より）
図版19　ＳＤ４検出状況（南東より）　ＳＫ１・ＳＤ４調査状況（南東より）
ＳＤ４遺物出土状況（１）（南より）
図版20　ＳＤ４遺物出土状況（２）（北西より）　ＳＤ４遺物出土状況（３）（北東より）
ＳＤ１検出状況（北西より）
図版21　ＳＤ２・３検出状況（東より）　ＳＤ２遺物出土状況（１）（東より）
ＳＤ２遺物出土状況（２）
図版22　ＳＤ１完掘状況（西より）　ＳＤ２・３完掘状況（西より）
ＳＤ２完掘状況（西より）
図版23　ＳＤ３完掘状況（西より）　ＳＫ２遺物出土状況（南より）
ＳＫ４検出状況（西より）
図版24　ＳＫ１出土遺物（１）
図版25　ＳＫ１出土遺物（２）
図版26　ＳＫ１出土遺物（３）
図版27　ＳＫ１出土遺物（４）
図版28　ＳＫ１出土遺物（５）、ＳＤ２出土遺物
図版29　ＳＤ４出土遺物

第１章　はじめに

１．遺跡をめぐる環境

（１）地理的環境

道後平野は、その北東部を高縄半島の大部分を占める高縄山系の南西面に、また、東から南東部を四国山脈北東麓に限られ、西方の海岸線に向かって扇状に開けた沖積平野である。平野には、高縄山系に源を発し、北東から南西方向に流れる石手川と、四国山脈東三方が森に水源を持ち、西流する重信川の２大河川がある。この２河川は、それぞれいくつかの支流を集めながら西流し、西方の海岸線から約４㎞の通称「出合」で合流し、伊予灘に注いでいる。平野は、これらの河川の沖積作用によって形成されている。その構成を大雑把にみてみると、平野北方の石手川扇状地、およびその西方にひろがる氾濫原、扇状地の北に延びる沖積低地、平野南方の重信川扇状地、およびその中流域以西にひろがる大規模な氾濫原に加えて、両河川の中間にあって、石手川の支流である小野川により形成された比較的小規模な扇状地などが主なものである。両調査地の立地をみると、平野東部にあって、北方を西流する堀越川と南方を西流する小野川とに挟まれた、久米・来住地区の台地北西縁辺部近くに南久米片廻り遺跡が、また、台地南面の縁辺部付近に久米窪田森元遺跡という位置関係にある。この微高地は、小野川水系の河川活動により形成された砂礫台地や古期扇状地、段丘などによって構成されているが、先述のとおり、両遺跡はこの台地の縁辺部付近にあたり、台地の西から南方一帯には小野川流域の氾濫原である低地がひろがっている。

（２）歴史的環境

ここでは、調査地周辺の道後平野南東部の来住・久米地区から小野・平井地区の遺跡分布を中心に述べることにする。

旧石器時代の遺物は、この地区に限らず道後平野では該期の遺構とともに出土した例は知られておらず、数例ある資料も採集遺物であったり、単独出土であったりする例がすべてである。この地区では、鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査に伴い出土した角錐状形石器、久米窪田Ⅴ遺跡出土の角錐状石器、あるいは平井町山田池で採集されたナイフ形石器などの数例が知られているのみで、いずれも後期旧石器時代のものと考えられている〔重松 1992〕。

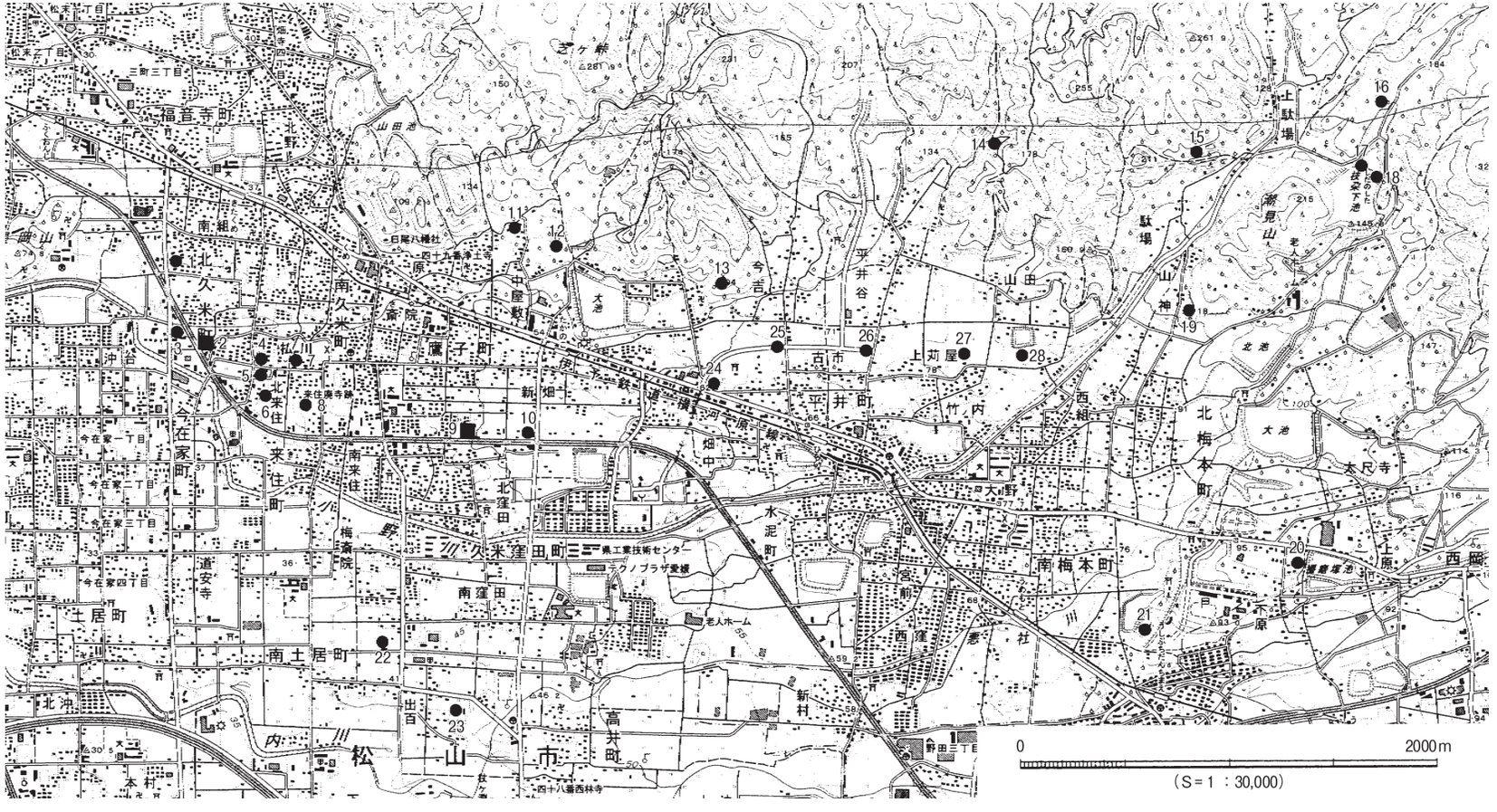
この地区で、確実な遺構とともに遺物が出土するのは、縄文時代後期中頃以降で、久米窪田Ⅰ遺跡ではこの時期の小型方形住居址が調査されている〔吉本 他 1981〕。晩期では、近年になって来住台地上での遺構・遺物の検出が目立ってきている。特に久米高畑遺跡36次調査では、晩期前葉の土器群をともなう円形住居址１棟が検出されているほか、同エリア内の26次調査・35次調査でも同様の時期の土坑の検出をみており、該期の資料の希薄な当平野にあっては、貴重な例といえる〔小笠原 1998／小玉 2008／河野 2004〕。晩期末の比較的良好な例としては、南久米片廻り遺跡２次調査の土器群がある。

斜面堆積で明確な遺構に伴うものではないが、層位・平面ともにまとまりがみられ、一括性の高い遺物群である〔松村 他 1996〕。また、平井町古市遺跡１区の自然流路内から晩期前葉、あるいは後葉の土器片が若干出土し〔栗田 他 2000〕、同遺跡２次調査地では晩期後葉の土坑１基が調査されている〔山之内 1997〕。

縄文時代には点的であった遺跡分布も弥生時代になると、面的なひろがりを持ち、その数も大幅に増大する。その中でも最も注目されるのが、やはり来住台地上に展開する前期末から中期初頭の集落である。このエリアの弥生遺跡は、前期末から後期まで継続してはいるが、その盛期は上述の前末～中初の段階にある。集落は、少数の円形竪穴住居と数多くの無柱長方形竪穴と土坑などによって構成されているが、近年の調査（久米高畑23・25・28・29次）や過去の来住Ｖ遺跡などの調査成果をあわせると、同時期併存の環濠を複数ともなう可能性が高くなってきている〔橋本 1995／高尾 1996／小笠原 1997〕。そのほか、この時期の遺物を出土する遺跡には、小野158号線関連で調査された古市遺跡１区の調査がある。この調査では、検出された自然流路の10層と呼ばれる包含層からまとまった遺物の出土をみている〔河野 他 2000〕。中期の良好な資料は現在のところ少ないが、中期も後半あるいは後期初頭、凹線文の段階の遺物を出土する遺跡はいくつかある。来住廃寺15次調査では、台地の縁辺の落ち際に投棄された状況で多数の凹線文段階の遺物が出土し〔西尾 他 1993〕、また、久米窪田町古屋敷Ｃ遺跡では比較的規模の大きい溝からやはり該期の遺物が出土している〔梅木 他 1992〕。この両遺跡ともに、台地の縁辺部に位置することで共通しているが、台地上には現在のところこの時期に該当する遺構が希薄であり、この時期のこのエリアの集落展開についてはまだ不明な部分が多い。なお、この段階の住居址は鷹子町五郎兵衛谷古墳群の調査中に、低丘陵緩斜面で１棟検出されているが〔森 1978〕、平地部との比高差20m程度の緩傾斜面であり、高地性集落と言えるような立地ではない。後期の集落は、面としてのひろがりは把握されていないのが現状であるが、単発的に遺構が検出される例はいくつかある。南久米片廻り遺跡では円形住居址１棟から、終末期の土器とともに鉄鏃を１点出土している〔栗田 1987〕。その他、後期の遺構・遺物は主に久米窪田Ⅰ～Ⅴ遺跡や、平井遺跡〔豊田 他 1982〕など国道11号松山東道路関係の調査での出土が報告されている。

このエリアにおける古墳時代の集落は、６世紀代以降のものが主に確認されている。南土居町開遺跡では、比較的小規模な調査面積であったにもかかわらず、方形竪穴住居址５棟、掘立柱建物３棟などが検出され、出土遺物ならびに切り合いから、６世紀初頭から後半までの住居形態の変遷や竪穴から掘立への移行が検討されている〔宮内 1996〕。本改良路線の南西端に位置する下苅屋遺跡や下苅屋遺跡３次調査地で調査された集落も６世紀後半を主体とするもので、検出された方形竪穴住居址の一部から生焼け・焼け歪みの顕著な須恵器が出土してみたり、須恵器の集積土坑が検出されていたりするところから、遺跡北東の小野谷に分布する窯址群からの中継点あるいは集積地のような性格を推定されている集落である〔重松 1996／河野 2000〕。

調査地北方の丘陵上には桧山峠古墳群、芝ケ峠古墳群、かいなご古墳群、久米大池古墳群、東方の低丘陵上には播磨塚古墳群など小規模な円墳あるいは方墳を主体とする古墳群が密集しており、そのほとんどが後期古墳と考えられているが、これらの古墳群の中には平井町の観音山古墳のように５世紀代の大規模な帆立貝形古墳と推定されているようなもの〔相田 1980〕、あるいは鷹子町素鵞神社古墳のような、当地では最大規模の円墳〔愛媛県教委 1991〕とされている古墳がある。また、平地部に眼を転ずると高井町波賀部神社古墳、北久米町二ツ塚古墳、播磨塚天神山古墳〔吉岡 2001〕や、現在



1．二つ塚古墳
2．南久米片廻り遺跡
3．南久米片廻り遺跡２次調査
4．久米高畑遺跡26次調査
5．久米高畑遺跡35次調査
6．久米高畑遺跡36次調査
7．久米高畑遺跡23・25・28・29次調査
8．来住廃寺跡
9．久米窪田森元遺跡
10．久米窪田古屋敷遺跡
11．五郎兵衛谷古墳群
12．素鵞神社古墳
13．観音山古墳
14．茨谷１号窯
15．駄場姥ケ懐１・２号窯
16．悪社谷１～３号窯
17．枝朶下池２・３号窯
18．枝朶下池１・４号窯
19．葉佐池古墳
20．播磨塚古墳
21．播磨塚天神山古墳
22．波賀部神社古墳
23．開遺跡
24．下苅屋遺跡３次調査
25．下苅屋遺跡２次調査
26．古市遺跡
27．上苅屋遺跡３次調査
28．上苅屋遺跡４次調査

図１　調査地と周辺の主要遺跡

では消滅してしまったが鷹子町タンチ山古墳など当平野では数少ない後期の前方後円墳が多く分布する地域である。また、平野最大級の後期前方後円墳とされていた北梅本町葉佐池古墳は、その後の調査により全長41mの長円墳ということが明らかとなったが〔栗田 2003・ 2010〕、この時期の当平野の古墳として突出した存在であることにかわりはない。このような、後期の首長墳や大型墳がこのエリアに集中する背景のひとつには、後述するように、7世紀代になって来住台地上に展開する官衙遺跡群や古代寺院成立の基盤となった地方豪族の存在が挙げられよう。

さて古代では、本調査地南西直近の久米窪田Ⅱ遺跡において8世紀代を中心とする、官衙関連と目される遺構や遺物の出土があるが、官衙施設の中心はこれよりおよそ1.2㎞西方の来住地区にある。来住台地上での久米官衙遺跡群の調査は、白鳳寺院址来住廃寺の調査が契機となって始められ、その後の調査の進展とともに、寺院隣接部分の方一町規模の「回廊状遺構」をはじめとして、台地上に方一町規模の区画割りが存在することが明らかとなった。台地北部の半町規模の方形区画域内部における近年の調査では、政庁としての姿を整えた建物配置が確認されている。以前より至近距離での「久米評」線刻須恵器の出土から推定されていたことであるが、この区画域が評衙政庁であることがより確定的なものとなった。そればかりではなく、さらにその成立が評制以前の7世紀前半の段階である可能性が高くなったことも注目される成果である。またその南西部では、8世紀以降の段階で成立した、濠で囲われた正倉域の発見等もあり、この台地上の官衙遺跡群はきわめて重要な遺跡群である〔橋本 2006・2007〕。先にも述べたように、区画割りを含めた台地上の施設の初現は現在のところ7世紀前葉の年代が推定されているが、この遺跡群に須恵器を供給した可能性の高い窯址群が先にもふれた小野谷に分布する松山平野東部古窯址群である。発掘調査が行われたものは7世紀前半の駄場姥ケ懐1号窯1基のみであるが、この地区では現在のところ駄場姥ケ懐、悪社谷、枝朶下池、茨谷など10数基の須恵器窯の存在が確認されている。最も古いもので6世紀後半、新しいものには8世紀後半のものがあり、操業の盛期を概ね7世紀代に持つ窯址群である〔栗田・岡根 1996〕。

文　献

重松佳久 「小野川水系における旧石器文化」『来住・久米地区の遺跡』松山市埋蔵文化財センター 1992
「下苅屋遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
栗田茂敏ほか 『葉佐池古墳』松山市教育委員会 2003
「葉佐池古墳3・4・5次調査」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2010
栗田茂敏ほか 『古市遺跡・下苅屋遺跡－2・3次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2000
栗田茂敏・岡根なおみ「駄場姥ケ懐窯址」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
山之内志郎 「古市遺跡2次調査地」『古市遺跡－2次調査－、五楽遺跡－1・3調査－』
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
吉本　拡・阪本安光 「来住Ⅴ遺跡、久米窪田Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ遺跡」
『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』
愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981
河野史知 「久米高畑遺跡35次調査地」『来住・久米地区の遺跡Ⅴ』
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2004
小笠原善治 「久米高畑遺跡36次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅹ』

松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1998
「久米高畑遺跡28次・29次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅸ』
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1997
小玉亜紀子 「久米高畑遺跡－26次調査－」松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2008
橋本雄一 「久米高畑遺跡23次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅶ』
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1995
『史跡久米官衙遺跡群』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2006
『史跡久米官衙遺跡群Ⅱ』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2007
高尾和長 「久米高畑遺跡25次調査地」『松山市埋蔵文化財調査年報Ⅷ』
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
西尾幸則ほか 『来住廃寺遺跡－第15次調査報告書－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1993
梅木謙一・宮内慎一 「久米窪田古屋敷Ｃ遺跡」『来住・久米地区の遺跡』
松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1992
宮内慎一 「開遺跡－１次調査地－」『小野川流域の遺跡』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1996
森　光晴 『五郎兵衛谷古墳』松山市教育委員会 1978
豊田達雄ほか 「平井遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅳ』
愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1982
相田則美 「４・５世紀伊予の首長墓」『社会科学研究第１号』1980
『愛媛県内古墳－分布調査報告－』愛媛県教育委員会 1991
吉岡和哉 『播磨塚天神山古墳』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 2001

２．刊行組織

松山市教育委員会

	教育長	山内　泰
事務局	局　長	嶋　啓吾
	企画官	渡部　満重
	〃	青木　茂
文化財課	課　長	駒澤　正憲
	主　幹	森　正経
	主　査	竹内　明男
	主　査	楠　寛樹

㈶松山市文化・スポーツ振興財団

	理事長	一色　哲昭
	事務局長	松澤　史夫
	事務局次長	近藤　正
施設利用推進部	部　長	中越　敏彰
埋蔵文化財センター	所　長	田城　武志
担当	主　査	栗田　茂敏

第 2 章

第２章　南久米片廻り遺跡

１．調査に至る経緯

1985（昭和60年）４月、石川千代志氏ほか２名の地権者より、松山市南久米町におけるレストラン建設に伴う埋蔵文化財確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に提出された。当該地は、松山市の指定する包蔵地「№126 高畑遺物包含地」に属しており、同月内に実施した試掘調査により、竪穴建物や溝等の遺構の一部が確認される部分があり、この部分について本格調査が必要と

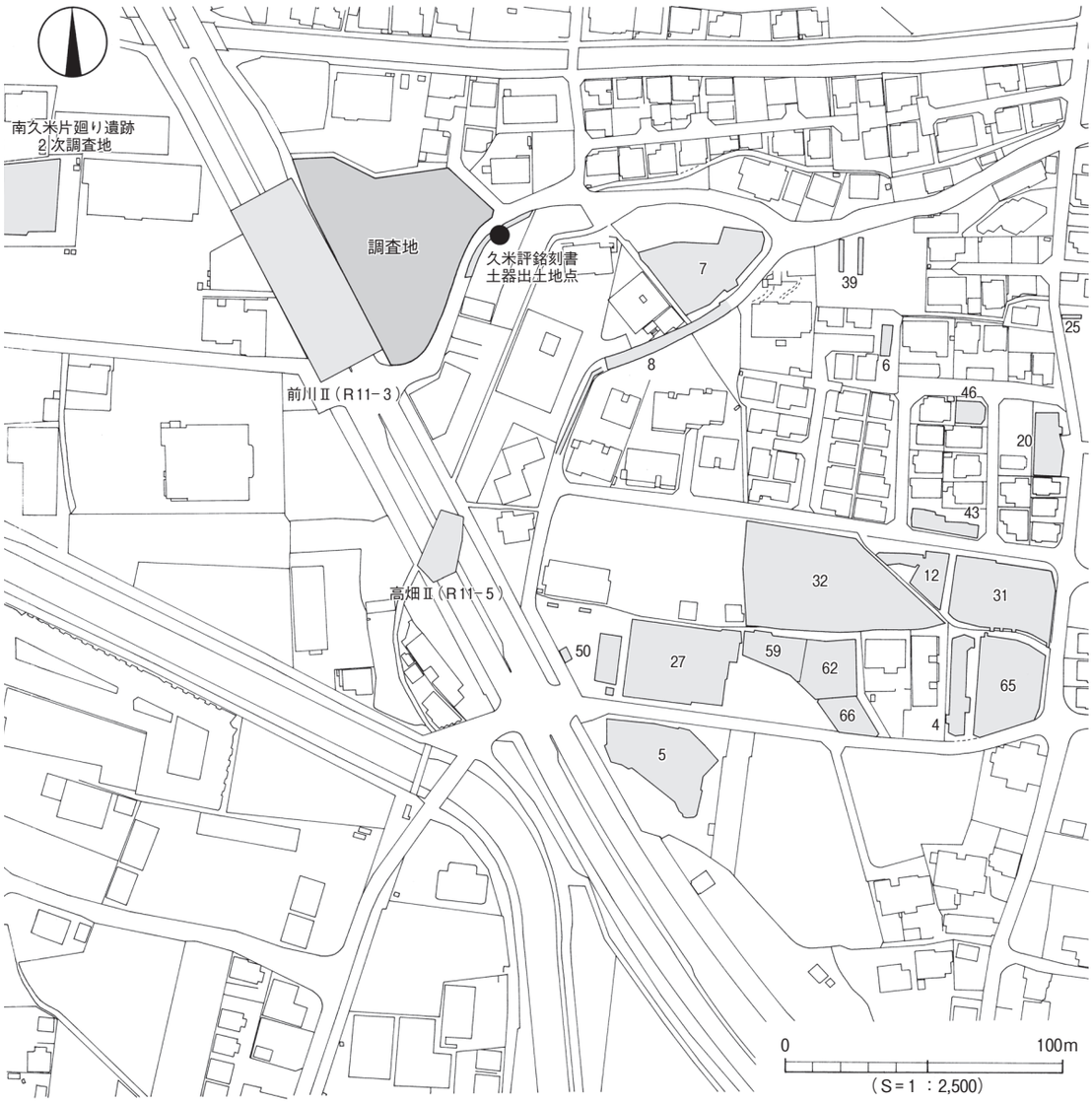


図２　調査地位置図（アミガケ部分の数字は、久米高畑遺跡における次数）

判断された。この結果を受けて、市教委、申請者、および開発主体となる富屋興産との間で遺跡の取り扱いについての協議が持たれた。その結果、富屋興産の協力のもと松山市教育委員会が主体となって発掘調査を実施することとなった。
調査は同年５月７日より開始した。実施されたのは、申請面積2,929.02㎡のうち約920㎡で、西側の１区と東側の２区とに分けて調査を行った。１区では、弥生時代、古墳時代の竪穴建物群を、２区では流路の跡が調査され、５月22日をもって調査を終了した。

２．調査組織

松山市教育委員会	教 育 長	西原多喜男
文化教育課	課　　長	木下　　亘
	課長補佐	坪内　晃幸
	第二係長	大西　輝昭
	主　　任	西尾　幸則
	調 査 員	松村　　淳
		栗田　茂敏

調 査 地　愛媛県松山市南久米町558－１、561－１、564－１、565
調査期間　1985（昭和60）年５月７日～1985（昭和60）年５月22日
調査面積　2,929.02㎡のうち約920㎡

３．調査の成果

（１）調査の概要と層序（図３・４）

試掘調査で竪穴建物と考えられる遺構が認められた周辺の対象地東部のおよそ420㎡を１区とし、流路跡が確認された西部に掘削した６本のトレンチをつなぐ恰好の調査区約500㎡を２区として調査が行われた。調査地は４筆からなる水田で、ほぼ水平な地山面上に北東から南西へ降る水田耕作面があるのが現況である。１区西側の壁面でみると、調査区南部では耕作土直下に地山面があり、この面を切り込んで黒色土で埋まった遺構が検出される。これよりやや北へ行くと一段高い水田となり、この部分には耕作土下に地山を覆う包含層黒色粘土層が10～20㎝程度残っている。このことから、南側の水田はこの黒色土を削って造成されていることがわかる。調査区の北端から南10ｍまでの間では耕作土直下に地山ブロック混じりの客土が包含層を削って観察されるが、これはちょうど畦畔を縦断に近く斜めに切った状況で現れた土層であるので、水田耕作面自体の土層はこれより南の土層と同じである。

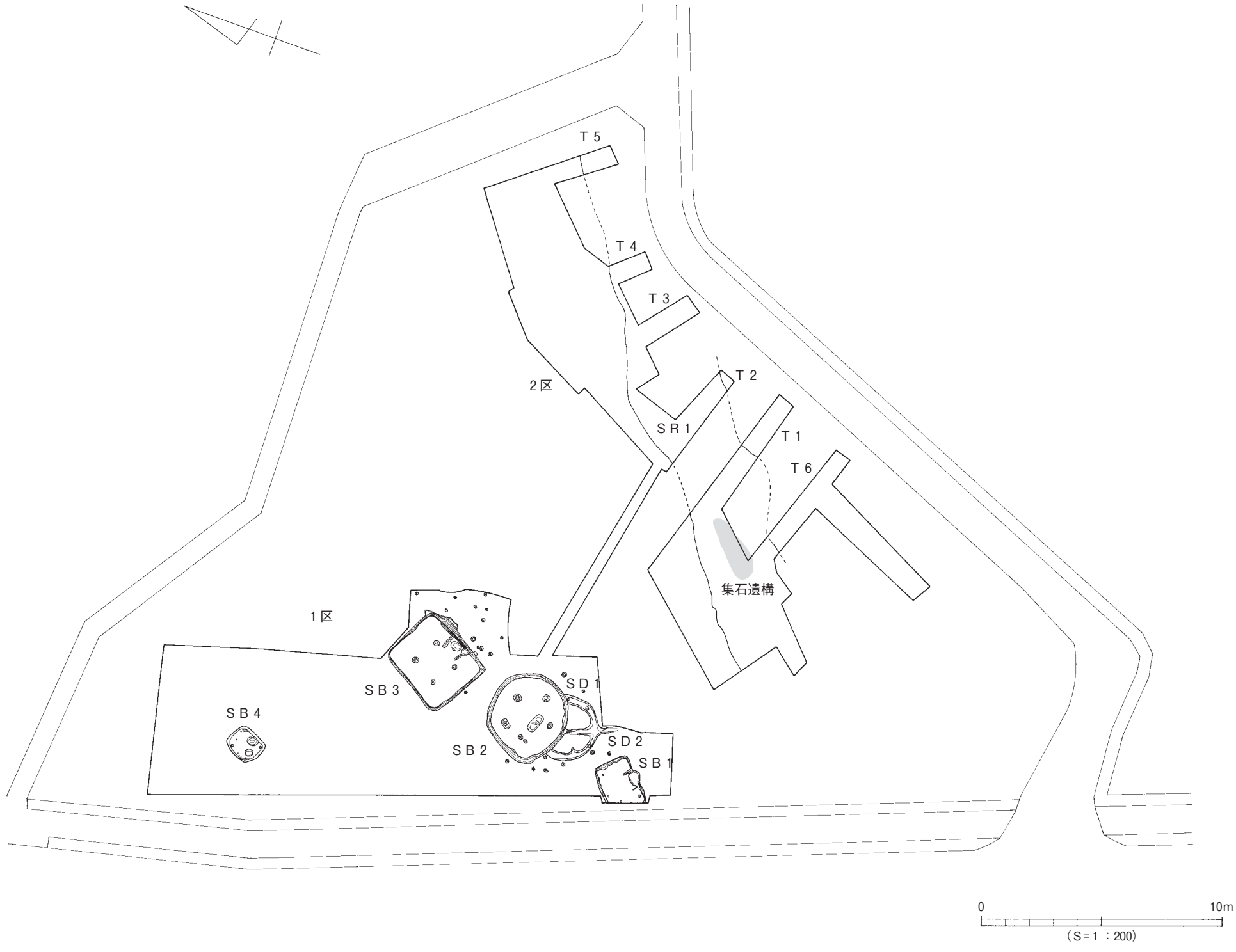

T 5
T 4
T 3
T 2
T 1
T 6
SR 1
2区
1区
集石遺構
SB 3
SB 4
SB 2
SD 1
SD 2
SB 1
0
10m
（S＝1 ：200）

図 3　調査地全測図

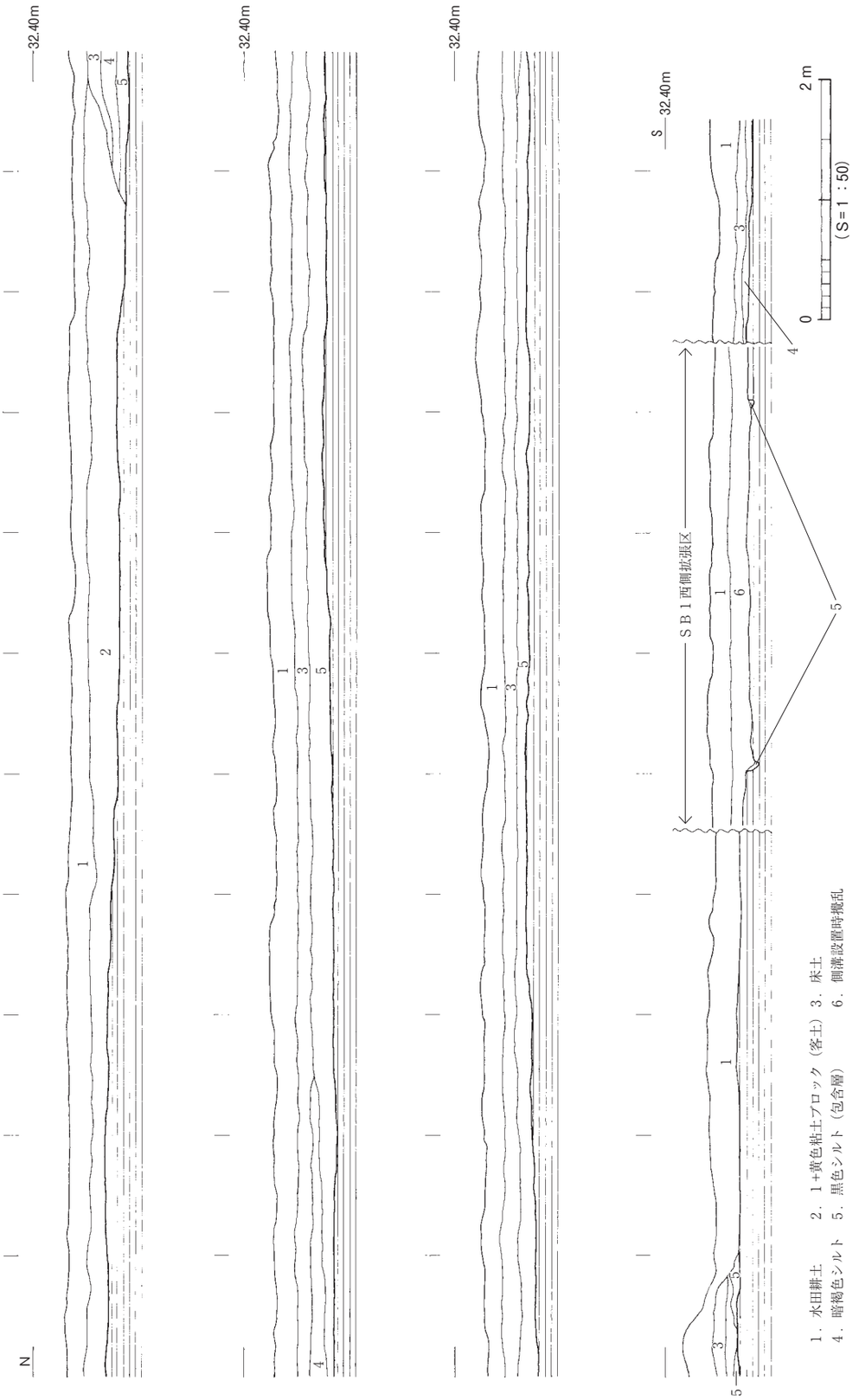

N
32.40m
32.40m
32.40m
S
32.40m
ＳＢ１西側拡張区
0
2 m
(S=1：50)
1．水田耕土　2．1+黄色粘土ブロック（客土）3．床土
4．暗褐色シルト　5．黒色シルト（包含層）　6．側溝設置時攪乱

図４　１区西壁面土層図

（２）１区の調査

１）弥生時代の遺構と遺物

ａ．竪穴建物

ＳＢ２（図５～７）

南北6.5m、東西6.9mのやや東西に長い円形竪穴建物である。西側に0.5m程の突出部が幅２mにわたって付随しているので、この部分での差し渡しは7.4mとなっている。後述する円形溝ＳＤ１およびこれに交わる直線溝ＳＤ２を切って検出された。壁体の立ち上がりは10cm程度の遺存で、その内側に20～30cmの周壁溝が巡っているが、溝は突出部ではやや広く、幅40cm程度となっている。床の貼り土などの床面施設は確認されていない。主柱穴は５本、30～35cmの深さである。また、突出部の外側、両コーナー近くに直径20～25cm、深さ15cmの小ピットが対称的に配置されている。床面の南西寄りには長さ1.6m、幅0.7mの隅丸長方形プランをなす炉と思われる施設がある。深さは10cm、底はフラットで北辺寄りに深さ７～８cmの円形の窪みがある。この施設内より鉢25が横倒しの状態で出土した。埋土に顕

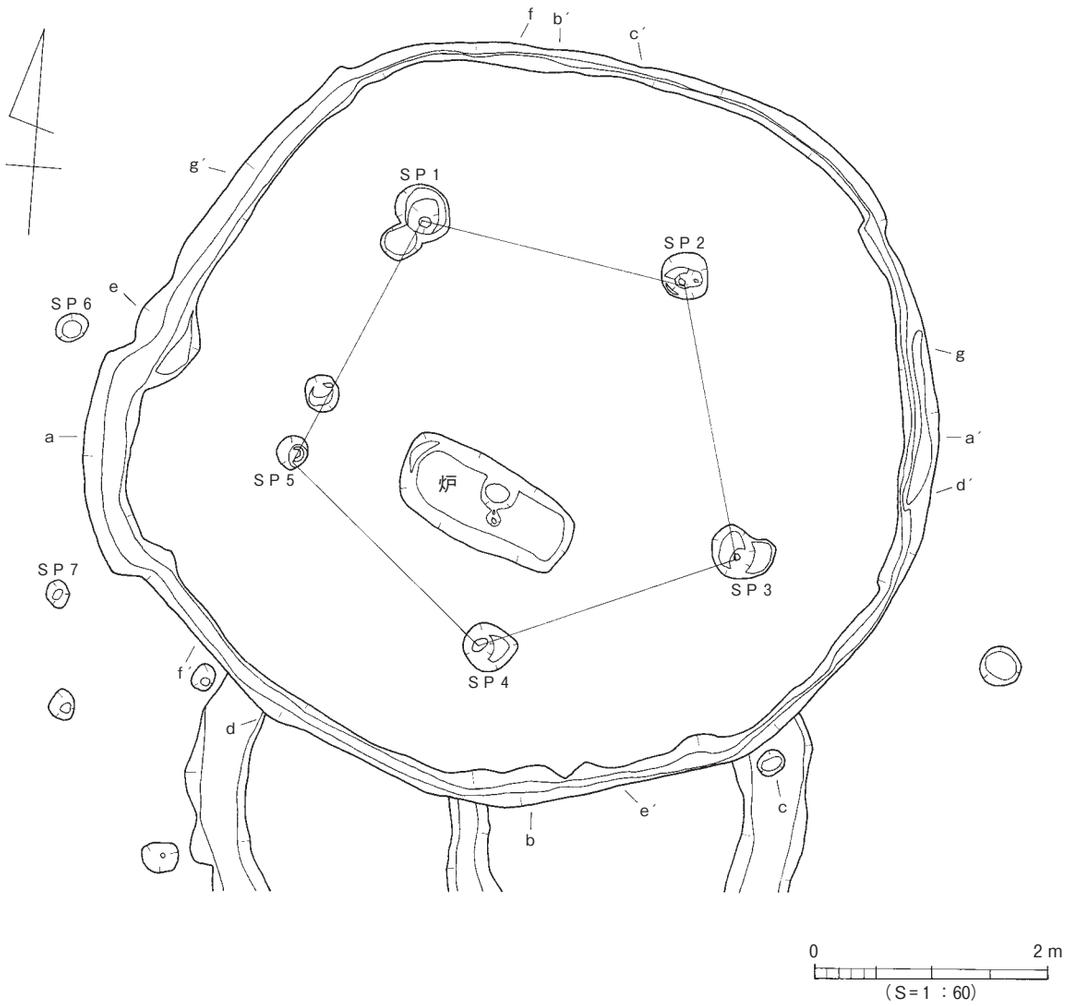


図５　竪穴建物ＳＢ２平面図

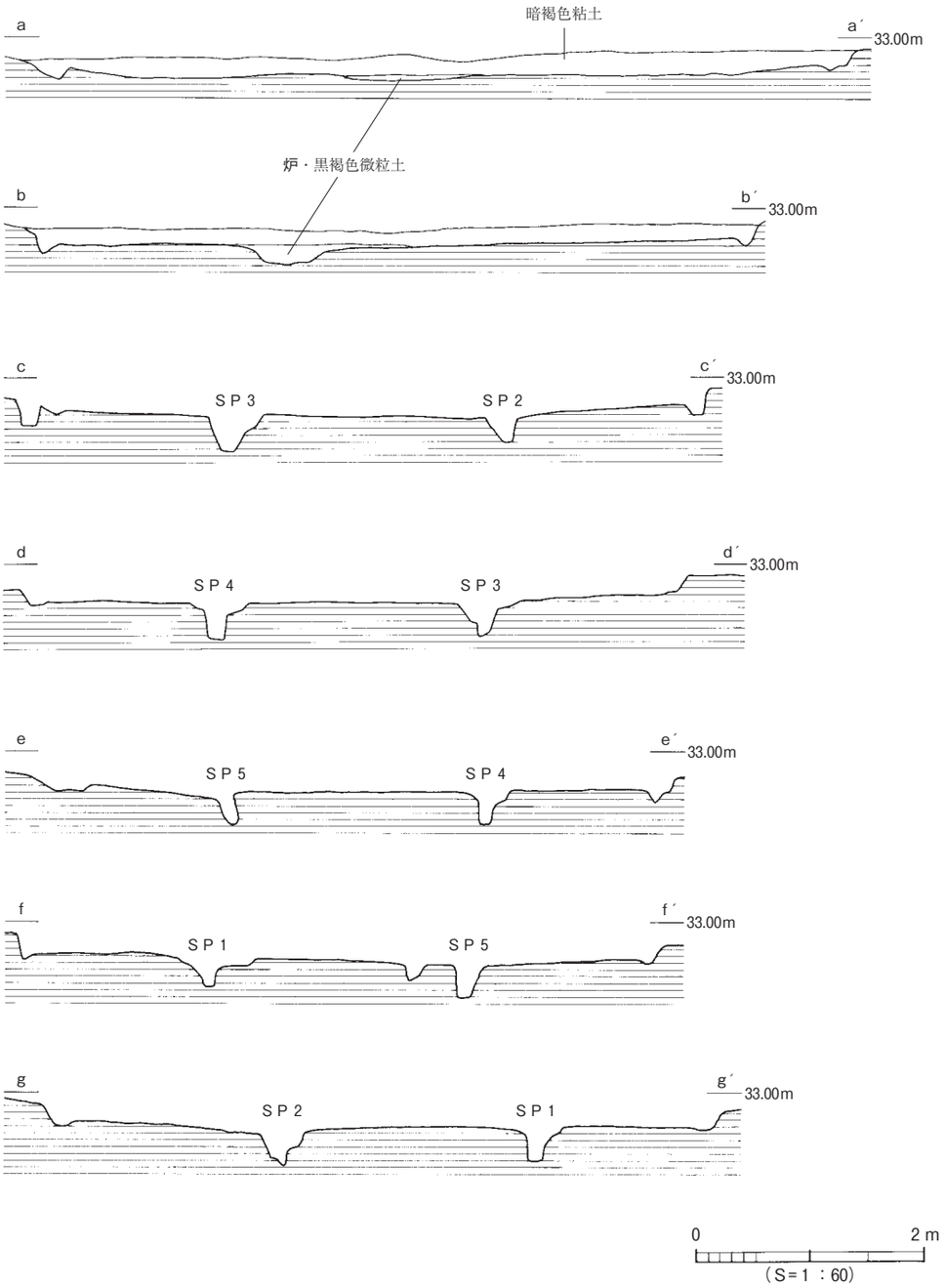

暗褐色粘土
a
a´
33.00m
炉・黒褐色微粒土
b
b´
33.00m
c
c´
33.00m
ＳＰ３
ＳＰ２
d
d´
33.00m
ＳＰ４
ＳＰ３
e
e´
33.00m
ＳＰ５
ＳＰ４
f
f´
33.00m
ＳＰ１
ＳＰ５
g
g´
33.00m
ＳＰ２
ＳＰ１
0
2 m
（S＝1：60）

図６　ＳＢ２断面図

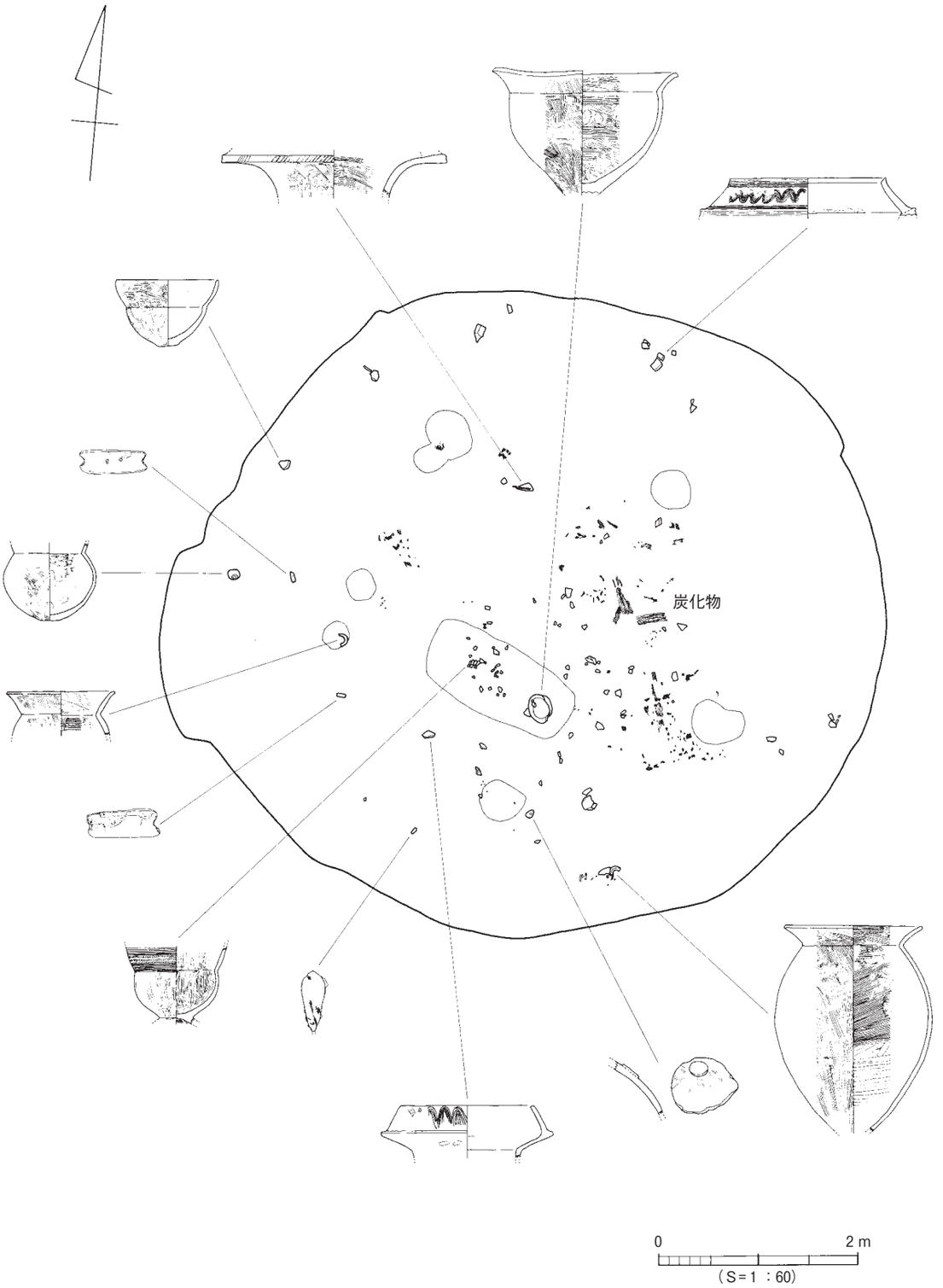


図７　ＳＢ２遺物出土状況

著な炭化物はみられないが目の細かい灰状の黒色土で埋まっていることが確認された。この埋土上、床面レベルで小型鉢20が出土した。坑底、壁面、およびその周囲には顕著な被熱の痕跡はない。炉の北東側の床面ＳＰ２とＳＰ３の間では周辺で集中して炭化物が検出されているが、消失を窺わせる状況ではないので、炉に関わる炭化物と考えられる。遺物は、若干の混入を除けば図８・９に示されたような後期後葉の土器のほか、石庖丁、鉄鏃がある。

ＳＢ２出土遺物（図８～10）

弥生土器

壺（１～９）　１～３は混入と思われる中期中葉の片である。１は内面に複数条の刻み目突帯を貼り付けられる口縁部片。胎土から同一個体ではないが、円形浮文を貼り付けられた胴部片３が、このような有文壺に組み合う壺の肩部と思われる。２は断面三角形状に下方に拡張した口端面に斜格子文をヘラで刻まれるものである。４～７は複合口縁の口縁部で､外面に面を持たずくの字状に屈曲する４・７と、屈曲部が面を持ってコの字状を呈する５・６がある。４は内湾気味に口縁が立ち上がり、外面に４条単位の櫛描波状文を施されている。５の口縁部は強く内傾しながら直線的に延び、端部近くになって外反する。屈曲部外面に幅広の２条の沈線、口縁部上下端に５条単位の櫛描直線文を施し、その間の施文帯に同種の工具で波状文を描いている。６・７ともに口縁部が剥離して欠失するもので、６の屈曲部外面には櫛葉状工具による斜め方向の刺突文が施されている。８・９は平底の底部で外面は刷毛目による調整である。

甕（10～19）　10は底部を欠くが、胴部上位に張りを持ち、内面に稜を持って頸部が屈曲、やや外反気味に口縁部が開くものである。横撫でされる口端面を除いて、内外面すべてを刷毛目調整されている。口径18.4cm、胴部最大径21.3cmを測る。11も内外面刷毛目調整で、屈曲して開く口頸部であるが、口径が胴部径を凌ぐ器型となっている。12・13は口縁部外面を横撫でされるもので、10・11が曖昧ながらも口端部に面を持つのと異なり端部を丸く収められている。14は内外面刷毛目の口縁部小片、15は口端部にしっかりした面を持つ大型品である。底部には薄く小さなしっかりした平底16・17と、丸底に近い18・19のようなものがある。

鉢（20～26）　20は台付鉢で台の部分を欠き、また、口端部も僅かに欠いている。半球形の胴部から内湾しながら口縁部が外上方に開くもので、口縁部外面の上端と下端に８～10条の平行沈線文、その間に半裁竹管による刺突を３段にわたって施す。刺突は３段のうち上下段が同方向、間の中段が反対の向きとなっている。沈線文は、一見櫛描のように見えるが、詳細に観察すると切り合っていたり間隔が一定でない部分があったりするので、１本単位もしくは刺突に用いた半裁竹管様の工具を繰り返し用いて施文したものと思われる。器壁は薄く、内外面ともに丁寧に磨かれた精製品である。21は20と同大の鉢であるが、底部がコイン大の平底であることと無文であることが異なっている。20に比べると胴部の張りが弱く胴部自体もやや小振りで、そのぶん口縁部が大きく目立っている。外面は刷毛目の後磨かれており､内面口縁部にも磨きの痕跡がある。胴部内面は撫でによる調整である。器高9.0cm、口径14.2cmを測る。22は球形の胴部にコイン大の平底、内面に稜を持って頸部が屈曲し、口縁部が直線的に外上方に開く小型の鉢である。23はコイン大の平底から直線的に外上方に開く形態のミニチュア鉢である。器高7.3cm、復元口径10.4cmを測る。口縁部付近から胴部にかけて細沈線による曲線文様のようなものがあるが、絵画の一部なのか成形時の繊維状のものの圧痕なのか判断がつかない。24・25は胴部径を口径が大きく凌ぐ寸詰まりの甕形を呈する鉢である。25は底面を剥離により欠失してい

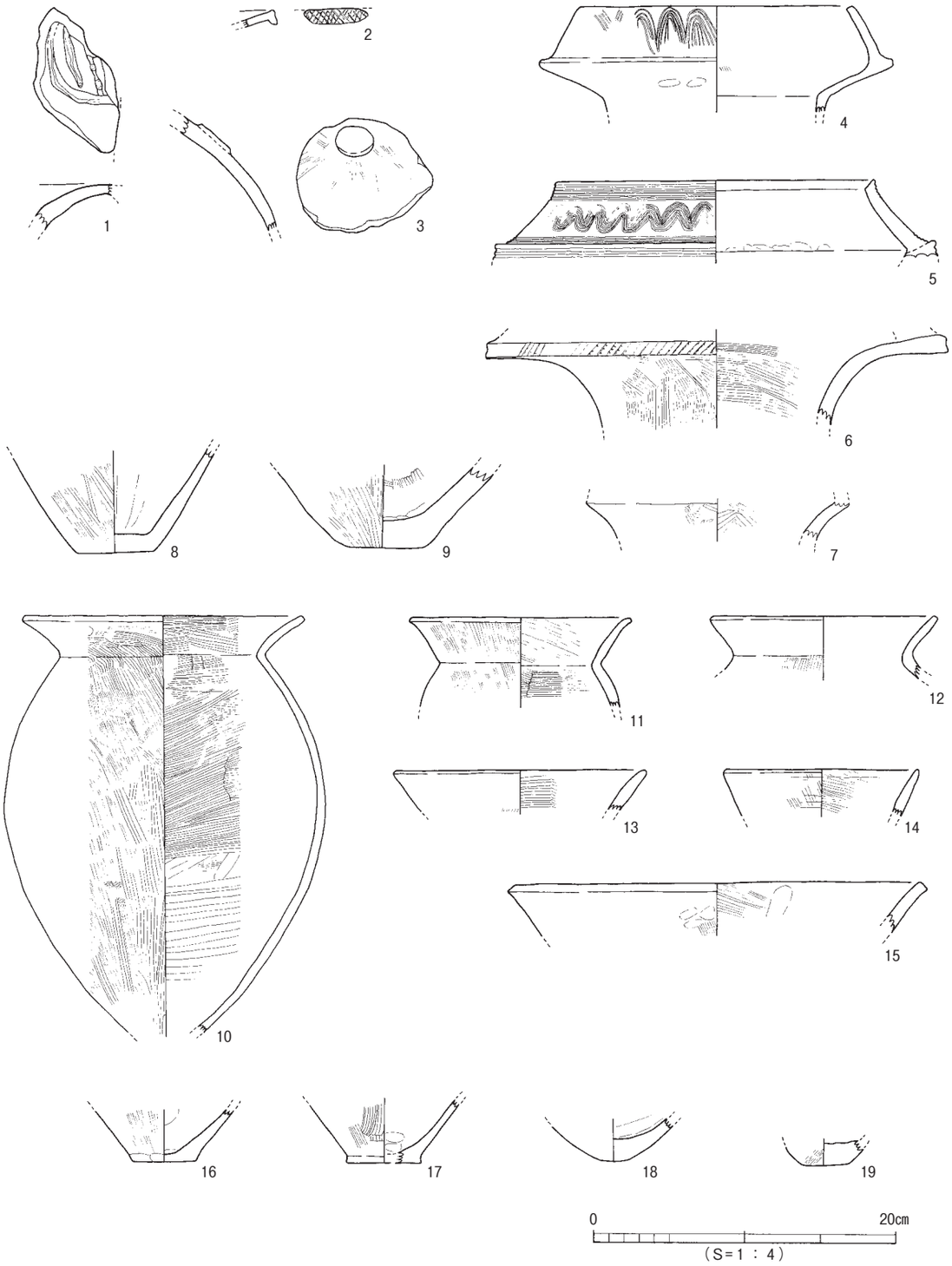


図８　ＳＢ２出土遺物（１）

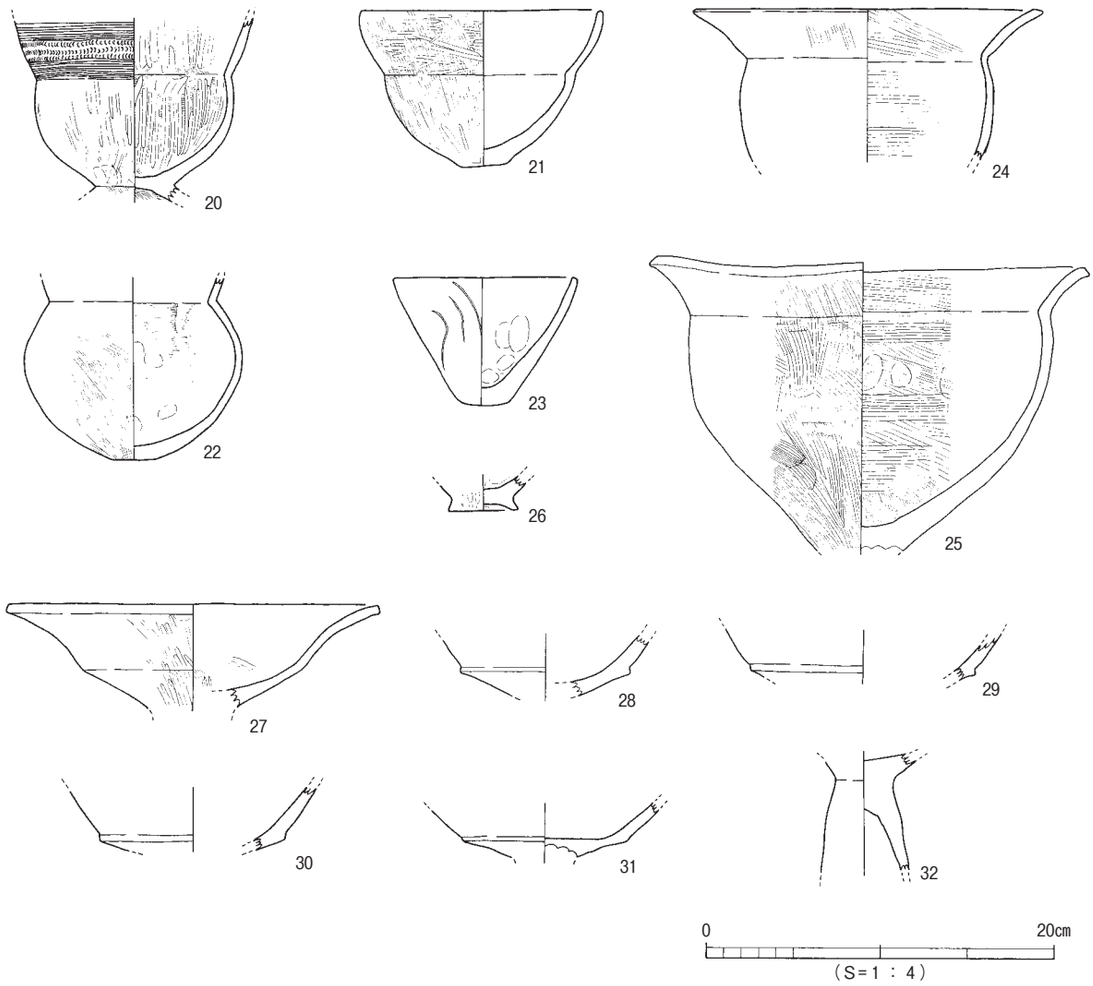


図９　ＳＢ２出土遺物（２）

るがほぼ完形、現況で器高16.9cm、口径24.5cmを測る。最大径21.8cmの胴部は、その張りを頸部直下に持つ。横撫でによる口端面を除いて口縁部、胴部すべての内外面を刷毛目調整されている。26は手捏ね状に成形された僅かな窪み底の底部である。

高坏（27～32）　27は挿入付加法の底部を持つ坏部で、外反しながら大きく外へ開く口縁部と坏底部との境に明確な稜を持たない。復元口径21.2cmを測る。28～31は坏口縁部と底部境の片で、いずれもシャープな稜を伴った段を持っている。32は挿入付加法による坏底部、脚部上端の片である。

石器

石庖丁（33・34）　いずれも緑色片岩を素材としたもので、直刃直背の長方形のものである。33は全長9.0cm、最大幅3.2cmで両側縁に紐がかりの抉りを持っている。中央よりもやや刃部寄りに穿孔が３ヶ所試みられているが、貫通しないまま放棄されている。入念ではないが両面を磨かれ、刃部は両面から研ぎ出されている。34は全長9.8cm、最大幅3.9cmで、これも両側縁に抉りを持つもので、刃部は両面から研ぎ出されているが､33のように稜を持った研ぎではなく､面の磨きと一体となった刃付けである。

鉄器

鉄鏃（35）　茎を欠く鏃身長7.6cmの柳葉形鉄鏃で、最大幅3.2cmを測る。現況では鏑は観察できない。

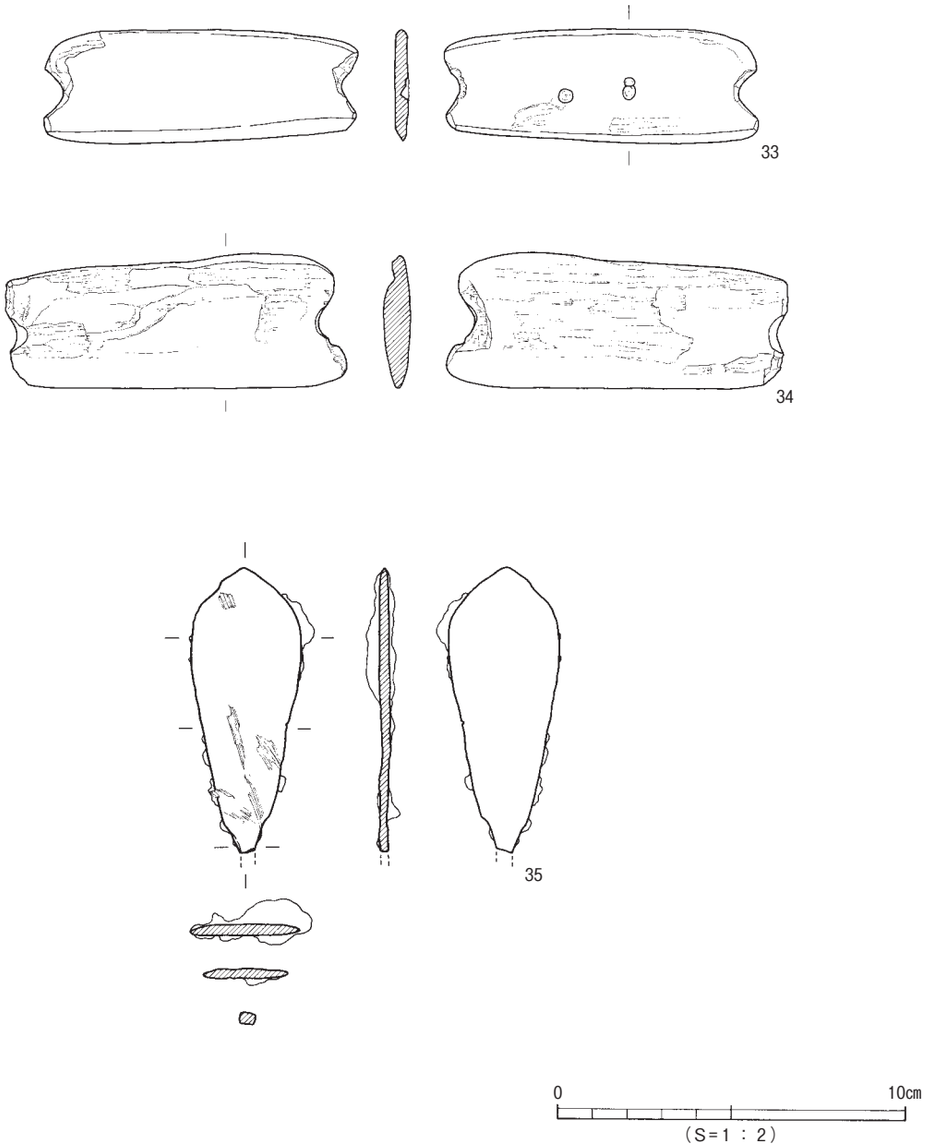


図10　ＳＢ２出土遺物（３）

茎部との境に小さな関がある。現況で重量21.0ｇを量る。

ｂ．円形周溝状遺構ＳＤ１・溝ＳＤ２（図11）

直径5.3mの円形に巡る溝ＳＤ１とこれの南北軸に交わって検出された直線溝という２基の遺構が検出されている。両者の前後関係については明確にできなかった。遺物の出土がないので、ＳＢ２以前のいつの段階のものかは判然としないが、埋土がＳＢ２と同色、同系統のものであるところから弥生時代の遺構として扱った。ＳＤ１は幅35～60cmのもので、深さ10cm程度の遺存、逆台形状の段面形を呈する。当平野では後期段階にこのような円形周溝状遺構が存在するので、形態・規模的にはこれらと同種のものといえる。

ＳＤ２は検出長4.5m、以南は調査区外へ延びる。幅35～50cm、深さ２～７cm程度のもの。ＳＤ１同様、

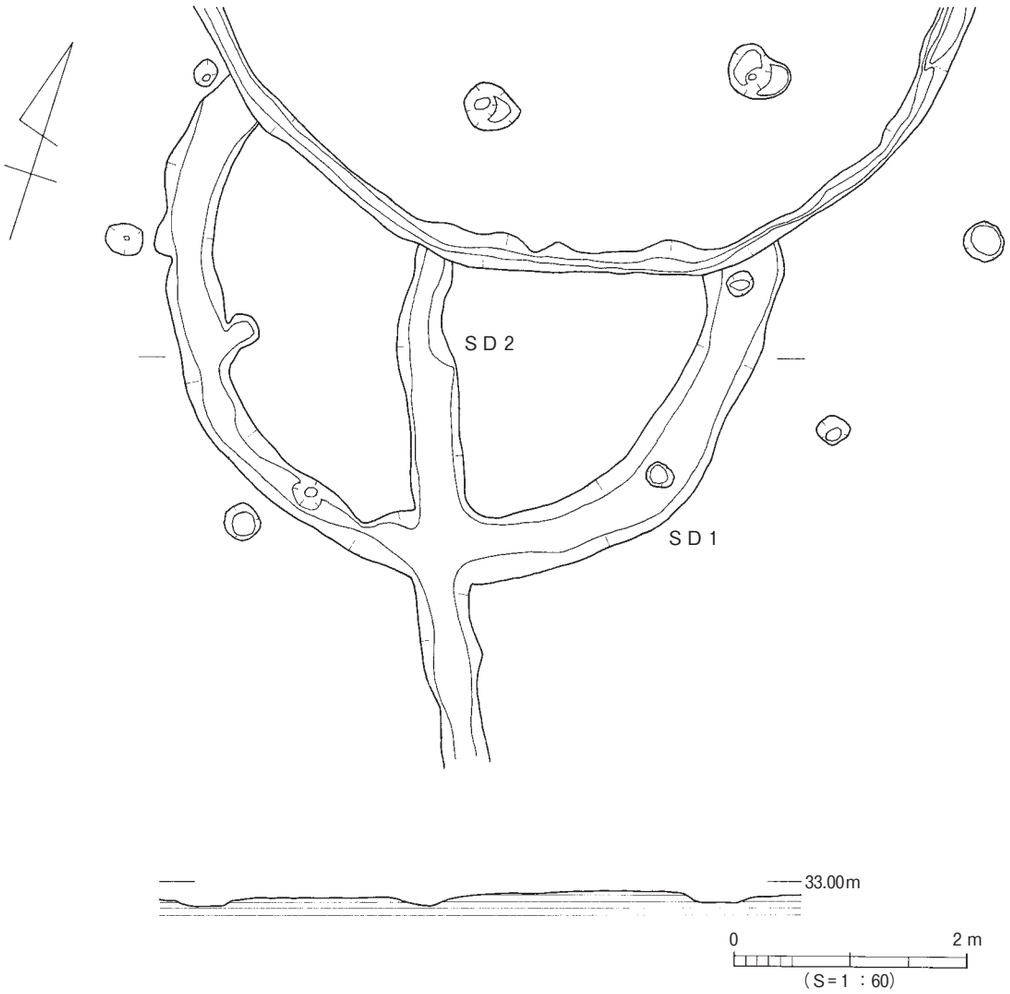


図11　円形周溝状遺構ＳＤ１・溝ＳＤ２

ＳＢ２以前のやはり後期段階のものと思われる。

２）古墳時代の遺構と遺物

ａ．竪穴建物

ＳＢ１（図12・14）

１区の南西端、円形周溝状遺構ＳＤ１から1.5mの位置で検出された。東西およそ4.3m、南北3.1mの隅丸長方形プランをなすが、南辺中央に図のような浅い円形の土坑状施設が付設されているので、この部分だけ弧状に約30cm突出したかたちとなっている。壁体は最も残りのよい部分で立ち上がり10cm程度、その内側に深さ５cm程の周壁溝が巡っている。床面には不規則な配列で深さ15cm程度の柱穴状の窪みがあるが、この建物に伴うものではなさそうで、無柱の建物である可能性が高い。

先述のようにこの建物の南辺中央には最深部で20cmを測る図のような不整形の窪みがある。この窪みを挟んだ両側に長さ0.9mの浅い小溝が周壁溝に垂直に交わる。出土した土師器のほとんどはこの窪みからのものである。

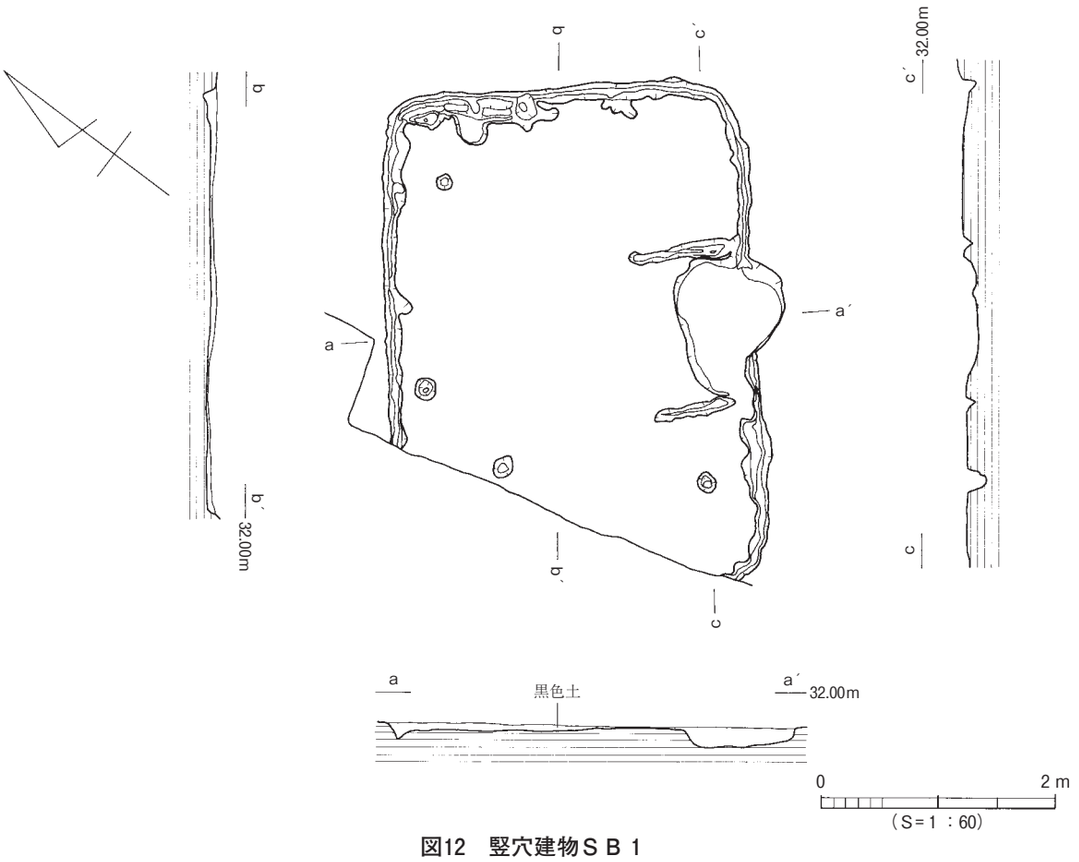


図12　竪穴建物ＳＢ１

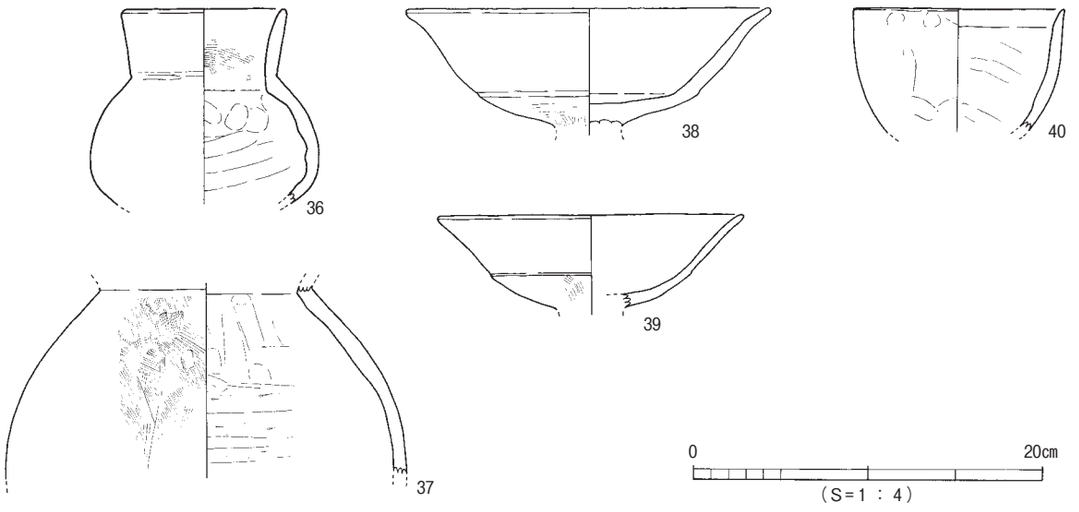


図13　ＳＢ１出土遺物

ＳＢ１出土遺物（図13）

土師器

壺（36）　偏球形の胴部と直口気味の口縁部を持つ壺である。器壁は比較的厚く、胴部内面には横方

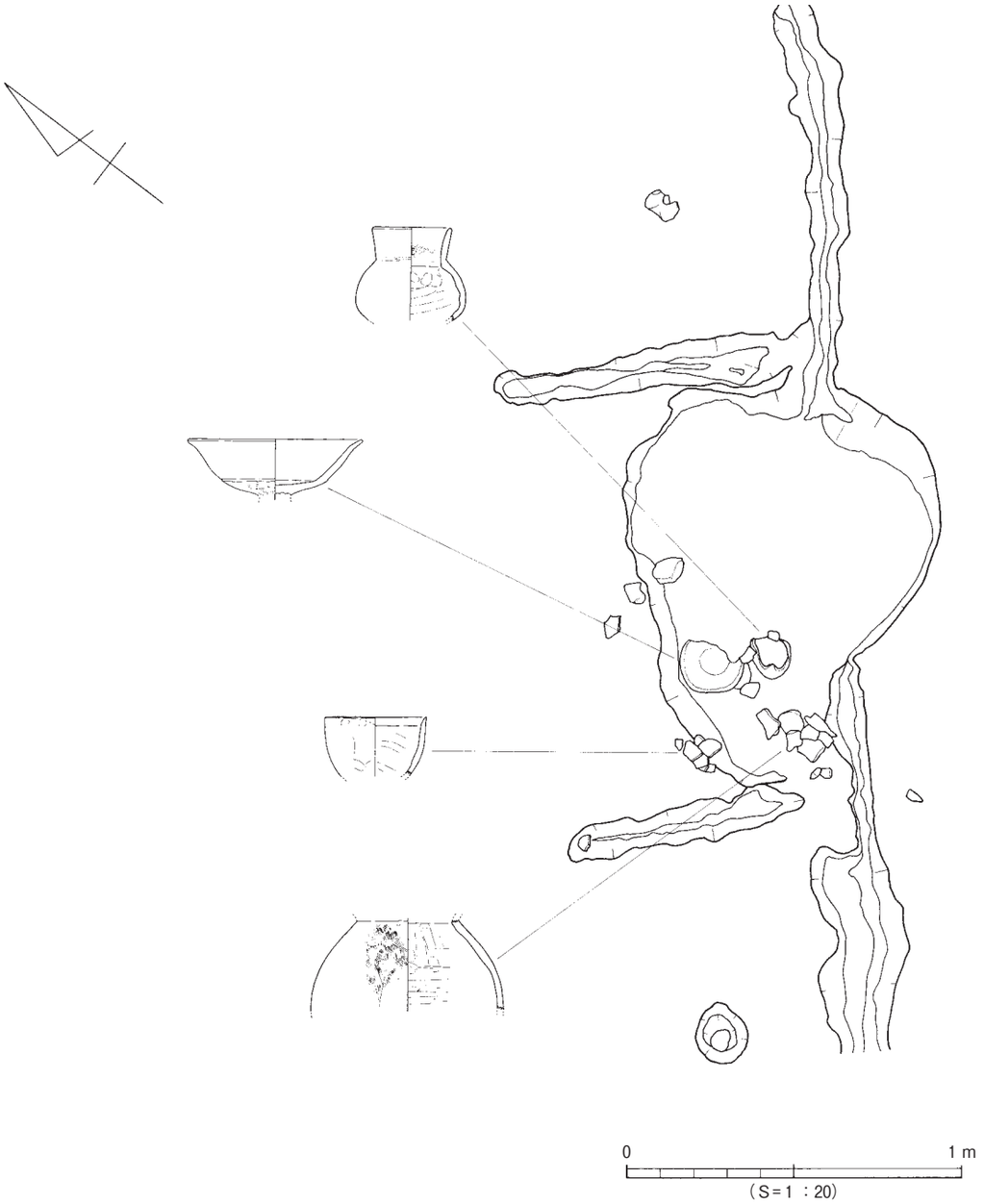


図14　ＳＢ１遺物出土状況

向の強い指撫での痕跡がある。

甕（37）　上胴部の片、外面を細かい刷毛目で調整される。内面の上位は縦方向の指撫で、以下を横方向に粗く削られている。

高坏（38・39）　38は口径20.8cmを測る坏部である。坏底部との境に不明瞭な稜をなし、口縁部が外反して広がっている。坏底部と脚部との組み合わせは挿入付加法によっている。39は復元口径17.4cm、やはり口縁部、坏底部境に不明瞭な稜を持っている。

鉢（40）　深めのボウル状の小型鉢、口縁部内面を稜を持って横撫で、端部を尖り気味に収めている。

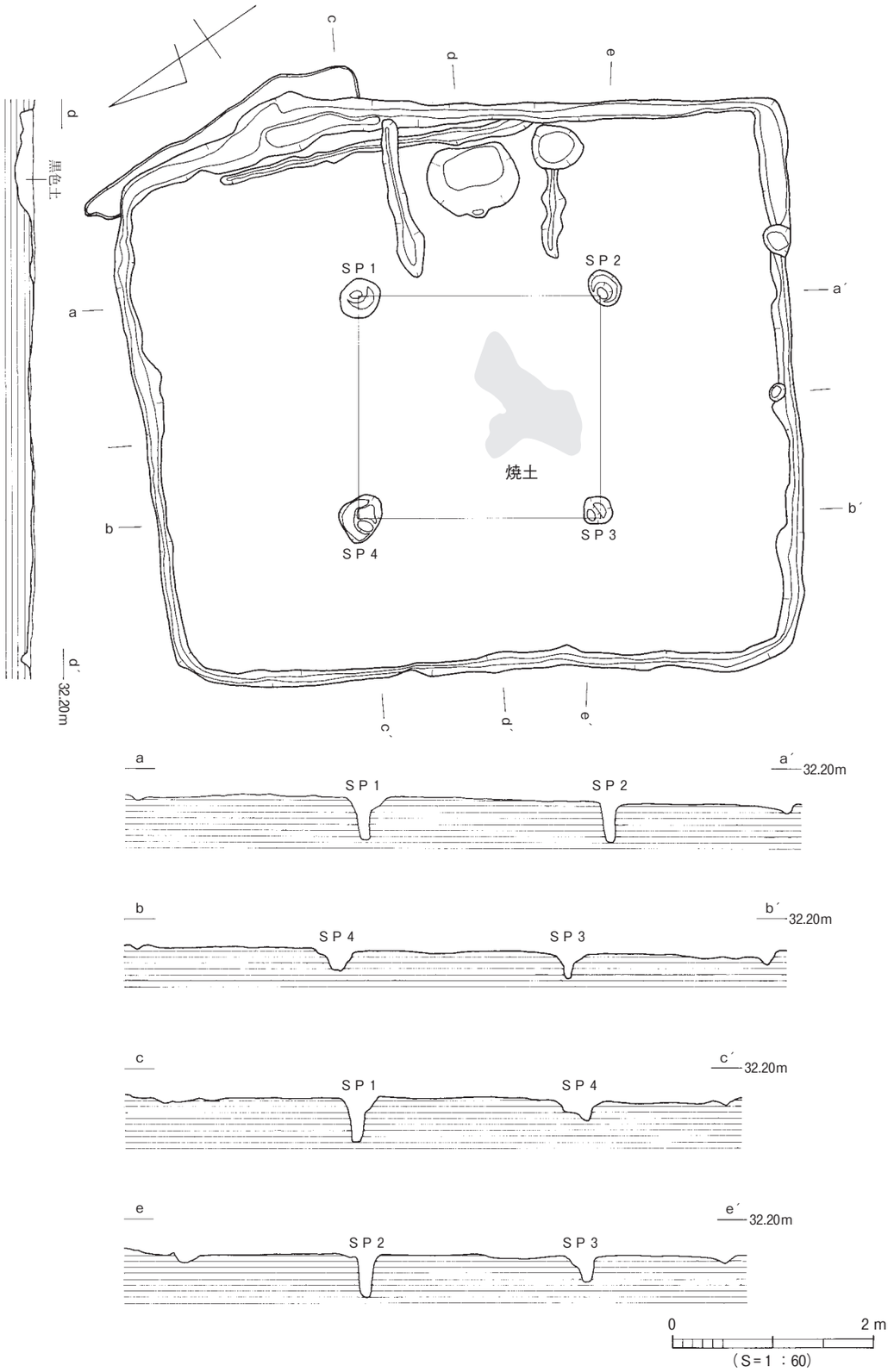

c
d
e
d
黒色土
SP 1
SP 2
a
a´
焼土
b
b´
SP 4
SP 3
d´
32.20m
c´
d´
e´
a
a´
32.20m
SP 1
SP 2
b
b´
32.20m
SP 4
SP 3
c
c´
32.20m
SP 1
SP 4
e
e´
32.20m
SP 2
SP 3
0
2 m
（S＝1 ：60）

図15　竪穴建物ＳＢ３

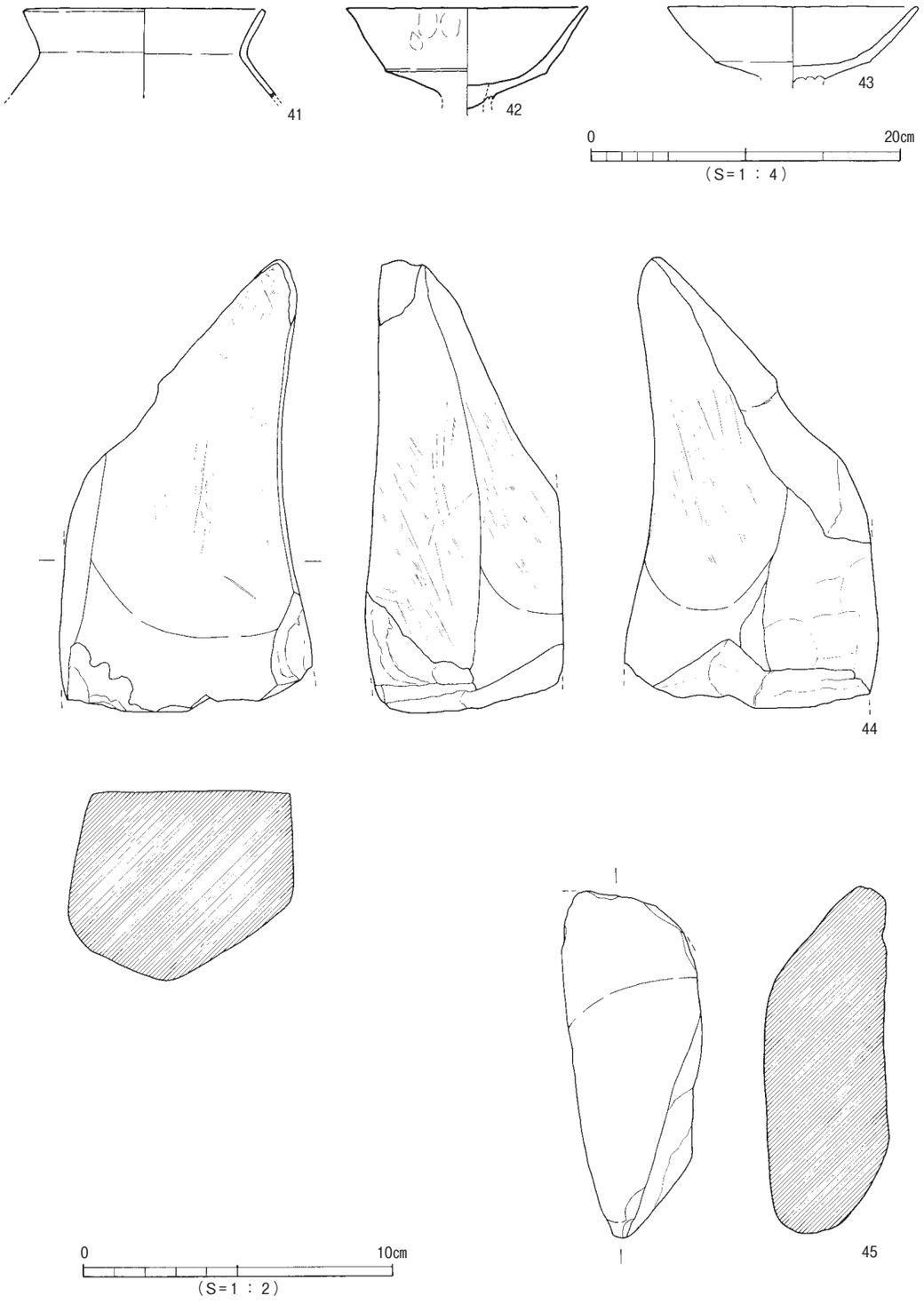


図16　ＳＢ３出土遺物

ＳＢ３（図15）

東西5.7m、南北6.5mと若干南北に長い長方形プランをなす建物である。周壁の立ち上がりは最大７㎝、立ち上がりとしては残ってない部分がほとんどで、周壁溝の痕跡によってプランが確認されたという検出状況である。主柱穴は４本、柱間東西2.2m、南北2.4mと建物平面プランを反映してやや南北に長い柱構成である。これらの柱穴で囲まれた内側のＳＰ３、ＳＰ４寄りの床面に被熱痕跡が確認されている。建物東辺中央部の周壁溝に接する床面には90×60㎝の楕円形プラン、深さ20㎝の土坑を持ち、その両横に長さ1.5m程度の小溝がある。溝の深さは最深で７㎝と非常に浅い。南側の溝は直径50㎝の土坑もしくは柱穴に切られた状態で検出された。

ＳＢ３出土遺物（図16）

土師器

甕（41）　復元口径14.4㎝を測る口頸部、土坑内出土のものである。接合しない胴部片もかなりあるが、いずれの部位も非常に薄く成形されている。器表面はほとんど摩滅しているが、胴部外面の一部に刷毛目調整が観察できる。

高坏（42・43）　いずれも坏部である。42は北側の小溝からの出土で、口径15.5㎝を測る。坏底部と口縁部の境に明確な稜を持ち、口縁部は43に比べるとあまり大きくは開かない。脚部との組み合わせは、円板充填によっている。43は南小溝を切る穴からの出土であるが、住居出土のものとして採りあげられているのでここで扱った。坏底部、口縁部境の稜は鈍く、口縁部が大きく開くだけ坏部は浅い。これも充填による組み合わせである。復元口径16.0㎝を測る。

石製品

砥石（44）　陶石を素材とする砥石の破損品で、断面形は不整の五角形、５面のうちの４面を使用している。使用されていない１面には、成形時の加工痕が観察できる。

磨り石（45）　小破片であるが、不整形の砂岩自然石の１面を磨った痕跡が観察できる。被熱痕跡がある。

ＳＢ４（図17）

１区北端近くで検出された小型の竪穴建物跡と思われるもので、2.4×2.8mの隅丸長方形プランをなす。周壁溝は持たない。建物東辺中央の土坑を除いて、立ち上がり付近の床面の各所に柱穴や土坑状の窪みがあるが、いずれも４～７㎝程度の深さしかないところからすると床面の凹凸とみたほうがよく、無柱の建物であったと考えられる。東辺の土坑は直径60㎝の円形プランで、深さ35㎝、断面逆台形状をなす。この穴からの遺物の出土はなく、主に建物西辺付近の床面に散った状態で破片が出土したものである。

ＳＢ４出土遺物（図18）

弥生土器

高坏（46）　混入と思われる復元口径19.4㎝の口縁部片である。坏底部との境の不明瞭な稜が確認できる。この稜以下の外面と、内面には刷毛目調整がされている。

須恵器

坏（47・48）　蓋47は比較的低い天井と、口縁部との境に稜を持つもの。天井部外面のほとんどを削っているが、中央付近に削り残しの粘土小塊が残っている。口端面は段を持った傾斜面をなしてい

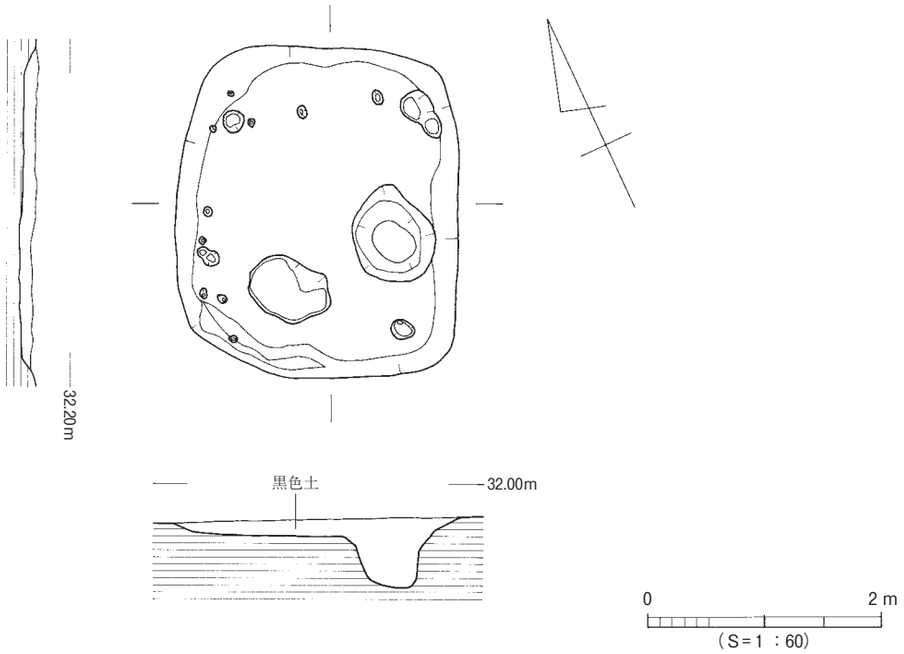


図17　竪穴建物ＳＢ４

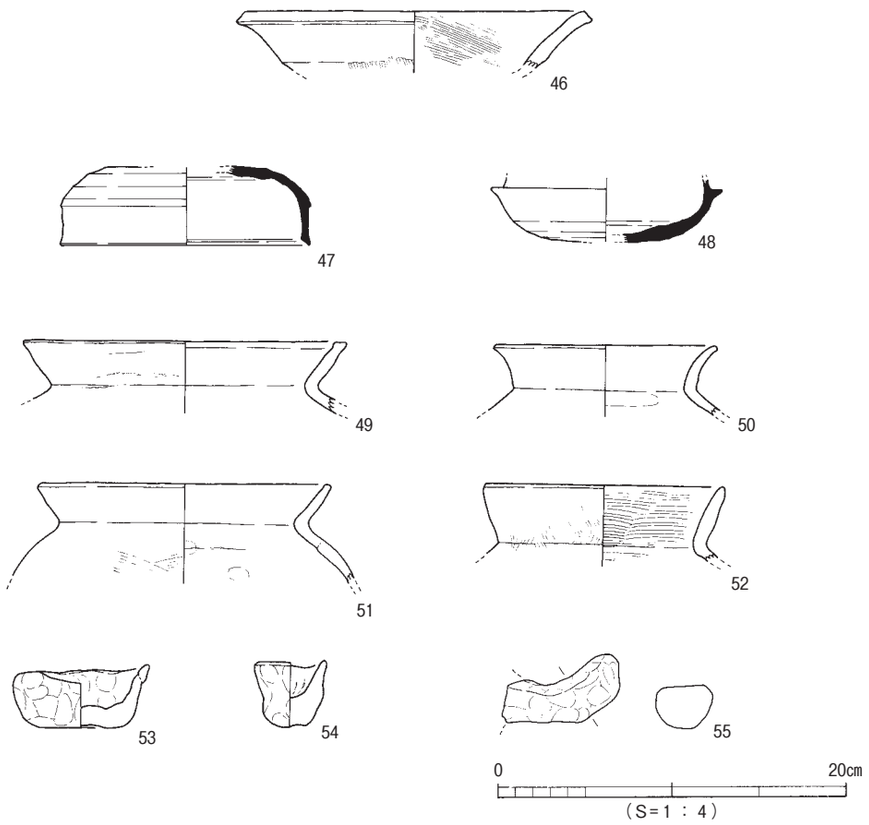


図18　ＳＢ４出土遺物

る。口縁部を欠く身48は、底部の３／４の範囲を削られている。

土師器

甕（49～52）　いずれも甕の口頸部片で、口縁部が内湾気味に開く49・51と、外反しながら開く50、直線的に開く52がある。

鉢（53・54）　手捏ねによる成形のミニチュア品２点である。

把手（55）　甑もしくは鍋の把手。

ｂ．表採遺物（図19）

弥生土器

壺（56）　口頸部片、口縁部外面に粘土帯を貼り、頸部との境に段を持つ。横撫でによる中窪みの口端部は上下端に刻み目を施される。刻みは上端が大きくしっかりとしているのに対し、下端のそれは浅く細かい。外面口縁部を縦、段以下の頸部を斜め刷毛目で調整し、内面を磨いている。西南四国の影響を受けた壺、前期後半段階のものか。

甕（57・58）　57は口頸部の小片。水平に貼り付けられた断面三角形の口縁部は、上面に２本の平行沈線による山形文を持つ。また、口縁部直下の頸部外面には平行沈線が４条まで確認できる。中期初頭のものである。58はやや窪み底の底部、外面を縦方向に丁寧に磨かれている。中期前半頃のものか。

鉢（59）　緩く外反する短い口縁部を持つ鉢で、器壁を薄く成形され、内外面を磨かれた精製品である。中期中頃のものであろう。

土師器

鍋（60）　中世、三足土釜の足の部分の片である。

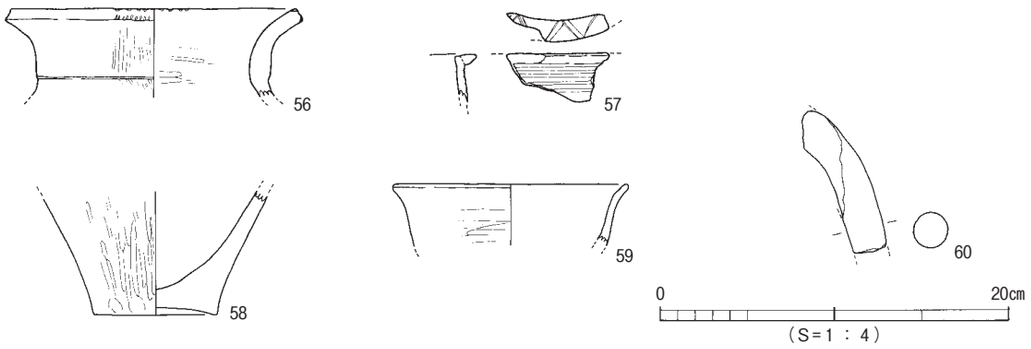


図19　１区表採遺物

（３）２区の調査

ａ．流路

ＳＲ１（図３、20）

調査区の東方で流路が確認されている。計６本のトレンチを設定、さらにこれらを拡張するかたちでトレンチ間をつないだ調査区となっている。流路幅は３～４ｍ、調査された総延長は22ｍ、北東から南西方向に流れる流路である。これらのトレンチのうち、Ｔ１、Ｔ２の土層を図示しておく。

図20　2区Ｔ１、Ｔ２土層図

ＳＲ１出土遺物（図21～23）

縄文土器

深鉢（61） 晩期後半の深鉢､頸胴境の片。横撫でされた頸部には平行沈線による斜線文が３条施され、以下の胴部は削られている。

弥生土器

甕（62～65） 62は口頸部の小片。緩く折り曲げられた口縁、その直下の頸部外面には６条のヘラ描

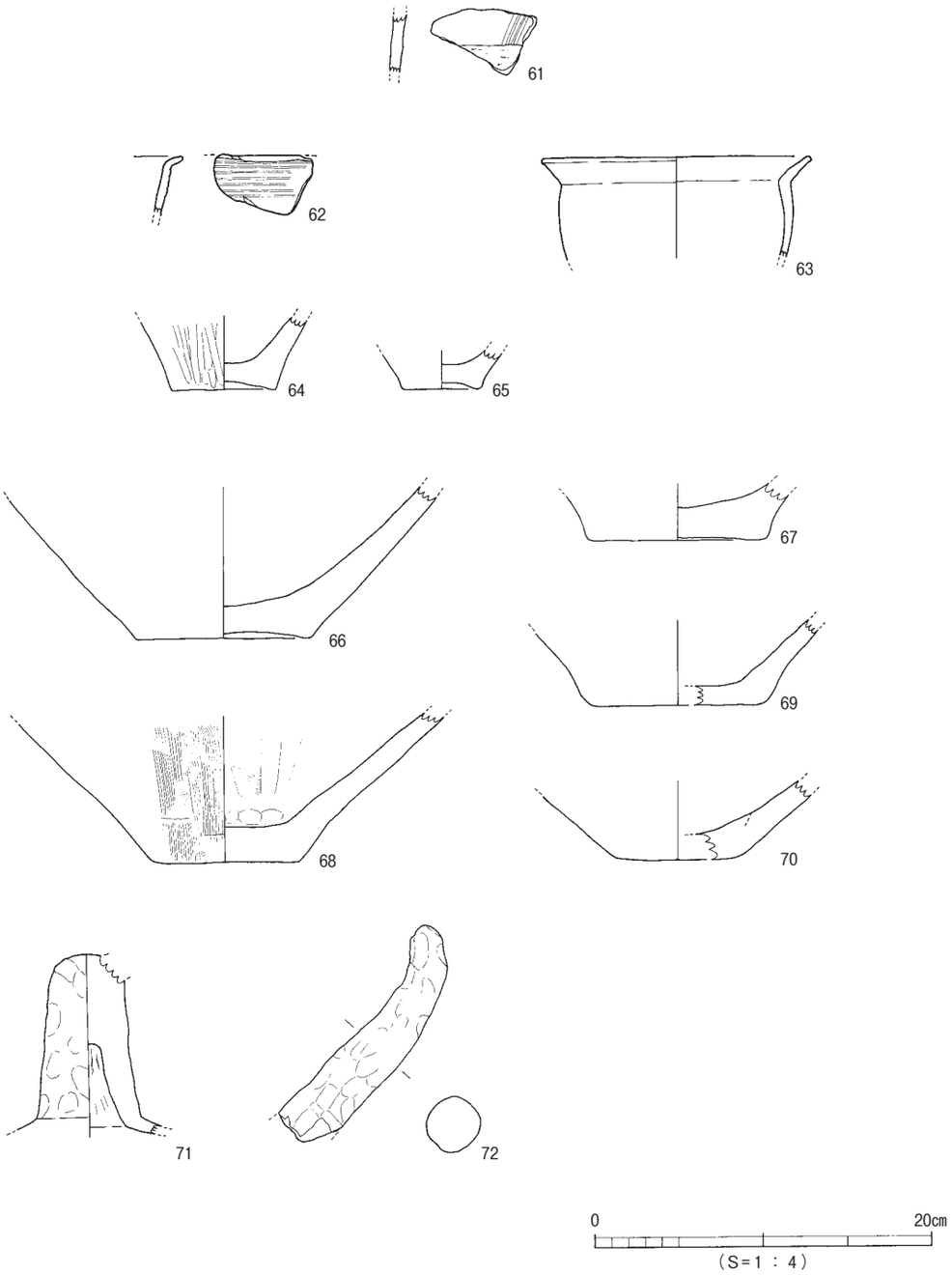


図21 ＳＲ１出土遺物（１）

沈線が施されている。前期末のもの。63は後期後半の甕、口頸部～上胴部の片で、胴部外面に叩きの痕跡を残している。内面に稜を持って折り曲げられた口縁は端部を丸く収めている。内外面には煤が付着している。若干の窪み底の底部２点のうち、64は中期、65は後期のものである。

壺（66～70） いずれも底部で、平底あるいは僅かな窪み底になるものである。形態や胎土からすると、やや大きめの長石粒を多く含む66・67が前期～中期、その他が後期のものと思われる。

支脚（71・72） 71は１本指の支脚で指の部分と裾を欠いている。72は大型支脚の指片、現状での長さ14.5cmを測る。

須恵器

壺（73・74） 73は大型壺の頸部片、外面に２条の沈線を持つ。74は復元口径12.0cmの口頸部で、口端部は丸みを帯びた平坦面をなす。端面直下には断面三角形の突帯を持ち、頸部中位には平行沈線を２条施されている。５世紀代のものであろう。

甕（75・76） 75は口縁部片、大きく開き端部に丸みを帯びた面をもって収める。端部をやや離れた位置に断面三角形の突帯を１条貼り付けている。初期須恵器といわれる段階の甕である。76は大型甕の頸部片、現状では２本の沈線で区画された３区画のうち、上位の２区画に精緻で均整のとれた櫛描波状文を施している。堅緻な焼成で、これも75同様古い段階の甕である。

鉢（77） 偏球形の胴下半～底部の片である。灰白色の瓦質に近い焼成、平安時代後期頃のものと思

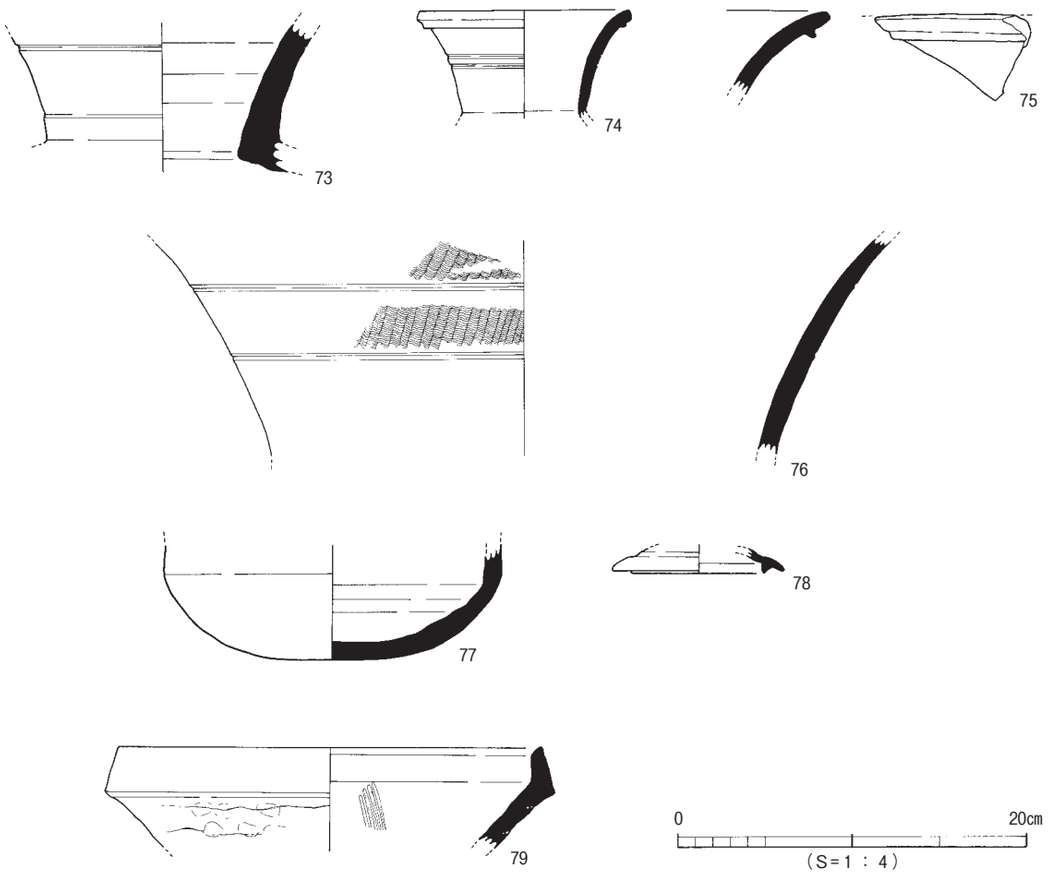


図22　ＳＲ１出土遺物（２）

われる。

坏蓋（78） 内面にかえりを持つ蓋の口縁部小片。

陶器

擂鉢（79） 備前擂鉢の口縁部、外面に稜を持って屈曲し、口縁部が内傾して立ち上がる。４本単位の擂り目が口縁部直下まで施されている。室町時代後期のもの。

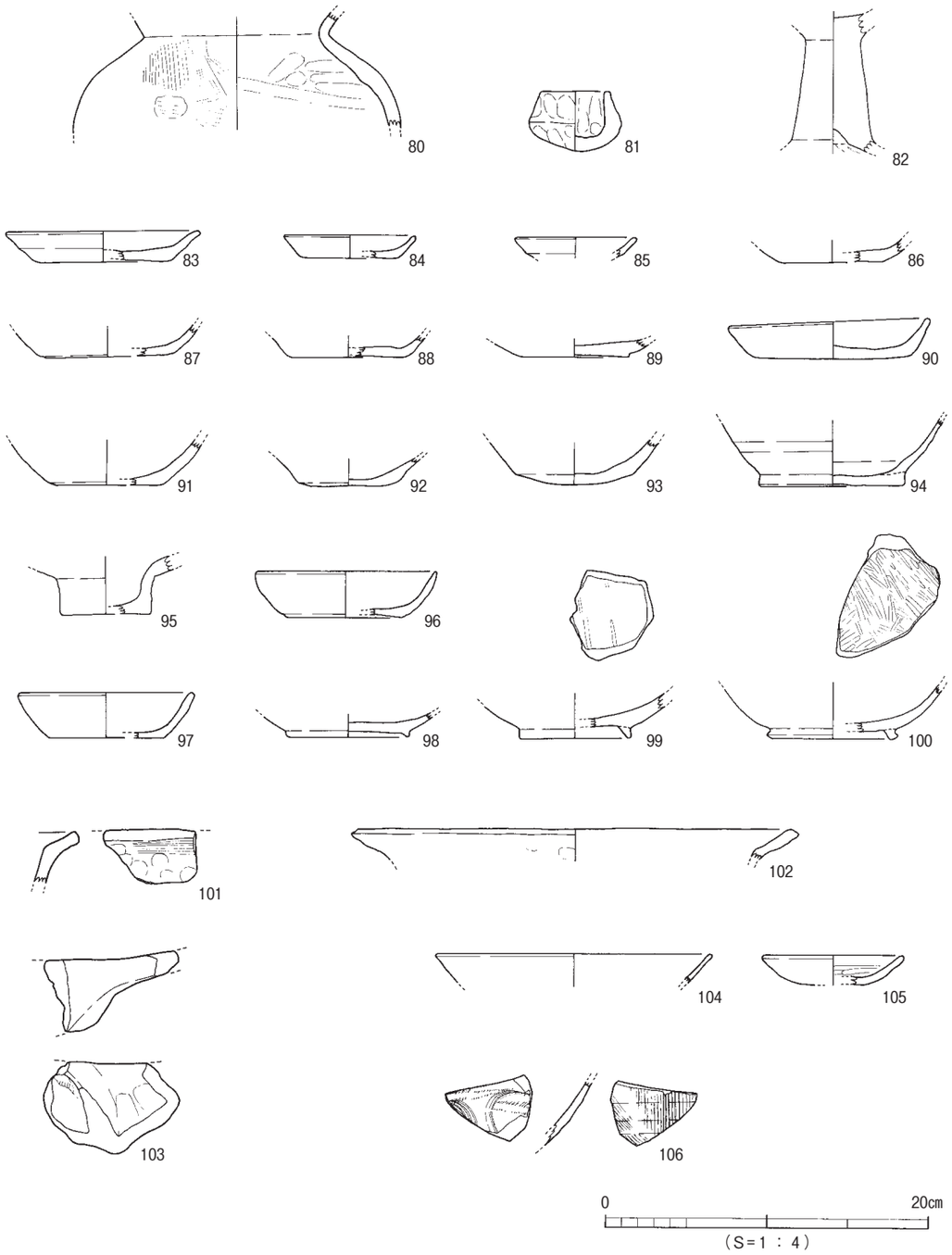


図23　ＳＲ１出土遺物（３）

土師器

壺（80・81） 80は口端部を欠くが、やや締まった頸部によく張った胴部を持つもの。内面に粘土帯の接合痕と指撫でが顕著である。外面は粗い刷毛目で調整されている。81は手捏ねによるミニチュア壺。どちらも５世紀代のものであろう。

高坏（82） 中実の脚柱部。６世紀代のものか。

皿（83～90） 回転台成形による皿の一群である。83は底部の切り離し痕がヘラ切りによるもので、器高1.9㎝、復元口径11.8㎝を測る。後述するヘラ切りの坏同様赤色塗彩され、また外面に２段の横撫でによる凹凸が残っている。10世紀代のもの。84～89のうち86～88の外底面には回転糸切り痕が観察できる。その他もおそらく糸切りによるものと思われる。小片ばかりなので詳細な時期は不明である。90は器高2.4㎝、口径12.0㎝、外底面の切り離し痕を入念に撫で消しているので切り離しは判然としないが、ヘラ切りか。内底面にヘラ先を用いたような細い回転撫での痕跡が残っている。16世紀頃のもの。

坏（91～97） これも回転台成形の坏で、91～94が底部ヘラ切り離しによるもの、95～97が回転糸切りによるものである。前者には円板高台となる94と単純な平底となる91・92、底部がやや凸面をなす93がある。このうち93には赤色塗彩が確認できる。先ほどのヘラ切りの皿同様10世紀代のものである。95は円柱状の高い底部を持つもので、外底面の切り離し痕は撫で消されている。96は器高2.9㎝、口径11.1㎝、底部回転糸切り、97は器高2.8㎝、復元口径11.0㎝の底部静止糸切りによるものである。95・96が13世紀代のもの、97は16世紀のものと考えられる。

椀（98～100） 黒色土器Ａ類椀の底部片である。98は断面三角形の低い高台を貼り付けられるもので、高台径が比較的大きい。10世紀。99・100は断面方形の貼り付け高台を持つもので、99の内面は漆黒色によく磨かれている。12世紀代のもの。

鍋（101・102） 101は比較的器壁が厚く、内面に稜を持って口縁部が短く外上方に開き、端部に面を持っている。口端部やその付近の内面を除いて刷毛目調整されている。102はやや薄手の口縁部片である。13～14世紀頃のものか。

竈（103） 置き竈の焚口付近上端、向かって右側の廂の曲げ部分である。これも13～14世紀頃のものと思われる。

瓦器

椀（104） 和泉型と思われる口縁部小片。

皿（105） 復元口径8.4㎝の皿、内面に磨きが僅かに看取できる。

磁器

碗（106） 同安窯系青磁碗の体部片である。外面に櫛目の斜線文、内面にヘラ状の施文具と櫛状の施文具を用いた花文を施している。釉はやや黄色味の強い飴色ガラス質である。13世紀中頃～後半のもの。

ｂ．集石遺構（図24）

調査区南東端近くで検出されたもので、流路検出面上に載った状況である。15～20㎝大の河原石が最大幅1.2ｍ、長さ5.2ｍの範囲で検出された。一部調査範囲外へ続いており、本来帯状に存在していたものが削平により部分的に残っていたものと思われる。土層との関係がよくわかっていないが、水田造成に伴う排水暗渠の可能性が高い。この集石中より以下の土師器や瓦の出土がみられた。施設を設

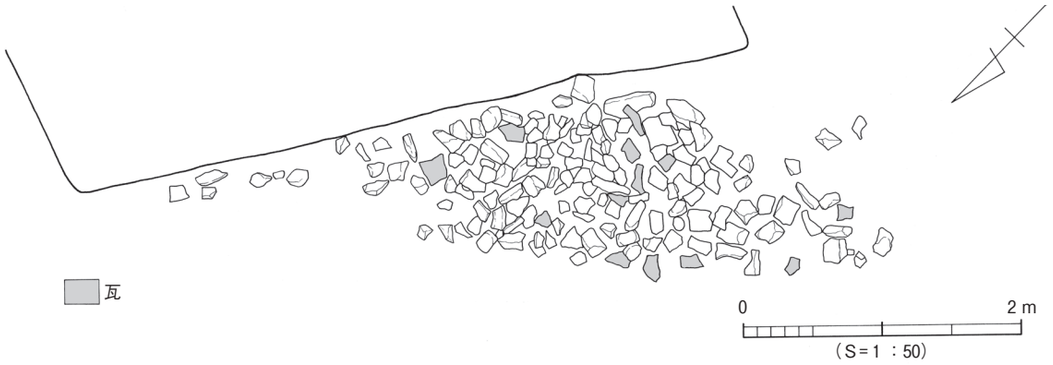


図24　2区集石遺構

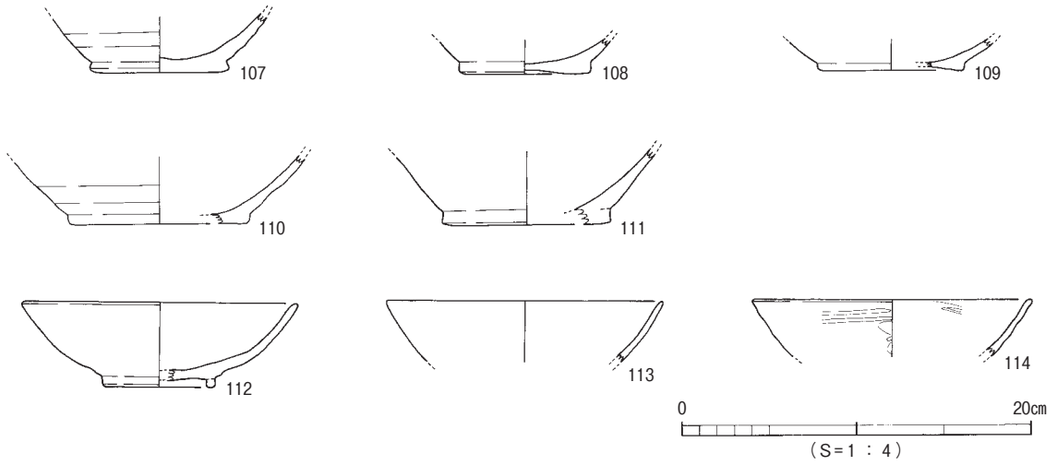


図25　集石遺構出土遺物（1）

置する際に他所から持ち込んだ石や客土に混在していたものであろう。瓦からすると南東600mの来住廃寺創建あるいは存続時のものがすべてであるところから、この付近から運ばれたものと思われる。

集石遺構出土遺物（図26～31）

土師器

坏（107～111）　回転台成形円板高台の坏で、底部ヘラ切り離しによるものである。このうち94、110・111に赤色塗彩が確認できる。10世紀代のものである。

瓦器

椀（112～114）　112は器高4.9cm、復元口径15.6cm、焼成が甘く口縁部付近は内外面ともに乳白色の色調を呈している。貼り付けによる輪高台は接地面を丸く収める。113も同様、焼成の甘い口縁部片、いずれも在地のもの。114は和泉型、13世紀頃のものの口縁部である。

瓦

軒平瓦（115・116）　115は最大厚3.3cmの瓦当面に四重弧文を配するもので、顎は直線に近い曲線形である。弧文は角ばっており、断面台形をなす。凹面には粘土板巻き上げ痕と布目が残っているが、最終的には軽く撫でられている。凸面は横撫でされている。奈良時代中頃のもの。116も曲線顎形態のもので瓦当面を欠いているので、瓦当文様は不明である。凸面の部分的な剥離や横断面の露出により、

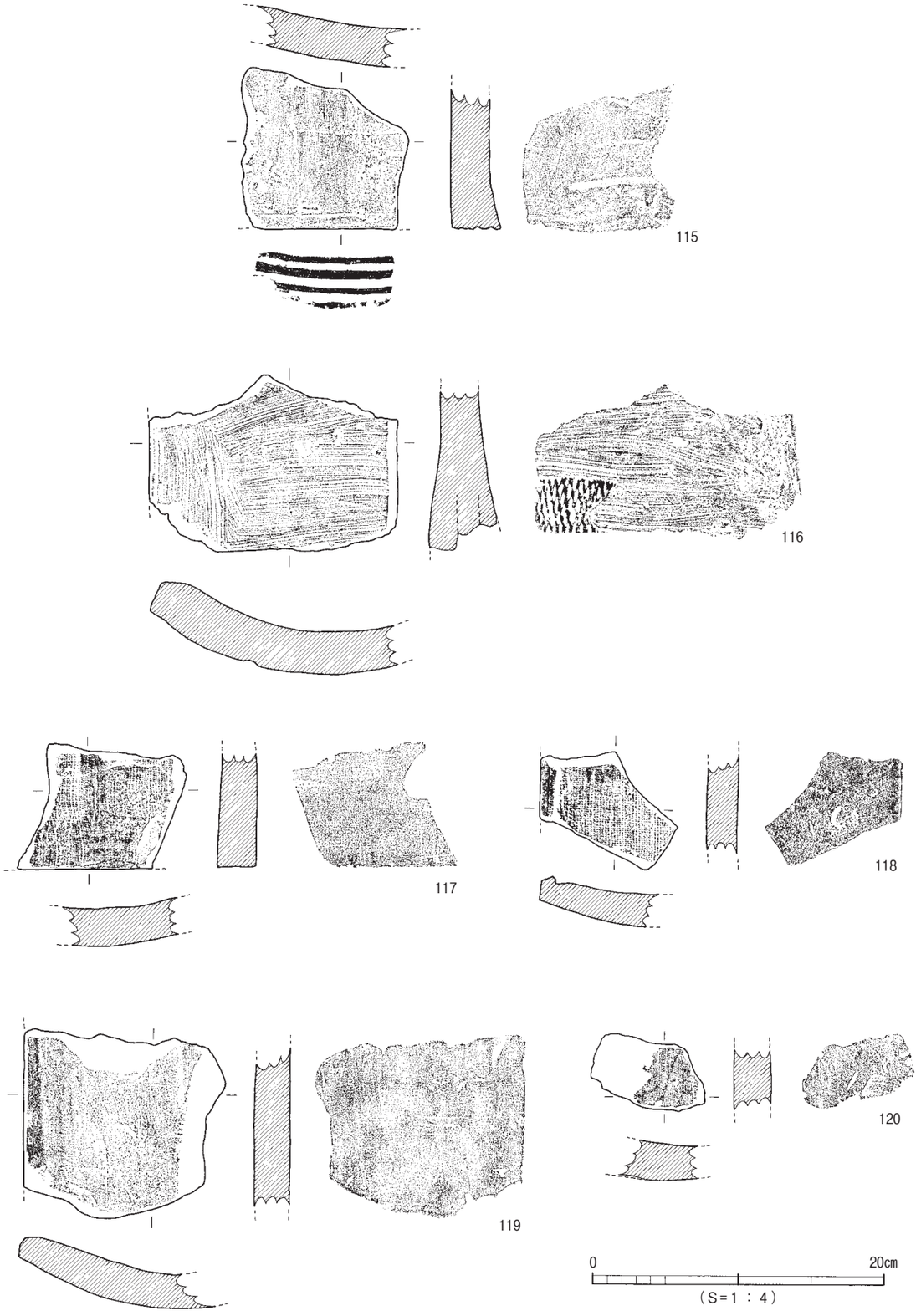


図26　集石遺構出土遺物（2）

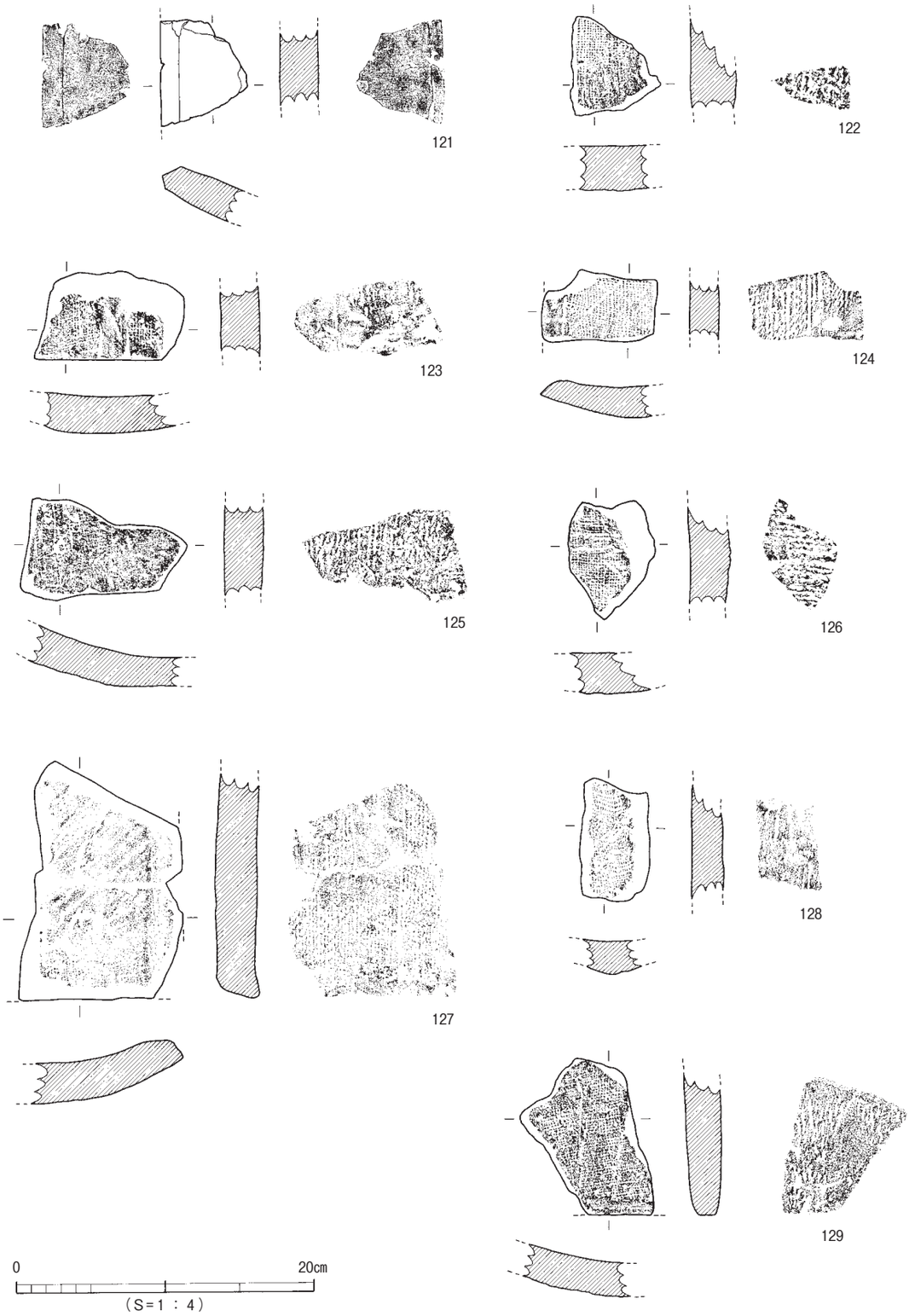


図27　集石遺構出土遺物（3）

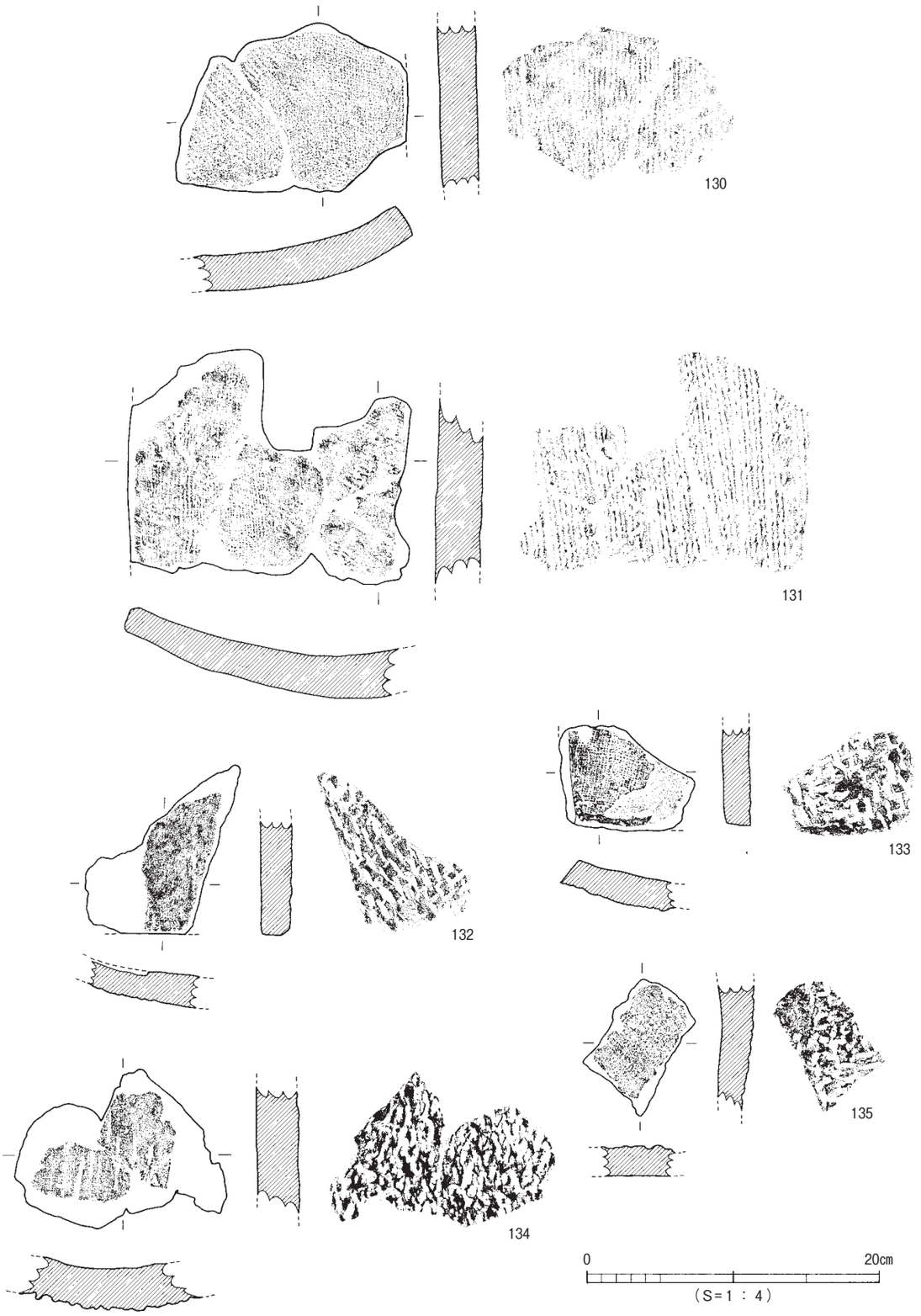


図28　集石遺構出土遺物（4）

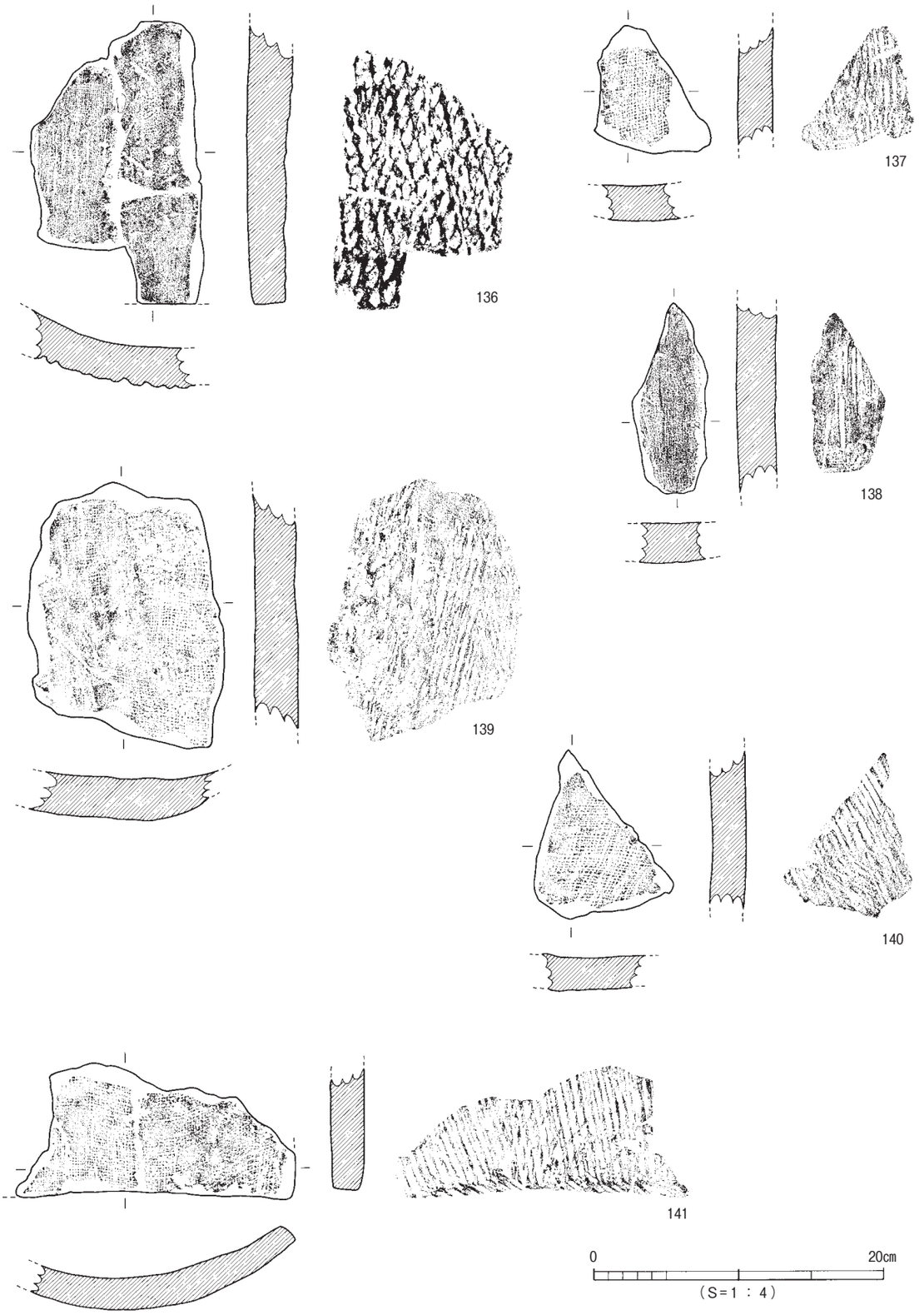


図29　集石遺構出土遺物（5）

図30　集石遺構出土遺物（6）

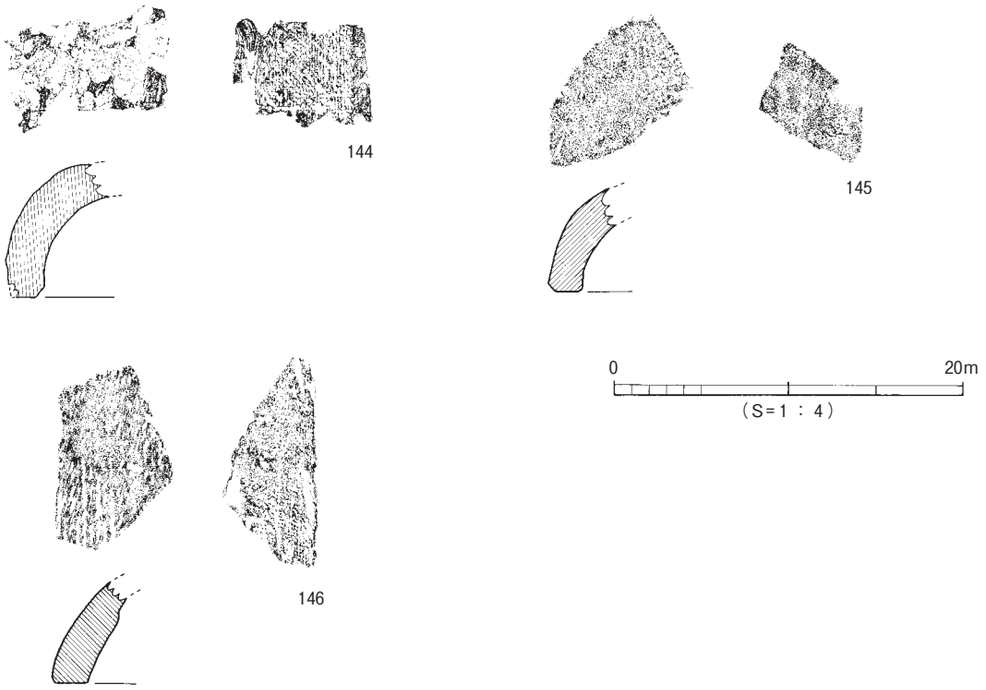


図31　集石遺構出土遺物（7）

細い縄目の平瓦両面に粘土板を貼り付けた3層構造による包み込み成形が仔細に観察できる。凹面は横撫でされているが、側端部を面取りした後、その付近を縦方向に撫でている。凸面は粗い横撫で、側端面も撫でられている。奈良時代末～平安時代前半期のもの。

平瓦（117～143）　117～121は凸面無文のものである。117は広端側が生きている片で、灰色、硬質の焼成で、端面・凸面ともに丁寧に撫でられている。118も同様の片であるが側端が生きている。凹面側端に型はずしの際の段が削られずに残っており、この段の内側にも布目がある。凸形一枚づくりの痕跡である。119･120は灰白色気味のやや甘めの焼成、部分的に燻されたような黒味を呈する個所がある。一枚づくりと思われる119の凹面には模骨の痕跡が残っており、側端部は面取りされている。121は暗灰色硬質のもので、凹凸をなさない平坦な両面ともに平滑に仕上げられている。側端は断面不等長の三角形に鋭く仕上げられている。122～131は凸面細縄叩きによるものである。焼成の甘い123、130、132は橙色、その他は灰白色～灰色の色調を呈している。127の凸面には糸切り痕が残っている。132～138は粗縄叩きのもの、すべて灰黄色～橙色の焼成となっている。このうち133は狭端部のコーナー部分の片である。137～143は平行条線による叩きを持つもので、140・143が狭端部側、142が広端部側である。桶巻づくりの143の凹面には糸切り痕がある。これらの平瓦は、おおよそ7世紀後葉～8世紀中頃、近隣に所在する来住廃寺の創建あるいはこれを前後する段階のものである。

丸瓦（144～146）　144は粗縄叩き、145は無文、146が細縄叩きによる小片で、146は玉縁付近の部位と考えられるものである。

４．まとめ

調査では、弥生時代～古墳時代にかけての竪穴建物、溝、周溝状遺構といった集落関連の遺構と、遺物を包含する流路や、集石といった遺構の検出が主なものであった。

弥生時代では、円形竪穴建物１棟、溝、円形周溝状遺構それぞれ１基ずつが調査された。竪穴建物ＳＢ２は、出土遺物から後期後葉の遺構である。削平され、遺存状況はあまり良くはなかったが、直径７ｍ内外と比較的大型のもので、小柱穴２基を伴った入り口と考えられる突出部が付随していた。主柱穴は５本という当地においてはあまり例をみない構成である。床面中央よりやや偏した位置に長方形の炉を持つが、この時期に散見されるような近接した位置の副次的炉のような施設は持たない。この建物に切られて円形周溝状遺構が１基検出された。遺物の出土はなかったが、埋土が似通っているところから、切っている建物とさほど時期差はない後期でも後半段階のものと考えられる。この種の遺構は、方形のものも含めて祭祀的遺構と考えられているが、完形に近い遺物を伴っている場合が多いことからすると、本調査検出の遺構では削平とともに遺物も失われたのかもしれない。

古墳時代では、３棟の竪穴建物が検出されている。うち１棟は一辺７ｍ近い比較的大型の長方形ＳＢ３、また１棟は４ｍ前後の隅丸長方形ＳＢ１、加えて３ｍ以下の隅丸長方形という小型で無柱のＳＢ４であった。およそ５世紀の中頃から後半の建物群である。そのいずれもが南北に長いプランで、その東辺中央部の立ち上がりに接した位置に屋内土坑を持っている。そのありかたにはふたとおりあり、前２者では土坑の両脇に小溝を伴った浅い施設で、内部から土器の出土がある。一方、最も小さいＳＢ４では小溝を伴わず深さのある土坑となっており、遺物の出土はみられなかった。この時期、方形ないし長方形の建物の一辺に屋内土坑を持つ例はしばしばみられるが、本調査のＳＢ１・３のように小溝を伴う例は少ない。土坑自体も浅く、溝を利用したなんらかの上部構造とセットになった施設であったのかもしれない。また、無柱のＳＢ４とその屋内土坑については、簡易な小屋がけを施した貯蔵施設のようなものを想定することもできよう。

２区で調査された流路はその出土遺物から13～14世紀には埋まったものである。その後、水田排水のための暗渠施設が設けられ、その一部が集石のような状態で残ったものと考えられるが、この施設のための転石をいずれかから持ち込んだ際に、これらとともに古代の瓦がもたらされたものと思われる。その搬入先については、現在のところ調査地南東0.7㎞の「来住廃寺」の中核施設である金堂周辺が最も有力な候補である。この古代寺院は、７世紀末頃に創建され、以後３世紀近く存続したと考えられているもので、近隣ではこの地以外に報告されたような瓦を多量に出土する遺跡は存在していない。ダイレクトにというのは距離からして考え難いので、何らかの理由で近隣に移動・集積していた瓦混じりの転石群を、さらに移動、二次的にこの地に搬入して排水施設として利用したものであろう。

第 3 章

第３章　久米窪田森元遺跡

１．調査に至る経緯

1987（昭和62年）２月、岩見恒子氏より、松山市久米窪田町におけるドライブイン建設に伴う埋蔵文化財確認願が、松山市教育委員会文化教育課（以下、市教委）に提出された。当該地は、松山市の指定する包蔵地「№129 鷹子遺物包含地２」に属している。同年４月８日に実施した試掘調査により、遺物包含層、この包含層直下の地山面で溝や土坑等の遺構の一部が確認されたため、引き続き全面の表土掘削を行い、本格調査を開始した。

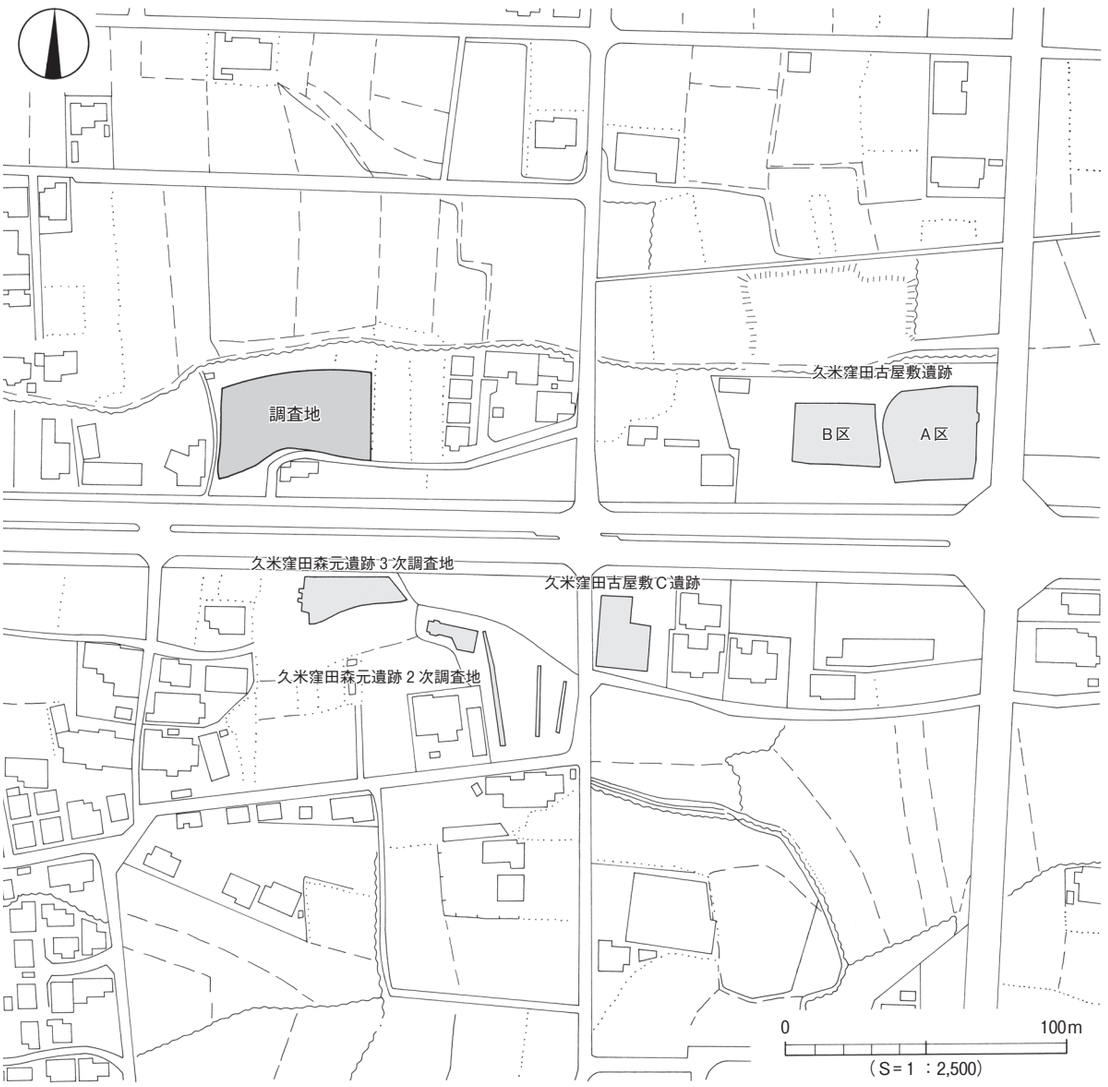


図32　調査地位置図

この時点での近隣の調査には、東方200mの久米窪田古屋敷遺跡や久米窪田Ⅱ遺跡といった７～８世紀代の掘立柱建物や溝・流路を中心とした遺構や、弥生時代前期末～中期前半の遺構・遺物群の検出などがみられており、本調査においても同様の遺構・遺物が予想された。また、詳細な調査地点は特定できないが、本調査地の南直近において国道11号線関連の調査として行われた1977（昭和52）年の久米窪田Ⅰ遺跡で縄文時代後期の遺物を伴う竪穴住居が調査されており、関連の遺構・遺物の出土も期待された。調査での遺構密度は希薄ではあったが、次節で述べるとおり縄文時代の土坑１基ほか古代の溝等を検出、およそ１ヶ月の期間を経た同年５月５日調査を終了した。

２．調査組織

松山市教育委員会　教 育 長　西原多喜男
　　文化教育課　課　　長　伊賀　俊輔
　　課長補佐　坪内　晃幸
　　第二係長　大西　輝昭
　　主　　任　西尾　幸則
　　調 査 員　栗田　茂敏

調 査 地　愛媛県松山市久米窪田町853、854－１、855－４
調査期間　1987（昭和62）年４月８日～1987（昭和62）年５月５日
調査面積　1,893㎡のうち約1,600㎡

３．調査の成果

（１）調査の概要と層序（図33・34）

調査は、対象地のほぼ全域の表土をすき取り、結果的に遺構の検出されなかった２ヶ所を排土置き場としながら進めていった。調査地中央南部と北東部がそのエリアにあたる。調査区中央北部で計測した土層断面によれば、ほとんど耕作土直下で地山面となり、この面で遺構が検出されている。したがって調査段階までにかなりの削平が行われ、排土置き場となったエリアのように遺構が希薄な部分が存在したものと思われる。

図33　調査地全測図

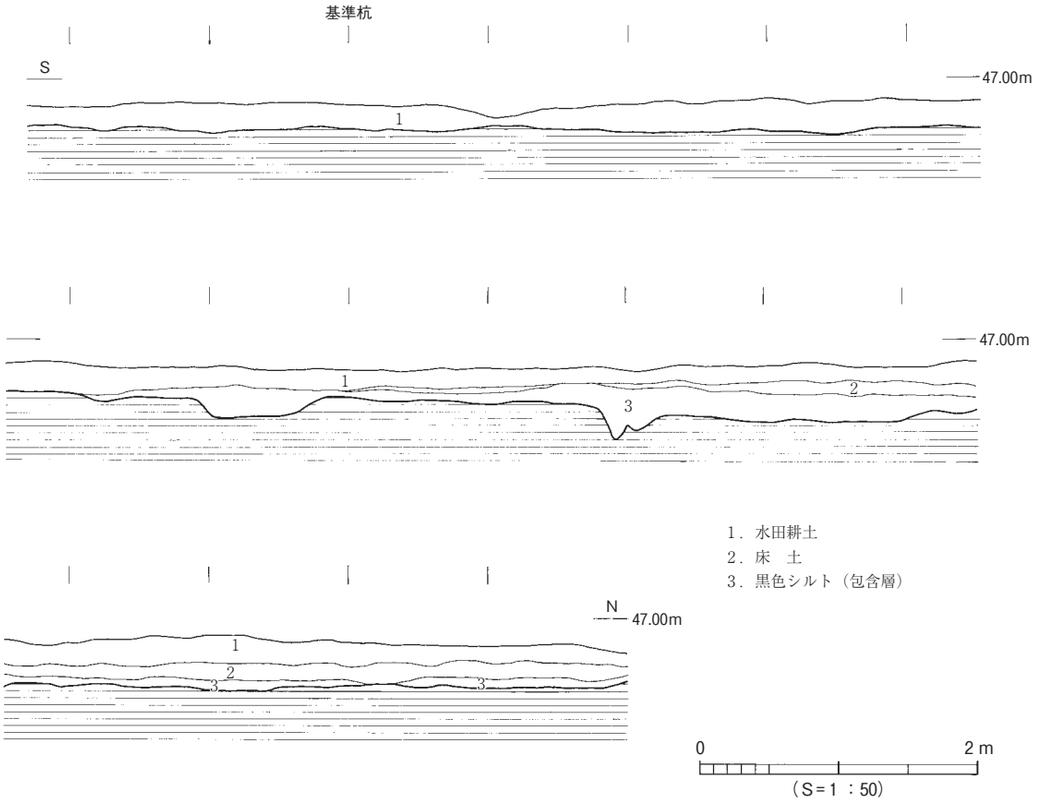


図34　南北主軸ライン土層図

（2）縄文時代の遺構と遺物

a．土坑

ＳＫ１（図35）

後述する古代の溝ＳＤ４の西、これに平行な溝ＳＤ５に切られて検出された不整形土坑である。１×２ｍの南北に長いハート形を押しつぶしたような形態をなす。縄文時代後期の土器を出土する穴であるが、後の遺物採り上げ後の平断面の精査により、倒木痕と重なっていることがわかった。深さは最深部で30㎝である。西から東へ倒れた倒木によって持ち上げられた地山のブロックや、二次的に流入した土砂が黒～黒灰色の色調を呈する肌理の細かい土となって窪みを埋めている。この部分を掘削して後述の土器を廃棄したものと考えられる。

ＳＫ１出土遺物（図36～41）

縄文土器

深鉢・鉢（147～185）147・148は同一個体と思われる口頸部片である。突起を持つ波状口縁で、口縁部外面の肥厚帯に施文されている。148は摩滅のため明瞭に観察はできないが、147でみると地文様はＲＬ単節縄文、突起の部分には突起の頂部から左斜め下方向に下る隆帯があり、この隆帯上にも縄文が施されている。突起以外の部分は横位の沈線で上下に区画され、隆帯より左の部分の下区画に沈線と同じ工具で右下がりの斜線文が施されている。頸部外面は無文で撫でられ、内面は条痕の痕跡を撫で消している。149も口縁部外面に薄い肥厚帯を設けて施文するもので、施文帯の幅からすると若干

46.50m
1. 黒灰色シルト
2. 含礫暗褐色シルト
3. 灰黄色粘土
4. 暗黄褐色粘土
5. 黒灰色微粒土
6. 黒色微粒土
7. 黒色粘土
8. 7+白色粘土
9. 暗褐色粘土
10. 6+淡褐色土
0
1m
(S=1：20)

図35　土坑ＳＫ１

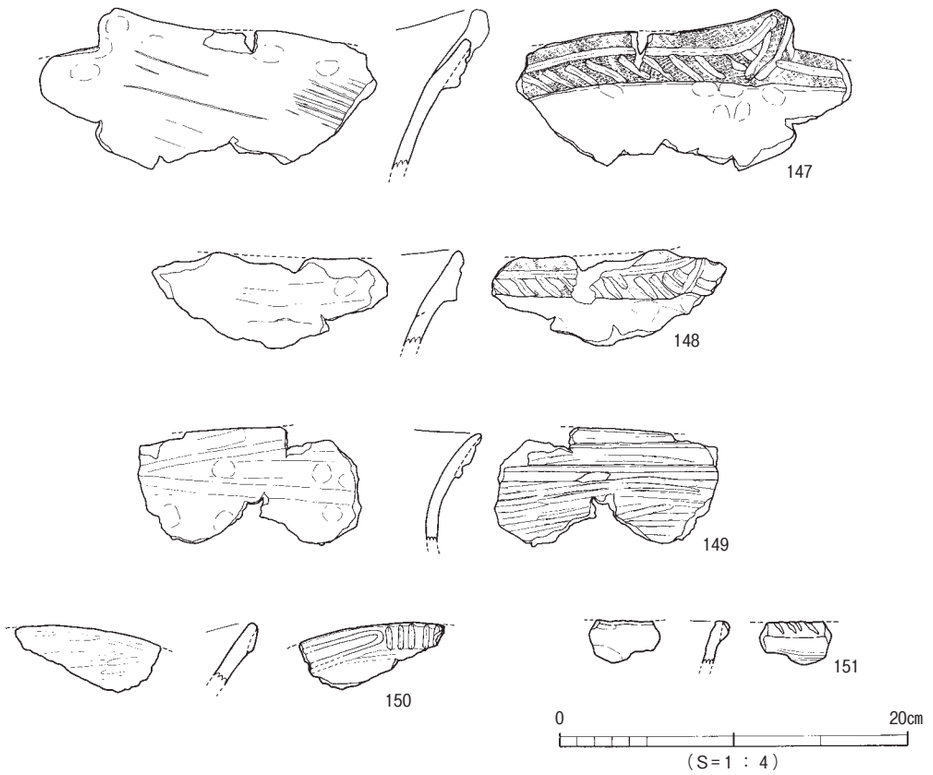


図36　ＳＫ１出土遺物（１）

の波状を呈するものと思われる。施文は横走する２条の平行沈線文である。頸部外面には条痕による削り、口縁部外面の沈線以外の凸部は条痕の後撫でられているが状痕の痕跡が残っている。内面も条痕の後撫でられている。150は波状を呈する口縁で、外面に設けられた薄い肥厚帯に沈線で施文する。波頂部に縦方向の平行短沈線５条を描き、その両脇に横走する楕円形区画文を施している。５条の単沈線のうちのひとつは脇の区画文に切られ、ほとんど無くなっている。頸部および内面には横方向の磨きの痕跡がみられる。151は口縁部の小片、端部外面を貼り付けによって肥厚し、上端面の外寄りから外面にかけて右下がりの刻み目を施すものである。152は胴張り部の片で、横走する１条の沈線とこの部位だけに局所的に施され、沈線に切られるＲＬ単節縄文を持つ。153は多条の重弧文と縦位の列点文を組み合わせた文様を持つ胴部片で、以下に記述する一連の個体とよく似た文様を施されるものである。154～158は同一個体と考えられる大型品頸部～胴部の破片である。154でみると、最もくびれる頸胴界の部分での直径42㎝となり、この部分に貼り付け位置を４方向に復元できる縦位の橋状把手を持つ。完存する把手の中央には縦位の沈線が１条、上下端の沈線端部には円形の刺突を施している。この把手上端からＶ字状に刻み目を持つ２本の貼り付け突帯が上方に延びていることを除いて頸部は無文である。この把手から90°の位置に隣の把手の剥離痕があり、これから上方にはＶ字２本ではなく直上に１本だけの突帯が貼り付けられている。現状では接合関係は確認できないが、おそらく形状の異なる157の把手が組み合うものと思われ、そうすると158は対向する180°の位置の把手ということになる。頸胴界には横方向に列点文、これを挟んだ上下にそれぞれ２条ずつの沈線が横走する。これらの沈線はこの部位を連続して巡るのではなく、把手の部分で途切れていたり、隣接する上下どうしで

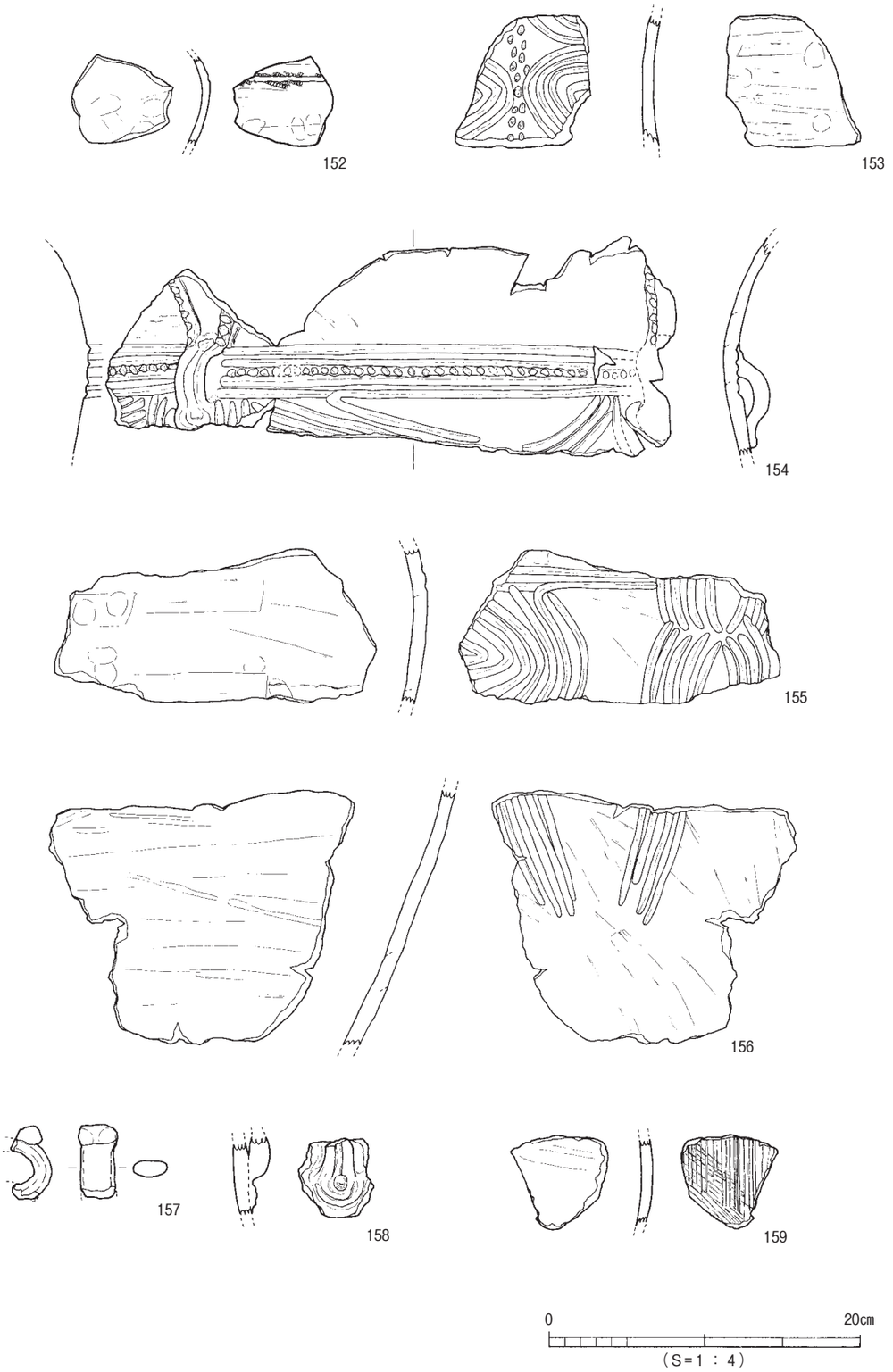


図37　ＳＫ１出土遺物（２）

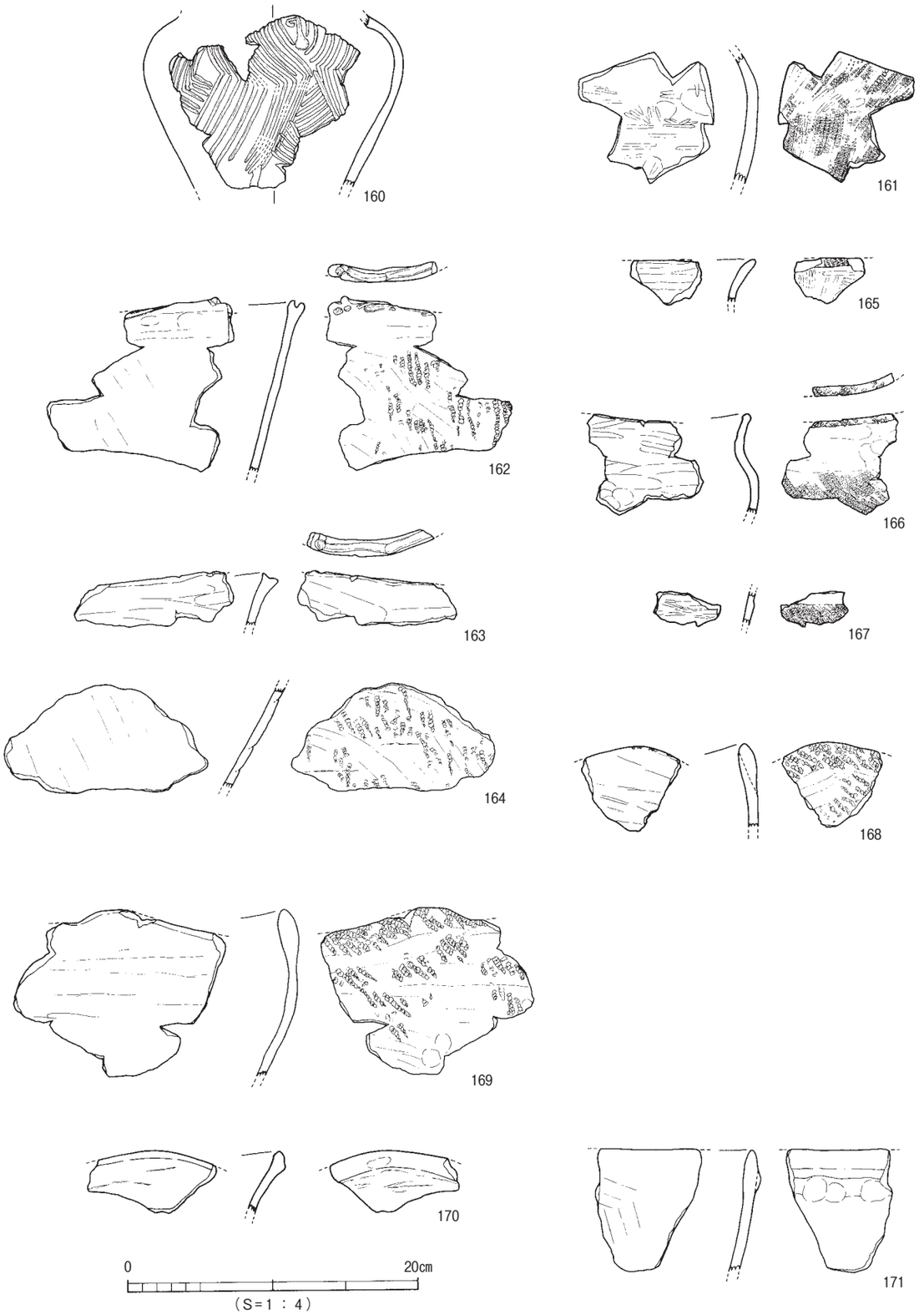


図38　ＳＫ１出土遺物（３）

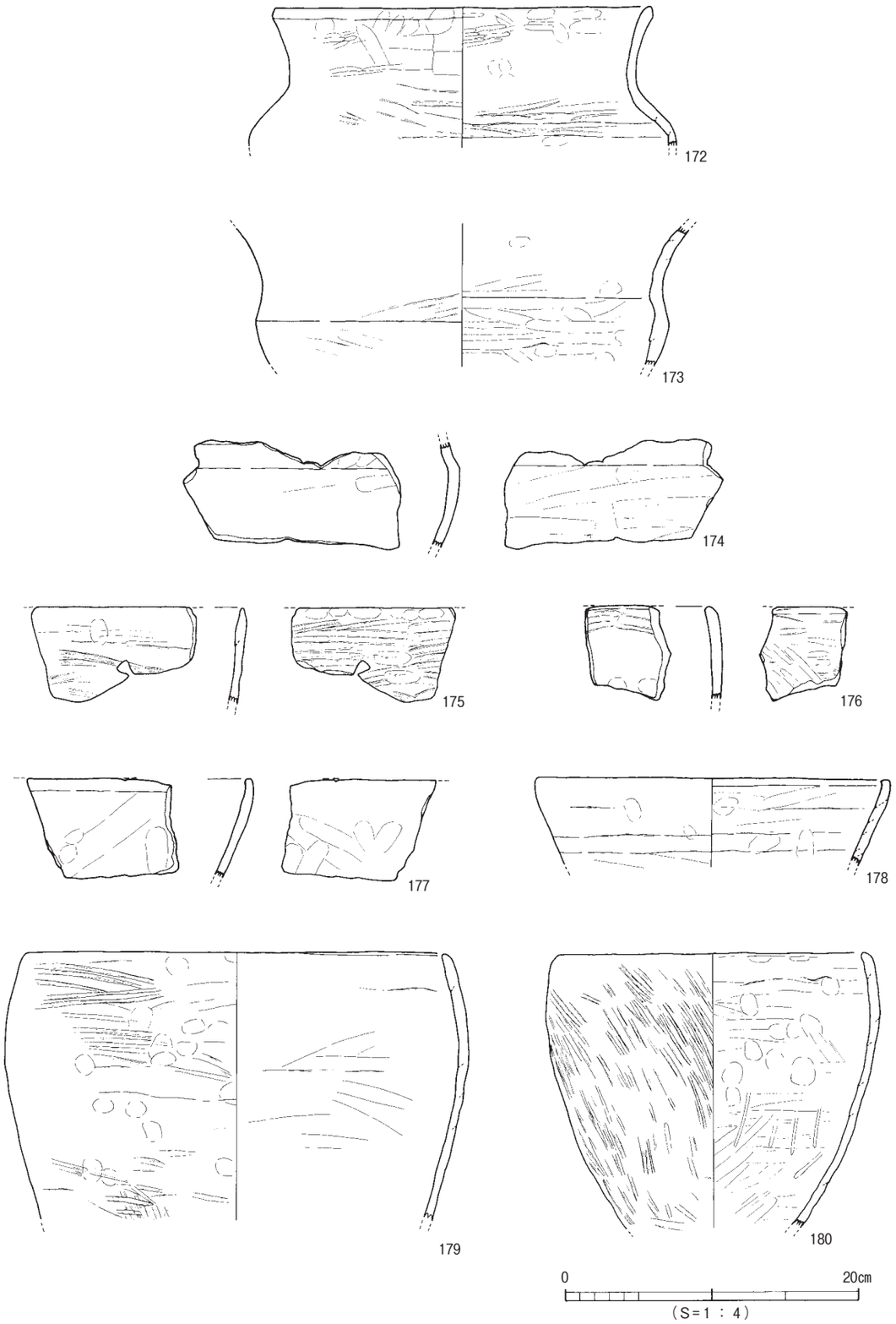


図39　ＳＫ１出土遺物（４）

Ｃ字状につながっていたり一様ではない。これ以下の胴部文様は、154～156でみると対向する縦位の弧文や横位の弧状文様の束を組み合わせたものとなっている。159は切りあう刷毛目に似た、浅く細かい多条沈線による施文を持つ胴部片である。160は弧状や直線の多条沈線を組み合わせた文様を描かれる胴部片で、文様が集約される肩部において鉤形となって収束する。161は出土品の中で唯一ＬＲ単節縄文を施す胴部片で、しっかりした焼成で内面は磨かれている。

162～164は同一個体と思われる３点である。口端部をやや拡張した上端面に幅広の沈線を描く。口端部には小さな突起とこれに合わせる切り欠きのような段差を設ける部分があり、その下段の上面には沈線と同一の工具端部による刺突がある。刺突はこの段差部分の外面にも２ヶ所、部分的に施されている。口縁部付近に縄文はみられず、器壁の薄い胴部外面にＲＬ単節縄文が施されている。縄文は器面の凹凸にならい、凸部のみに施文がみられる。165は小型の鉢口頸部小片で、幅の狭い口唇部外面の施文帯に目の細かいＲＬ縄文を持つものである。内外面ともに磨かれている。166は波状口縁の小型鉢、頸部は無文で頸部以下の胴部外面と口端部にＲＬ単節縄文が施されている。口端部は丸みを帯びた面を持っており、その上端面と鈍い稜を持ってこれに続く外端面に施文されている。167も小型品の胴部上位から頸部下端の小片で、胴部外面にＲＬ単節縄文を持つ。168・169は同一個体かと思われる口縁部周辺の片である。胴部から内湾しながら立ち上がる波状口縁で、169では頂部が角の取れた台形様の低い突起状を呈しているが、168にはそのような形状はないので部位による調整や施文に起因する形状の違いかもしれない。口縁部の肥厚は168でみると、外面に貼り付けた幅広の粘土帯で形成されているようである。外面口縁部の全面と胴部にＲＬ単節縄文が施されているが、胴部では成形時の粘土帯の凹凸を反映し、凸部のみの施文となっている。内面は条痕の後撫でられている。

無文の170は波状口縁で、口端部を外面に肥厚させるもの。171は口縁部外面に薄く幅の狭い断面三角形状の隆帯を貼り付けた無文のもので、バケツ形の器型を呈する。隆帯の下面に押さえによるような不明瞭な窪みがあるが施文を意図したものではなさそうである。その他、これらのように口端部に明確な肥厚帯や隆帯を持たない無文の深鉢・鉢にも、頸部にくびれを持って外反しながら開く口縁部を持つ172～174のようなものと、頸部のくびれない砲弾形もしくはバケツ形を呈する175～182のようなものがある。172は復元口径25.6㎝、肩部の張りを経て頸部がくびれ、やや外寄りに口縁部が直線的に開く。口縁部外面に鈍い稜を持った丸みを帯びた面を持ち、端部は丸く収めている。内外面ともに撫でによる仕上げである。チョコレート色に焼成され、胎土に大きめの長石粒を含んでいる。173は口頸部が外反気味に外に開く形態で、172と異なり胴部最大径を口径が大きく凌ぐものである。やはり内外面ともに撫でられているが、172に比べると胎土は肌理細かく丁寧なつくりである。174は173と同種の胴張り部の片である。175はほとんど直上に立ち上がる口縁部片で、内外面ともに条痕調整、内面はその後撫でられている。176は内湾する砲弾形の口縁部片で、内外面ともに条痕の後撫でられる。177・178はバケツ形に開くもの、178で復元口径23.6㎝を測る。器面調整は内外面横撫でによっている。口端部はつまむような横撫での結果、内面にやや突出しながら上端に平坦面が形成されている。179～181は口縁部が内湾してすぼまる砲弾形を呈するもので、順に復元口径30.2㎝、20.6㎝、25.4㎝となっている。いずれも外面は条痕、内面撫で調整であるが、179・180の外面にそれぞれ横、斜め方向の条痕がよく残っている。182はバケツ形に開くもので復元口径23.4㎝を測る。胴部下端は底部の立ち上がり部分で剥離しているので、器高は23㎝前後になるものと考えられる。外面を斜め方向の条痕の後撫でている。

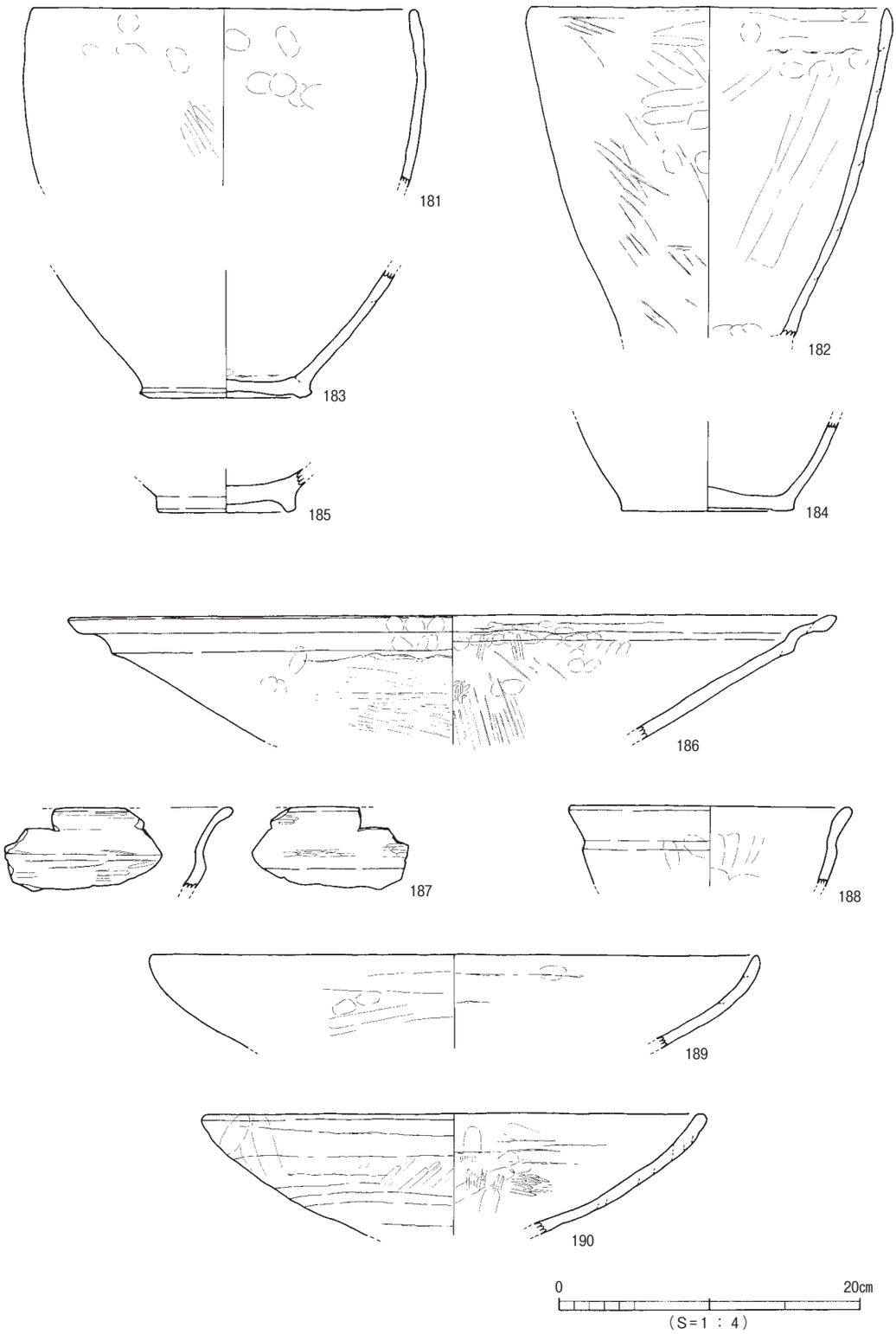


図40　ＳＫ１出土遺物（５）

底部は183～185の３点があり、183･184は低い輪高台底、185はやや高さのある高台底となっている。

浅鉢･皿（186～201）　186は直線的に外上方へ開き､口縁部が逆くの字状に屈曲して短く開くもので、口端部は外面に薄く肥厚する。復元口径51.0㎝を測る。内面は磨かれているが、外面は撫で調整のみである。口端部外面をやや肥厚気味にする小片194・195も同様に口縁部で一旦外反する器型のものであろう。189～193は内湾する口縁部を持つ平縁の単純な器型のもので、189で復元口径40.0㎝、190で32.8㎝となっている。内外面を磨かれる193を除き、いずれも磨きは内面のみで外面は撫で調整されている。196は内湾せず直線的に外開きになるもので、内外面を磨かれている。197～199は内湾する波状口縁となるものの片である。うち197は口端部に肥厚を持たず直線的に開くものの波頂部で、外面には条痕が残っている。198は口縁部外面に薄い肥厚帯を設けるもので、内外面の磨きは入念に行われている。199は口端部内面に肥厚帯を持つもので、外面は条痕、内面を磨いている。200は平縁で内湾する器型であるが、口端部内面に肥厚帯を持つもので内面のみ磨かれている。

底部201は丸みを帯びた平底で、内底面に磨き、外底面にも一部磨きのような痕跡が観察できる。

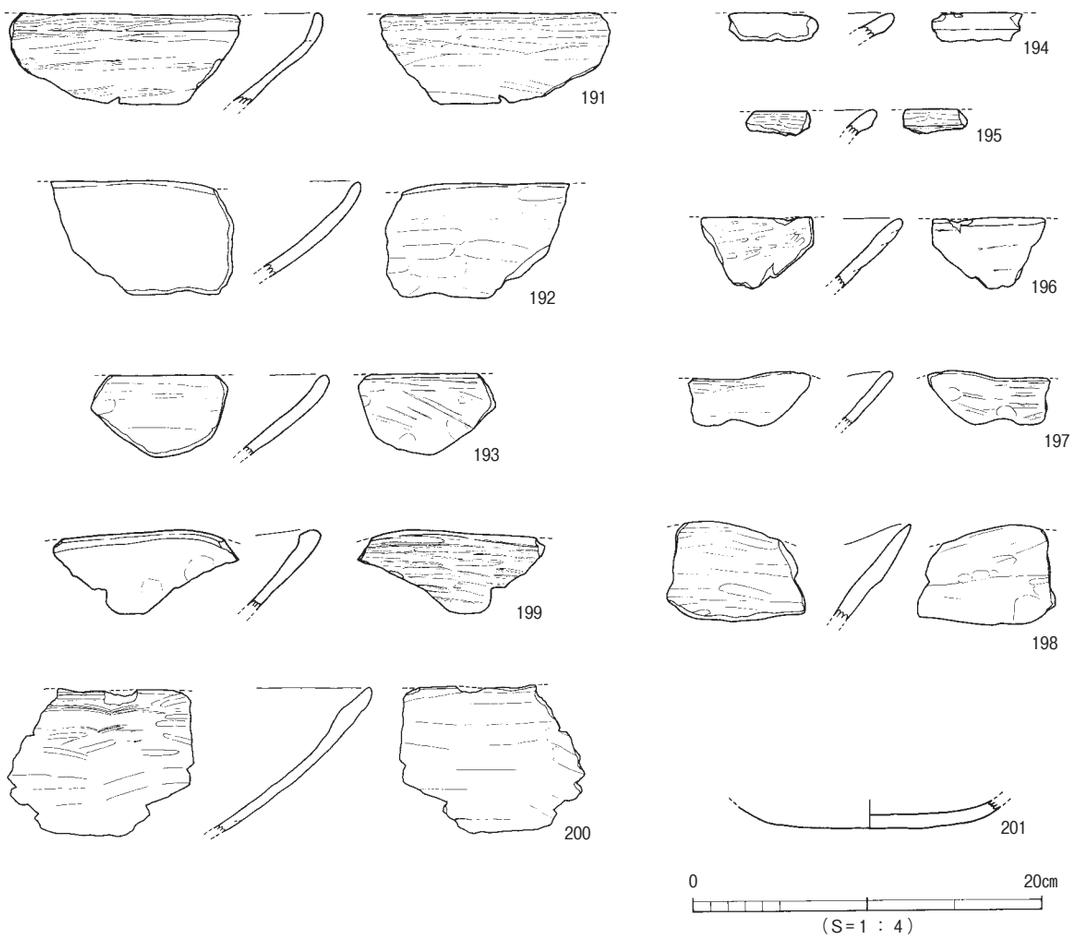


図41　ＳＫ１出土遺物（６）

（３）古代の遺構と遺物

ａ．土坑

ＳＫ４（図42）

調査地北西隅付近のＳＤ２近くで検出された長さ1.8m、幅0.6mの長円形土坑である。深さ５㎝、痕跡程度の遺存で、下記の土師器坏、灰釉陶器の破片が出土した。10世紀代の遺構である。

ＳＫ４出土遺物（図42）

土師器

坏（202） 回転台成形による内外面赤色塗彩土師器坏の口縁部である。外面に多段撫での痕跡を残している。

灰釉陶器

壺（203） 貼り付けの輪高台を持つ底部片。高台端部を僅かに欠くが、外反りにふんばり、平坦面ではなく尖り気味の端部で接地するものと思われる。内面を除いたすべての部位に施釉されている。

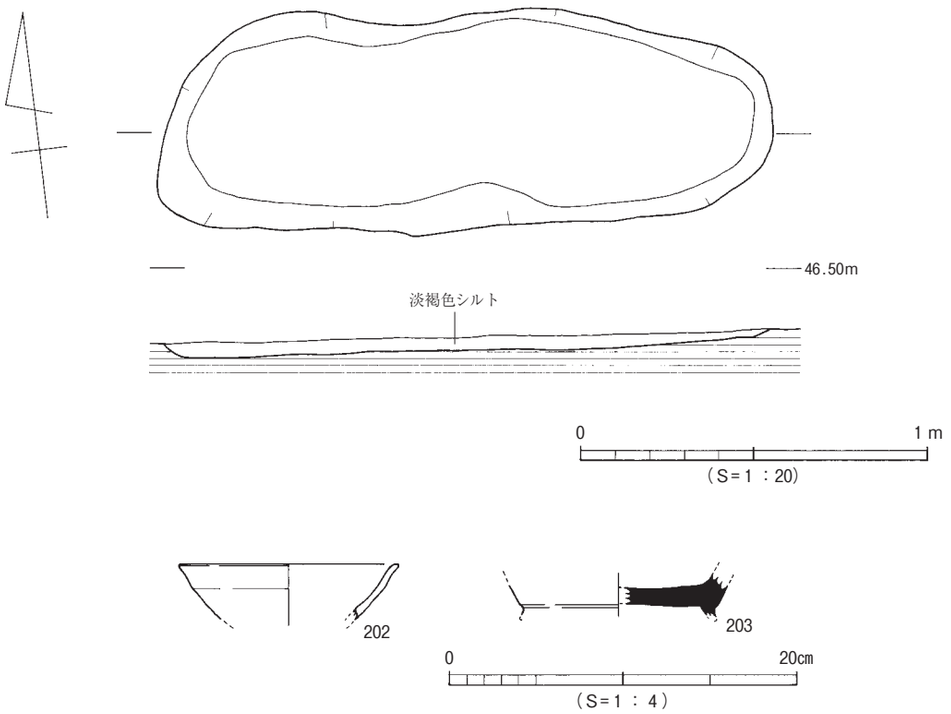


図42　土坑ＳＫ４・ＳＫ４出土遺物

ｂ．溝

ＳＤ１（図33）

調査地東部で緩やかに弧を描きながら北から南東方向に検出されたものである。幅0.4～0.7m、深さ10㎝内外で、検出長35mを測る。無遺物であるが、後述のＳＤ２あるいはＳＤ４と同様の黒色土で埋まっているので古代の遺構と判断した。

ＳＤ２（図33）

調査地北部Ｎ９ｍラインにほぼ沿うかたちで検出された幅１ｍ内外の直線溝である。検出長33ｍを測る。深さは５～20㎝と不揃いで凹凸がある。南方を南西から北東に走る同様の溝ＳＤ３と調査地北部中央やや東よりで合流した後自然消滅する。クリッド割付南北基準ラインとの交点付近で横倒しになった状態の完形に近い須恵器長頸壺を出土している。８世紀前半の遺構であろう。

ＳＤ２出土遺物（図43）

須恵器

壺（204・205） 204は台付長頸壺、器高24.3㎝を測るものである。外方に開く低い台を貼り付けられたボウル状の胴下半部から鈍い稜を持って胴部上半が直線的にすぼまる。やや外傾しながら長い頸部が立ち上がり、ラッパ状に口縁部が開く。胴屈曲部には２条の平行沈線が施されるが、胴部を一周する間に１条に収束している。焼成は堅緻で暗赤褐色の色調を呈している。205は平底の底部付近の片であるが、底部からの立ち上がりは鈍い稜をなす。平瓶の底部か。

土師器

高坏（206） 低脚高坏の脚部片。短い柱部は中実となっている。

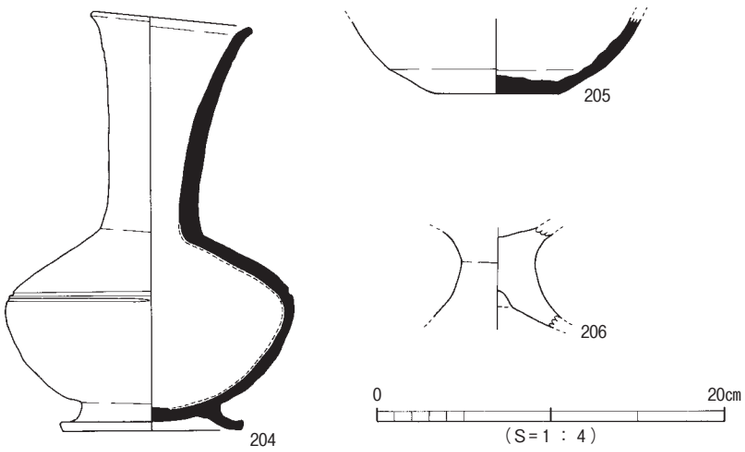


図43　溝ＳＤ２出土遺物

ＳＤ３（図33）

調査地北部でＳＤ２と合流して収束する幅0.3～１ｍ程度の溝で、深さは20㎝程度ある。部位によっては幅２ｍを超える不整形な部分があるが、倒木痕と切りあっている可能性が高い。やはり黒色系の土で埋まっておりＳＤ２との切り合いは不詳である。

ＳＤ４（図44）

調査地南西隅を南東から北西方向へ斜めに走る溝である。長さ13.6ｍにわたって検出された。幅3.5ｍ内外、深さは0.5～0.8ｍ、上半部は地山の砂岩礫を含む暗褐色シルトで埋まり、その下位には砂あるいは砂礫層が堆積しているので、ある程度通水していた区画溝を上層埋土で埋めた状況と判断できる。この上層埋土から以下の土器類が出土している。状況からすると、遺物を投棄しながら埋め立て造成

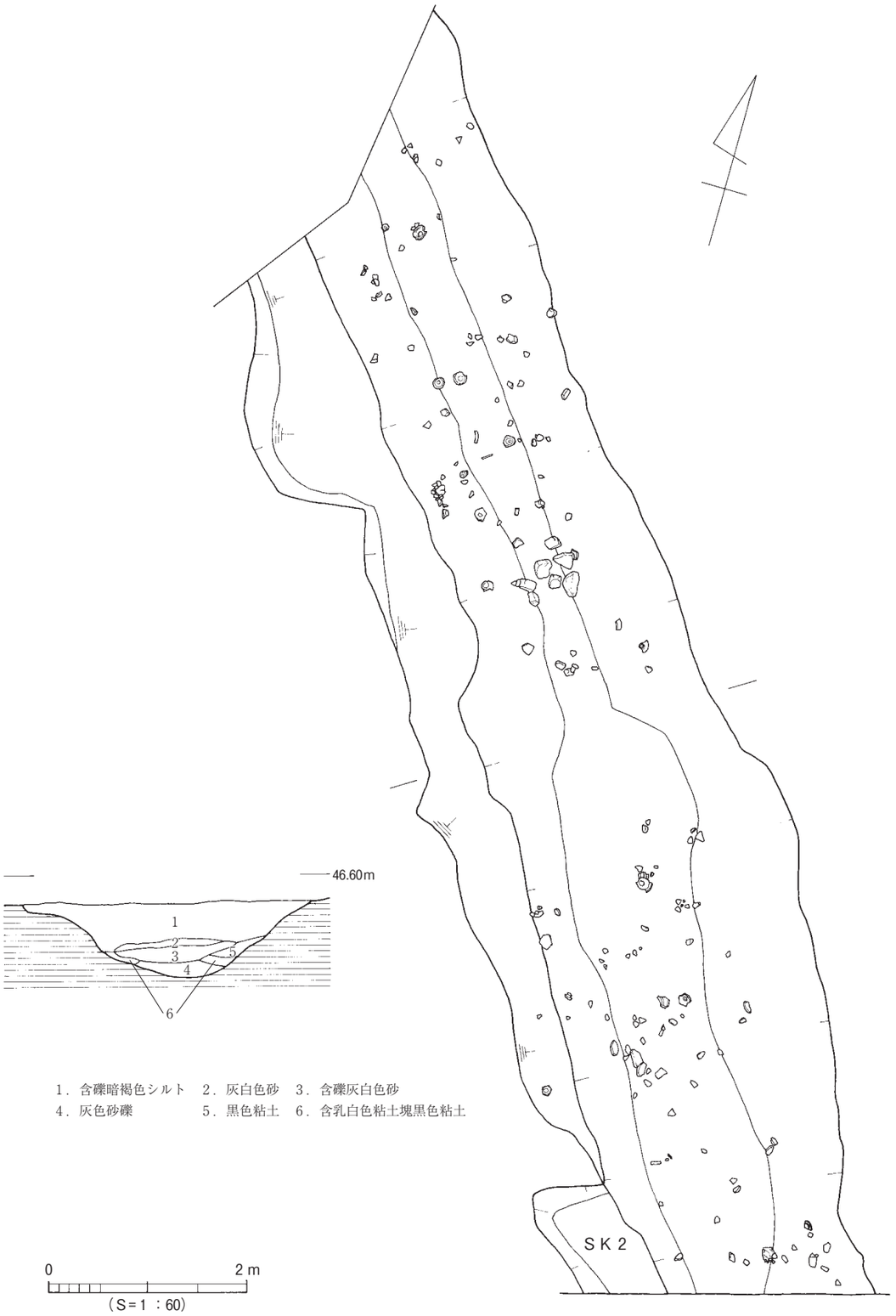

46.60m
1
2
3
4
5
6
1．含礫暗褐色シルト　2．灰白色砂　3．含礫灰白色砂
4．灰色砂礫　5．黒色粘土　6．含乳白色粘土塊黒色粘土
ＳＫ２
0
2 m
（S＝1：60）

図44　溝ＳＤ４

を行ったものと考えられる。遺物としては大きく７世紀代、10世紀代にまとまりがある。埋め立て造成に伴い10世紀代の回転台土師器坏の一群を投棄、この埋め立てに伴う客土中の遺物がこれらより遡る須恵器類ということになろう。

ＳＤ４出土遺物（図45・46）

土師器

坏（207～236）　底部ヘラ切り離しによる回転台土師器坏の一群である。207～214は底部からの立ち上がり周縁部をヘラ削りされることが特徴的なもので、器高3.5～4.2㎝、口径11.8～13.0㎝、特に口径の小さい210を除けばおおよそ13.0㎝のあたりに口径の値がまとまっている。いずれも切り離し痕を軽く撫で消されている。208、210の外底面には板目状圧痕がある。207、209には煤の付着あるいは黒っぽい焼け焦げがみられ、灯明皿として利用されていたことがわかる。その位置をみると、207では内面２ヶ所のほぼ対向する口唇・口縁部に、209では内面の底部から片側の体部を経て口唇部までとなっている。215～229は円盤高台の底部を持つもので、形状が確認できる個体でみると、概ね体部は内湾気味に開き、体部は平滑に撫でられている。ただ、220には撫で消されてもなおうっすらと多段撫での痕跡が残っている。216～218、224、225の外底面には切り離しの痕跡がそのままになっていたり、撫で消しが充分でないものがある。板目状圧痕がみられるのは215、217の２点である。口径でみると法量にはふたとおりあって、215・216のように12㎝程度の小ぶりなものと13.4～15.0㎝を測るその他のやや大ぶりなものとがある。これらにも煤や焼け焦げの付着するものがある。小ぶりなものには２点ともにあり、215の口唇部内外面の一部と外底面周縁の一部に、同じく小ぶりな216の口縁部をやや下った内面の１／３周程度の部位に確認できる。また、217の内面のほぼすべての部位、224の外底面にも焼け焦げがある。230～233はすべて底部片で円盤高台のものに近いが、底部の突出がそれらほど明瞭でないものである。231の外底面には板目状圧痕がある。234～236は底部の突出も、底部立ち上がり周縁の削りもない単純な器型のものである。234の底部はやや丸みを帯び、体部外面には多段撫での痕跡が残っている。これらの土師器坏のうち赤色塗彩が観察できるものは、215・216、232、234となっている。

須恵器

坏（237～242）　237～239はごく小さい破片のため、口径や上下に若干の不安はあるが、一応図のように復元した。蓋237は口端部内面に稜を持った横撫でを施し、端部を尖り気味に収めている。238は短く内傾する立ち上がりを持つ身の口縁部、239は椀形の身である。240は器高3.1㎝、口径9.0㎝を測るもので、口端部に水平な幅広の面を持つところから蓋と判断した。天井部外面は未調整である。特異な形態で、坏に伴うものではないかもしれない。241は貼り付けの輪高台を持つ底部、高台の貼り付け位置は体部の立ち上がりに接する部分である。242は同溝で出土している回転台土師器と同形態のもの、器高4.8㎝、口径14.2㎝と土師器よりは若干大きい。底部回転ヘラ切り離しで、外底面には切り離しの痕跡が残っている。灰白色のやや軟質な焼成となっている。体部の内外面には多段撫での痕が顕著である。底部内外面の全域と体部から口縁部に至る内外面の半分程度に油染みがみられ、底体部の各所に煤が点的に散在して付着している。なお、煤は口唇部外面の端部およびこれからやや下った範囲のほぼ全周にみられる。

椀（243～246）　突出した円盤高台を持つ椀形態のものである。243･244が灰白色のやや軟質な焼成、245・246は須恵器らしく堅緻な暗灰色の焼成となっている。底部の残りのよい244・245で観察すると、外底面は切り離し後撫でられているが、切り離しの痕跡を完全に撫で消すところまではいっていない。

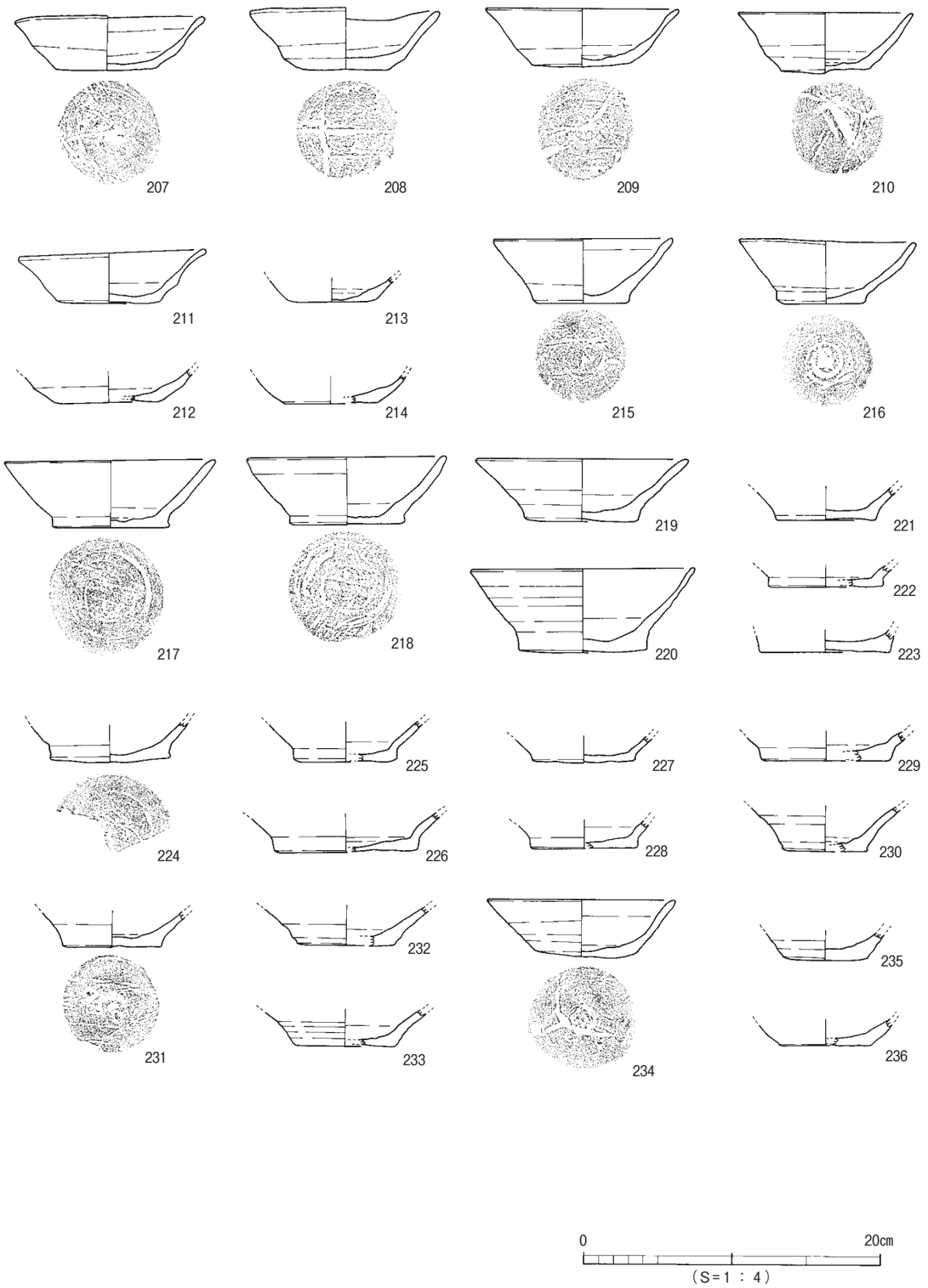


図45　ＳＤ４出土遺物（１）

高坏（247・248）　２形態のものが出土している。247は坏底部片で、坏底部と口縁部の境に段を持つ。浅い椀形の坏部形態をなす247に対して、やや深い坏部形態になるものと思われる。248は脚裾部を一部欠くが、ほぼ完形に近いものである。脚柱基部を除いてすべての部位で大きく焼け歪んでいる。口縁部をやや下った外面、脚柱部中位にそれぞれの１条の沈線が巡っている。

壺（249･250）　249は肩部から頸基部の片である。胴部から稜を持って強く屈曲し､頸基部に向かって肩部がすぼまる。250は台付壺の台である。内面に融着した粘土塊を放置してあるので、台部と判断した。端部をやや内面に肥厚し、この部分で接地する。

甕（251・252）　251は頸部片。口縁部片252は口端部外面に薄い断面三角形状の肥厚帯を持つが、内面にも段を設けて薄く肥厚している。

瓦器

椀（253・254）　両者ともに和泉型。253はやや深椀タイプで、内面の磨きはかなり密である。口縁

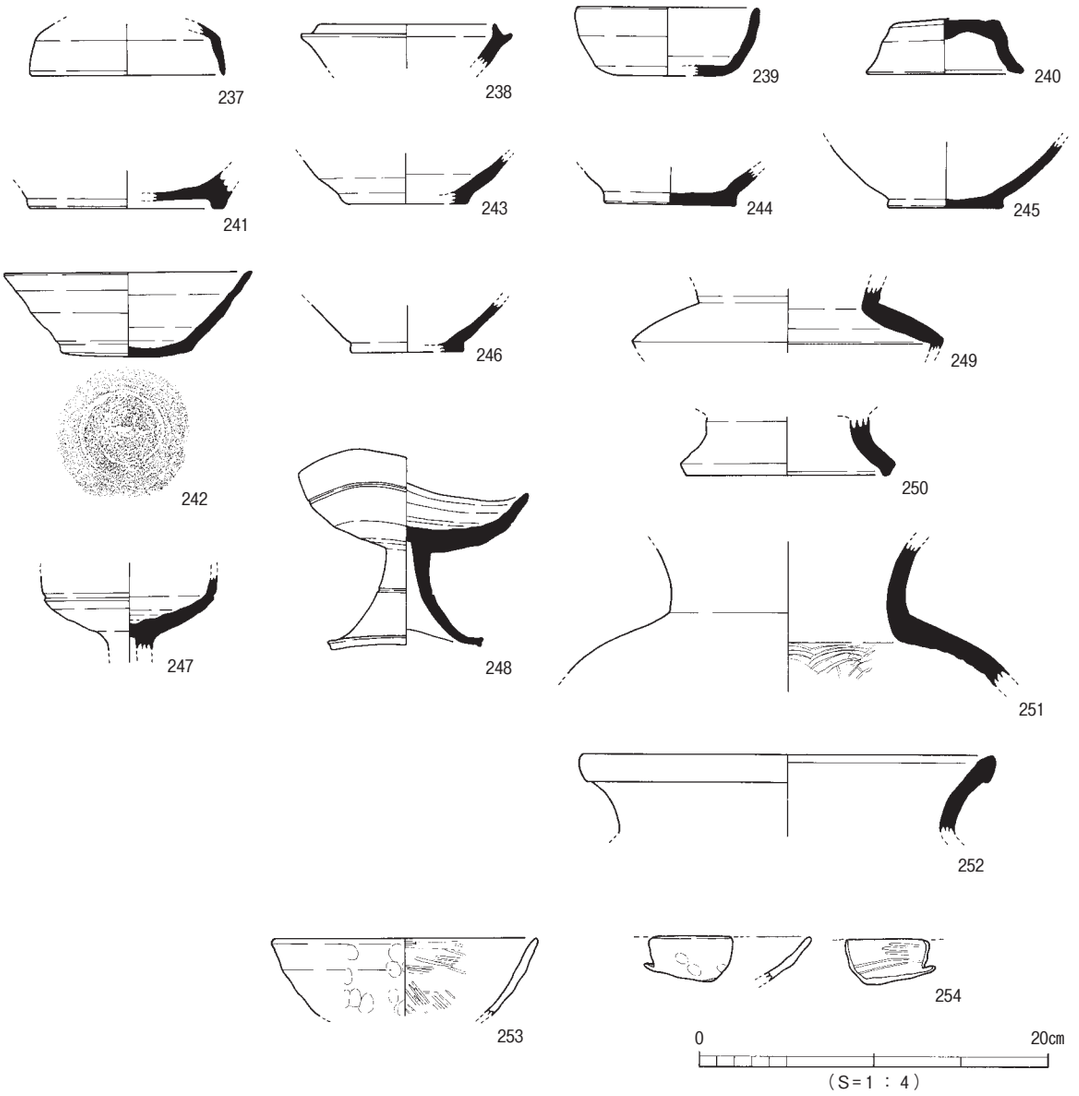


図46　ＳＤ４出土遺物（２）

部外面に横撫でによる窪みがあり、体部には顕著な磨きはなく指頭痕が多い。254は口縁部直下の外面に稜を持ち、浅くなる器型のものである。

ＳＤ５（図33）

ＳＤ４の西３ｍで縄文時代の土坑ＳＫ４を切って検出された。ＳＤ４と同方向に走る溝で、幅0.4～0.8m、深さは15～20㎝程度ある。無遺物であるが、黒色系の土で埋まっていることからやはり古代の遺構と思われる。

（４）その他の遺構と包含層出土・表採遺物

ａ．土坑

ＳＫ２（図47）

調査区南端、溝ＳＤ４の西でＳＤ４に切られて検出された長方形に近い穴である。ＳＤ４とともに南の調査区外へと続いている。掘りきれてはないようであるが、その横断土層をみると、地山礫が持ち上がって露出している状況が窺え、時期不明の倒木痕跡の一部である可能性が高い。以下に掲載し

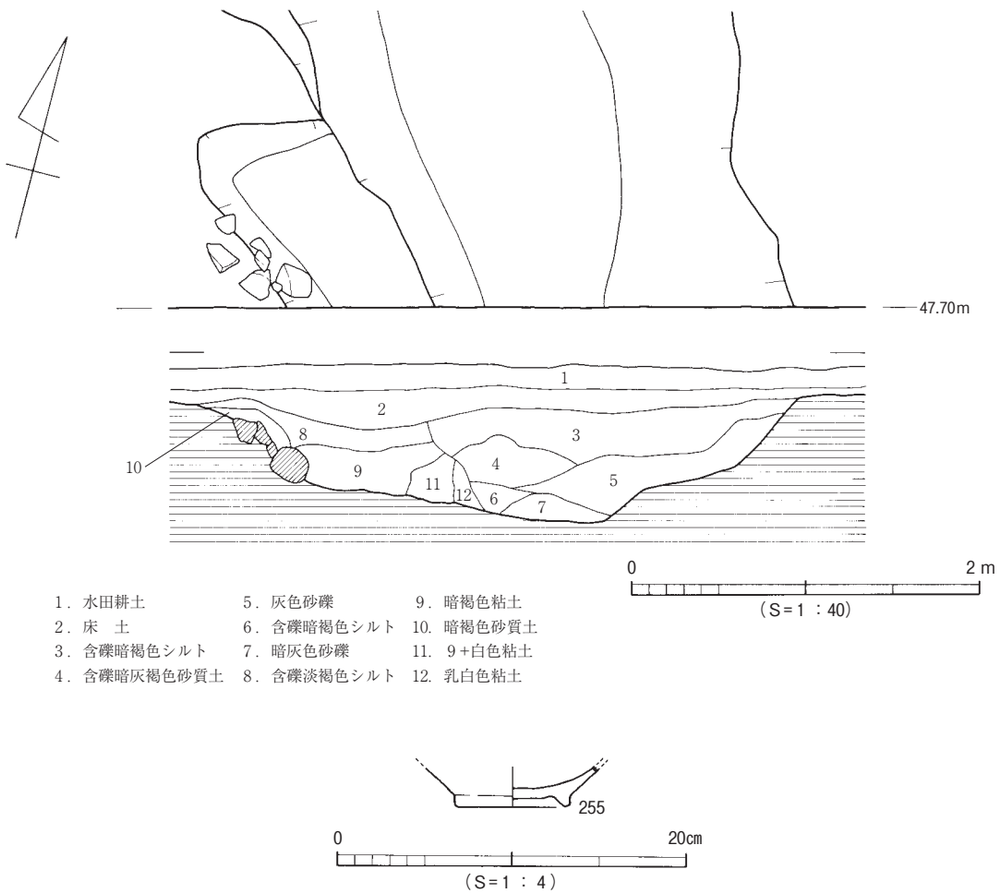


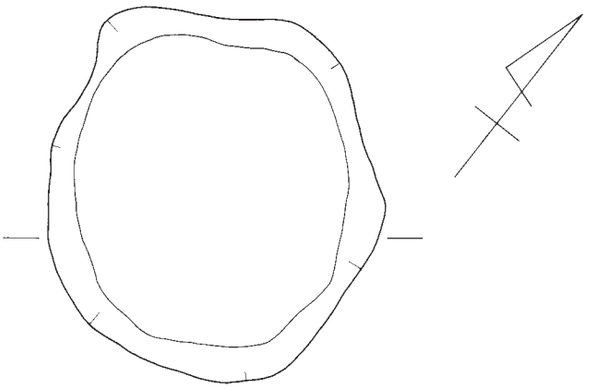
図47　土坑ＳＫ２・ＳＫ２出土遺物

た12～13世紀代の土師器椀の底部片を出土しているが混入遺物とみられる。

ＳＫ２出土遺物（図47）

土師器

椀（255） 断面三角形状の貼り付け輪高台を持った底部である。高台内面の底面は撫でられているが、回転糸切りによる切り離しと思われる。内面は磨かれている。



ＳＫ３（図48）

ＳＤ４の西直近で検出された直径１ｍの円形土坑で、深さ20cmを測る。地山の白色～黄色粘土塊をブロック状に含んだ黒色土で埋まっている。遺物の出土はなく、時期不明の土坑である。

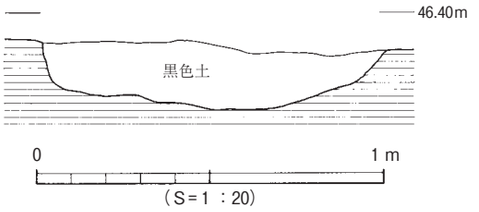


図48 土坑ＳＫ３

ｂ．包含層出土遺物（図49）

溝ＳＤ４や土坑ＳＫ４などが検出された調査区南西部を中心に包含層からの遺物の出土がある。そのほとんどが、ＳＤ４検出作業中に採集されたものである。

弥生土器

甕（256） 後期に属する比較的小型の甕口縁部片で、器壁がやや厚い。鈍く折り曲げられた口縁部は端部に平坦な面を持つ。

土師器

坏（257～271） 257～268が底部ヘラ切り離しによる回転台土師器坏、269～271が回転糸切りによるものである。前者のうちには、突出した円盤高台の底部形状を持つもの263～268、これらほど明確に突出はしないが底部近くの体部で外反気味になるもの262・263、単純に体部が内湾または直線的に立ち上がるものなど、ＳＤ４出土のものに準じる器型のバリエーションがある。これらのうち、257、265、268には赤色塗彩が施されている。10世紀代のものである。底部回転糸切りの269は14世紀代のものと思われるが、その他は小片のため詳細はわからない。

椀（272） 黒色土器Ａ類椀の底部片。貼り付け輪高台は内面を丸く仕上げ、接地面も丸みを帯びた面となっている。10世紀代におさまるものか。

須恵器

坏（273～275） 273は古墳時代タイプの身、内傾する短い立ち上がりを持つもの、復元口径8.8cmを測る。７世紀前半。274は椀形の身、器高4.0cm、復元口径10.8cm、外底面は回転ヘラ削りされている。７世紀中～後半のもの。275は断面方形の低い輪高台を貼り付けられた底部である。８～９世紀。

椀（276） 底部回転糸切りによる円盤高台を持つ椀、11～12世紀。

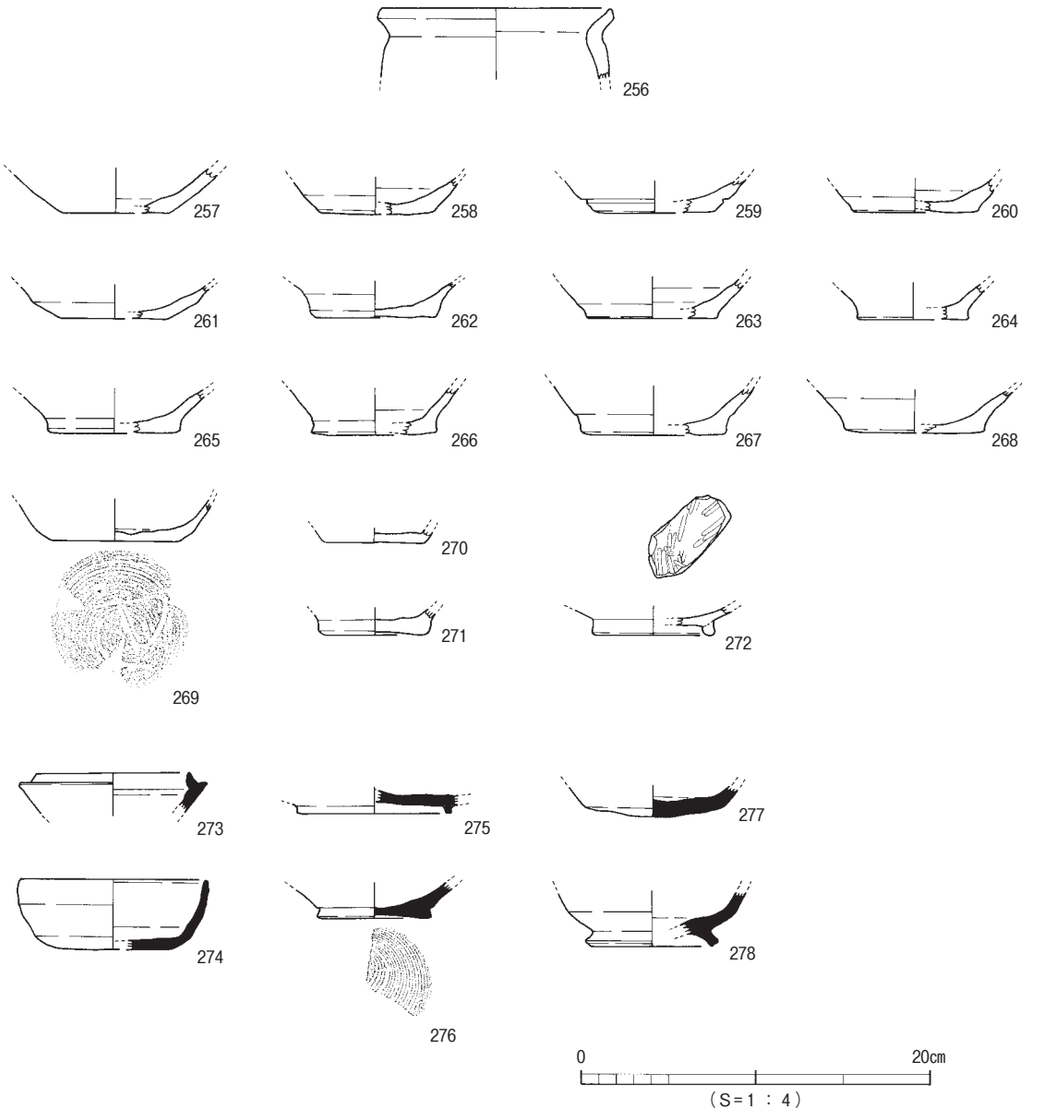


図49　包含層出土遺物

壺（277・278）　両者ともに底部片である。277は外底面を不定方向にヘラ削りされることが特徴的である。壺として扱ったが、他の器種であるかもしれない。278は外方に踏んばる形態の高台を持つ底部である。

鉢の可能性もある。

c．表採遺物（図50）

弥生土器

壺（279）　比較的大型の安定した平底の底部。中期段階のものと思われる。

須恵器

坏（280）　器高4.0cm、復元口径10.2cmを測る身の破片である。内傾する立ち上がりは非常に短い。

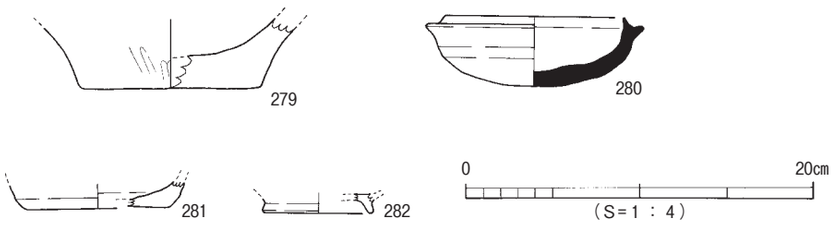


図50　表採遺物

器型のわりに器壁が厚く成形されている。

土師器

坏（281）　回転台土師器坏の底部片。外底面の切り離し痕は撫で消されているが、ヘラによるものと思われる。

椀（282）　黒色土器Ａ類椀の高台部分小片。

４．まとめ

本調査では、削平もあって遺構数は多くはなかったが、縄文時代や古代の遺物をまとまって出土する遺構が比較的よい状態で検出された。

縄文時代の遺構にはＳＫ１がある。倒木痕と重なって検出されているところからすると、倒木によって形成された窪みを二次的に掘削して土器を廃棄したものと考えられる。出土した土器は後期中葉、瀬戸内津雲Ａ式併行期の一括遺物と考えられ、当平野においてはこの時期に限らず縄文時代の一括性の高い遺物群として重要である。本調査においてはこの土坑以外に該期の遺構も遺物もみられなかったが、1977（昭和52）年、愛媛県教育委員会によって行われた国道11号線関連の久米窪田Ｉ遺跡において同時期の住居址とされる遺構が検出されている。情報不足で、正確な発掘場所は特定できないが、少なくとも本調査地南至近の位置と思われる調査で、推定3.7×3.4mの長方形プラン、２本柱の住居と考えられる掘り込みから縄文時代後期中葉の遺物が出土している。したがって、本調査の土坑も点として単独に存在したわけではなく、この遺構と関連づけてとらえておかなければならない。調査地近辺での該期の遺構や遺物の検出はこの２例のみで不明な部分がまだまだ多いが、今後周辺エリアでの資料の増加が待たれる。なお、これらの土器の編年的位置づけについては、次章における幸泉満夫氏の論考によって詳述される。

古代の遺構の主なものは８世紀前半代の区画溝と考えられるＳＤ１や10世紀代に埋め立てられと考えられる溝ＳＤ４がある。ＳＤ４では各時期混淆状態での遺物出土状況であったが、ブロック状に粘土を含む埋土の特徴、10世紀代の回転台土師器坏のまとまった出土状況から、これらと時期を同じくする黒色土器や須恵器坏を含めて埋め立て造成に伴う投棄と考え、これより遡る時期の須恵器類の破片を埋め立ての客土に伴うもの、また少量の13～14世紀代の瓦器を構成の混入として排除した結果の結論である。この遺構から出土した回転台土師器坏と同じ特徴を持った遺物は、1985（昭和60）年に調査された西石井町石井幼稚園遺跡の溝ＳＤ１からの一括遺物があり、共伴する洛西産緑釉陶器、東濃産灰釉・緑釉皿、畿内産黒色土器などから10世紀前半の年代を与えられ、当地における該期の基準資料となっている。また1996（平成８）年、愛媛県埋蔵文化財調査センターによって発掘調査が行わ

れた今治市阿方春岡遺跡においても多量の京都産緑釉陶器、尾北窯産灰釉陶器などとともに同様の土師器坏が出土、共伴遺物から９世紀後半から10世紀初頭、下っても10世紀前半代のものとしてとらえられている。石井幼稚園遺跡においても、施釉陶器に９世紀後半まで遡る要素があるが、畿内産黒色土器の年代も考慮して土師器坏を10世紀前半代においている。この石井幼稚園遺跡報告の際に、久米窪田森元遺跡ＳＤ４出土の土師器坏を取り上げ、これらの坏のなかに法量の小さいものが数点存在しているところから、法量分化のきざしととらえ、石井幼稚園に続くものとして10世紀後半代に一旦おいてみた。しかし、その後20年を越える月日が経過しても、この種の製作技法を持つ回転台土師器坏の法量分化の傾向を示す資料は現れていない。実際、やや小さい個体を除いて相互の遺物を並べた場合、見分けをつけるのは事実上不可能といえる。現段階では、法量は個体差としてとらえておくほうがよいように思われるので、これらの遺物を10世紀前半代のものとして改めて考えておきたい。

文　献

吉本　拡･阪本安光　「来住Ｖ遺跡､久米窪田Ⅰ･Ⅱ･Ⅲ遺跡」『一般国道11号松山東道路関係遺跡埋蔵文化財調査報告書Ⅱ』愛媛県教育委員会・愛媛県埋蔵文化財調査センター 1981

長井数秋　「久米窪田Ⅰ遺跡」『愛媛県史 資料編 考古』愛媛県 1986

栗田茂敏　『石井幼稚園遺跡・南中学校構内遺跡－第２次調査－』松山市教育委員会・松山市埋蔵文化財センター 1994

小黒裕二・橋本貴登ほか　『阿方春岡遺跡・阿方牛ノ江遺跡・矢田八反坪遺跡・矢田大出口遺跡・矢田平山近世墓・矢田平山古墳・矢田平山遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター 2000

付　編

津雲Ａ式土器の細分に向けた若干の考古学的考察
－ 愛媛県松山市久米窪田森元遺跡ＳＫ１出土土器群の分析を通して －

愛媛大学法文学部　**幸泉　満夫**

はじめに

愛媛県松山市久米窪田森元遺跡の発掘調査ではＳＫ１覆土中より縄文時代後期、初期縁帯文段階の良好な一括資料が検出された（第１図）。該期一括事例は今日なお稀少であって、本例を除くならば今治市高橋湯ノ窪遺跡ＳＫ－10・11、江口貝塚Ｅトレンチ９層等の成果が有望視できる程度である。状況は隣県を展望しても概ね同等であって、香川県永井遺跡Ｆ－16Ｘ層、広島県比治山貝塚貝層下、徳島県貞光前田遺跡ＩＡ区ＳＢ2001などでその可能性が指摘できるに過ぎない。本節ではこの稀少な初期縁帯文一括資料に対する若干の型式学的考察を加え、その意義を述べることとしたい。

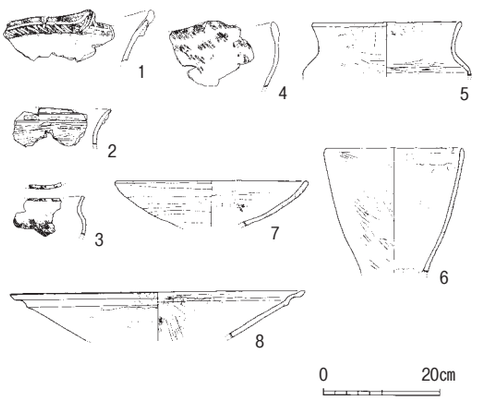
器種組成は深鉢、鉢、浅鉢から成る。壺形、注口土器等の稀少器種の存在は本遺跡では今のところ確認されていない。

各々は第２図に示すような文様系統で構成される。括弧書きで記した文様系統、類型は本遺跡では未だ確認できていないが、総個体数35点（口縁部片）という資料制約による可能性から存在を仮定している。

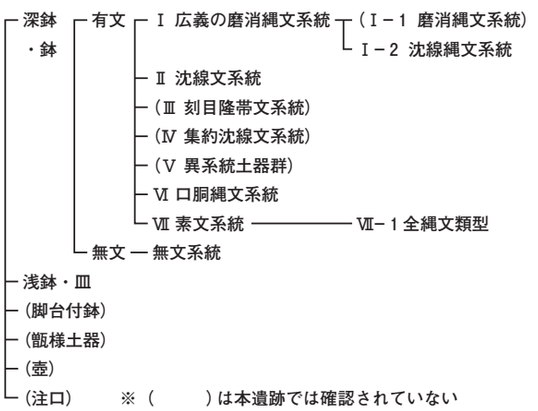
以下、深鉢・鉢、浅鉢の順に年代論に焦点をおいた考察を加えていく。ただし底部については節末にて別途私見を述べることにしたい。

Ⅰ　深鉢・鉢

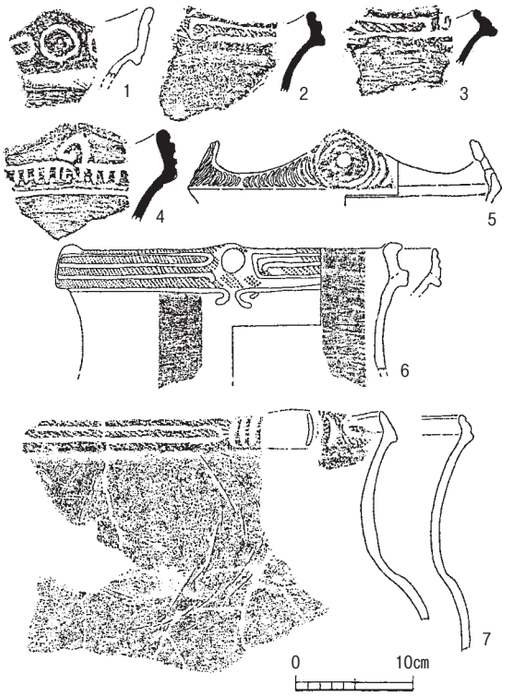
深鉢・鉢は全器種中の57.1％を占める（口縁部個体識別法：宇野1992、以下同様）。文様系統は、沈



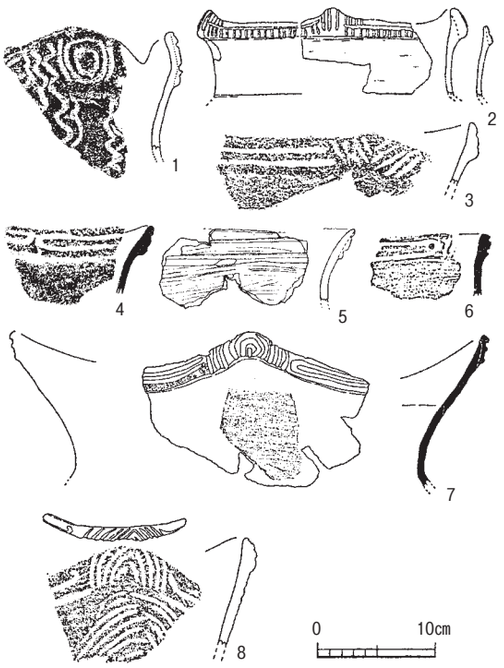
第１図　久米窪田森元遺跡ＳＫ１出土土器の器種組成



第２図　初期縁帯文期の器種・文様系統組成



第３図　初期縁帯文深鉢ｉ口縁の諸例
１井門Ⅱ（愛媛）２～４芋平（広島）５田益田中（岡山）６文京（愛媛）７津島岡大（岡山）

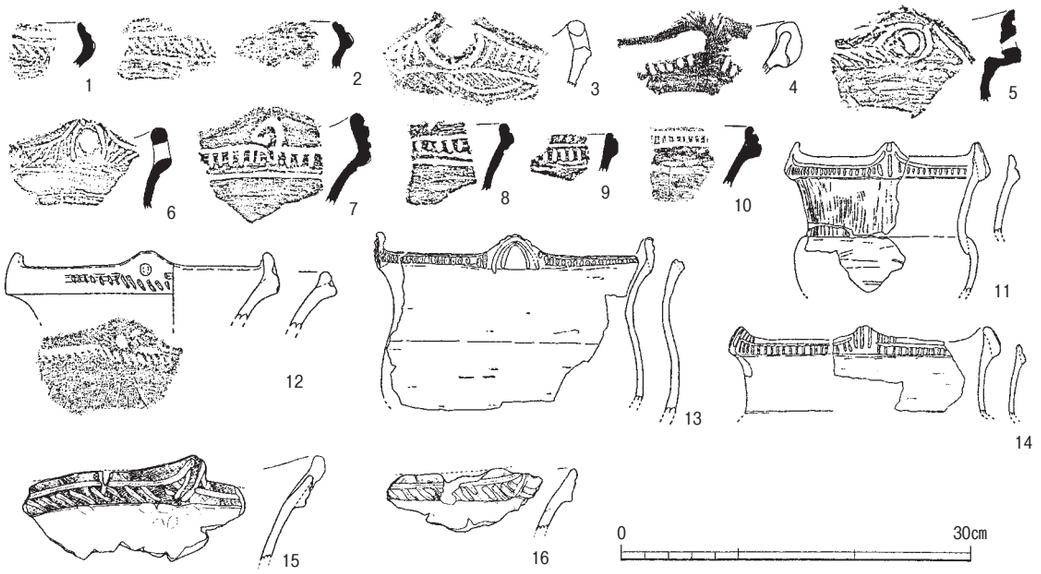


第４図　初期縁帯文深鉢ii口縁の諸例
１矢田八反坪・大出口（愛媛）２林原（島根）３・８井門Ⅱ（愛媛）４江口（愛媛）５久米窪田森元（愛媛）６洗谷（広島）７西分増井（高知）

線縄文系（第Ⅰ－２系）、沈線文系（第Ⅱ系）、口胴縄文系（第Ⅵ系）、素文系全縄文類型（第Ⅶ系－１）、無文系（第Ⅷ系）で構成されている。うち無文系は55.0％と過半数以上に達した。

ここではまず、本遺構出土の有文深鉢・鉢を例に、その編年位置について捉えておこう。既存の津雲Ａ式土器諸例とを比較するならば、次に示す四つの特徴が見出せる。すなわち（１）縁帯部作出手法が外面貼付型のみで構成される、（２）ブラシ状文の残存、（３）口胴縄文系と全縄文類型の共伴、（４）沈線文のみによる土器の存在の四点である。

三森定男（以下、敬称略）による津雲Ａ式提唱以来、同型式にはいわゆる屈曲口縁と外面肥厚の二者が知られてきた［三森1938、中村1976、千葉1990等］。ところが、本例には前者の屈曲口縁、すなわち口縁下端意匠を二段に積み上げて成形する手法は認められない。外面肥厚型のみで構成されているのである。以下、前者をｉ口縁、後者をii口縁と仮称しておこう（第３・４図）。改めて、周知の津雲Ａ式相当の深鉢口縁部文様帯破面を詳しく観察するならば、両者の間には明らかな製作技法の差が見出せる。そしてそれらは遺跡や地点単位で異なる傾向を示す場合があることに気付くだろう。ｉ口縁とii口縁の差異は器種差や地方差を前提とするものではないはずである。そこで改めて縁帯文成立期新相の深鉢口縁を観察するならば、外面施文型へと転化を遂げたばかりの初期口縁はその大部分が二段積み上げ、すなわちｉ口縁を採用していることがわかる。従って、型式学的見地よりｉ口縁を呈する津雲Ａ式は口縁部文様帯外面が肥厚する、いわゆる縁帯化したii口縁に対して相対的に古相と位置付けることが可能である。近年、調査が実施された愛媛県上分西遺跡においてもその殆ど全てがii口縁で占められており、さらに本例とは異なって内面施文型が盛行するなど（上分Ⅱ～Ⅲ期）、ii口縁の存



第５図　外面施文型ブラシ状文の諸例

１・２道後城北ＲＮＢ（愛媛）３鶴来が元（愛媛）４荒川（徳島）５・６洗谷（広島）７～９芋平（広島）10津雲（岡山）11～14林原（島根）15・16久米窪田森元（愛媛）

続と変容を示唆する好事例を提供している［幸泉2011ｂ］。対して、本例の場合は縁帯文期以来のブラシ状文が僅かながらも外面施文型深鉢に継承されており、かつ内面施文型が全くみえないなど、ｉ口縁卓越期と上分西Ⅱ期との中間に位置付けるべき特徴を備えている。

つづいて第５図にはブラシ状文を有する外面施文型土器の事例を挙げた。すでに筆者らが松ノ木式からの型式学的連続性を指摘したところであり［幸泉・幸泉文子2005］、近年では島根県林原遺跡の良好な資料群をもとに稲田陽介が林原式を提起している［久保田・稲田編2007］。第５図からは稀少ながらも中・四国地方のほぼ全域における分布が想定できる。林原式の是非についてはひとまず置くとして、その大部分がｉ口縁を採り、かつⅱ口縁が稀有であることからも津雲Ａ式古段階を中心に散見される一群として理解すべきであろう。

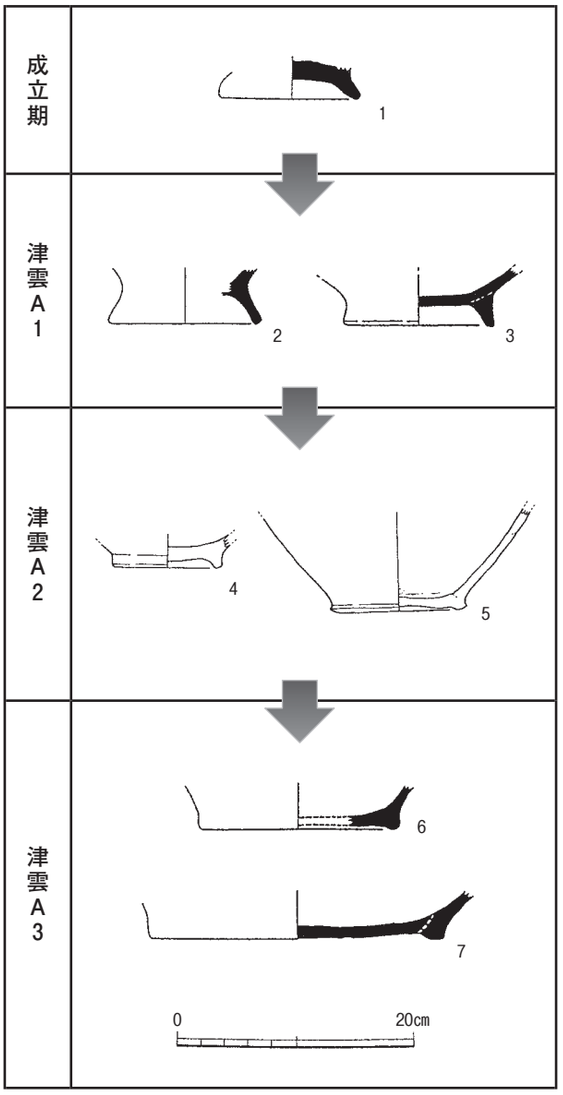
共伴する第Ⅵ系統、口胴縄文系土器については、口縁としては僅か２点の出土であるが（第１図３）、施文原体が単節ＲＬ縄文であることに加え、幅狭の外面肥厚帯、口唇上施文など、そのいずれもが西部瀬戸内における初期縁帯文期の特徴を満たすものである［幸泉2009ａ］。無論、第Ⅶ系統・全縄文類型（第１図４）の共伴とも編年上矛盾するものではない［幸泉2009ｂ］。

沈線文土器の存在については愛媛県江口貝塚、高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡など、従来より四国西北部において周知されてきた地域要素であり、その起源は縄文中期末段階にまで遡る［幸泉2001・2010ａ］。今後はこうした地域差併存の真相についても議論を深めなければならない。

Ⅱ　浅鉢

本遺構では全器種中の42.9％とかなりの高比率を占めている。また全点無文である点、Ⅲ形や中華ナベ形土器がその主体を占めている点が特筆できる（第１図７・８）。本例よりも型式学的に一段階以上新相を主体とする愛媛県上分西遺跡の資料群では中華ナベ形が３割以上の高比率を占めたが、同時

にボウル形17.1％、緩く字形が11.6％という傾向がみられた。皿形は僅か1.7％に過ぎないのである［幸泉2011ｂ］。これに対して本遺跡では中華ナベ形に加え皿形が26.7％を占めるという明確な違いが看取できる。こうした形式組成の相異は香川県永井遺跡等の層位事例からも確認できるところであり、本資料群が上分西遺跡の主体時期よりも古相に位置付けられることを傍証する傾向といえるだろう。



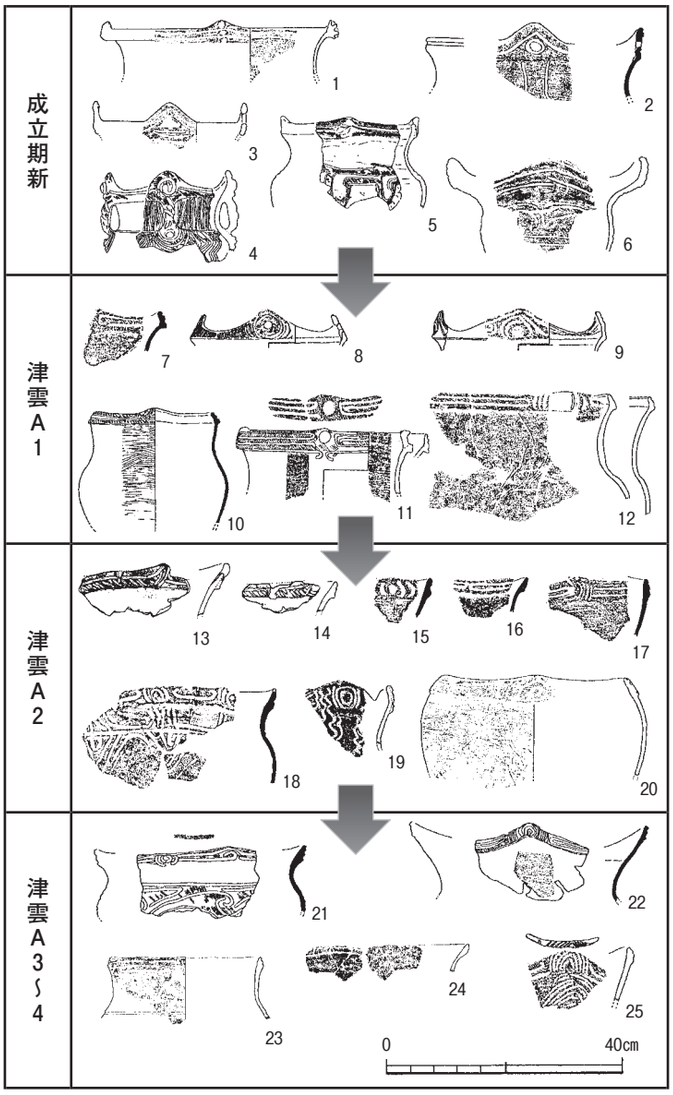
第６図　松山平野周辺における深鉢底部の変遷
１・２道後城北ＲＮＢ（愛媛）３比治山（広島）
４～６久米窪田森元（愛媛）７・８文京（愛媛）

Ⅲ　底部

深鉢・鉢底部は小地域差を反映する非視覚的部位として重要視されることから、最後に本事例に関する所見を付記しておく。個体数の制限から組成比の算出は困難であるが、全点広義の高台底で占められており、興味深い（第６図４・５）。すでに幾篇かの拙稿で述べてきたように、当該地域では初期縁帯文期においてはハ状高台底が主体を占める。第６図２・３などがその典型である。対して、上分西Ⅲ期に併行する松山市文京遺跡11次５層では大型の低平高台底が80.0％と主体を占めた（第６図６・７）。すなわち底部外縁隆帯が次第に低平化しつつも、しかし備讃瀬戸地域とは異なって高台底が長期間存続し続けるのである［幸泉2002・2011ａ］。本事例は両者の中間形態を示すことから、松山平野における高台底隆帯の低平化過程を保証する好事例といえよう（第６図４・５）。すなわちｉ口縁が卓越する津雲Ａ式古段階では典型的なハ状高台底が隆盛していたのに対し、ⅱ口縁に移行した本遺構資料では外縁隆帯の萎縮化が進み、その脚高は１～４㎜程度にまで萎縮する。ただ該期ではまだ底径の大型化は認められない。ⅱ口縁退化期に顕在化する底部大型化現象は北部九州周辺における「底部変動型」技法への技術転換を示唆する可能性がもたれることから、今後は津雲Ａ式新段階にみる土器製作技法の変化について、外部要因の可能性を含め、詳しく再考を行う余地が残されているといえよう。

Ⅳ　結　語

以上、四国地方では稀有といえる津雲Ａ式期の一括資料をもとに若干の所見を述べてきた。従来その認識が曖昧であった屈曲ｉ口縁と外面肥厚ⅱ口縁の二者を本一括資料の分析を契機に区分し得た意



第７図　津雲Ａ式の細分に関する予察

１・３なつめの木（香川）２・４・５松ノ木（高知）６石井国友（愛媛）
７・15・17芋坂（広島）８・９田益田中（岡山）10比治山（広島）11文京
（愛媛）12津島岡大（岡山）13・14久米窪田森元（愛媛）16江口（愛媛）
18平城（愛媛）19矢田八反坪・大出口（愛媛）20永井（香川）
21・22西分増井（高知）23・24上分西（愛媛）25井門Ⅱ（愛媛）

義は大きい。すなわち本節の検討から新たに津雲Ａ式を四小期以上に細分しうる可能性を見出せたのである。ここでは仮に津雲Ａ１、Ａ２、Ａ３、Ａ４式と仮称する。Ａ１式はｉ口縁の卓越する段階、Ａ２式はⅱ口縁が卓越する段階、Ａ３〜４式はⅱ口縁の萎縮退嬰化が進行した段階である。このうちＡ３〜４式はかつて宮本一夫が愛媛県文京遺跡第11次調査区５層資料をもとに提唱した津雲Ａ式新段階［宮本編1990］、また近年筆者が提唱した上分西Ⅱ・Ⅲ期［幸泉2011ｂ］とほぼ同義である。縁帯文成立期新段階と津雲Ａ１式との分別基準については、紙幅の都合別稿に譲らざるをえないが、標式資料たる岡山県津雲貝塚出土土器を津雲Ａ式成立の定点に据えるならば、口縁部主文定型化の有無がその指標の一つとなることはいうまでもない。

1987年以来の待望であった久米窪田森元遺跡ＳＫ１出土土器群の本報告が発刊されたことにより、今後は津雲Ａ式編年の細分と実相解明に向けた議論が再び加速するものと期待される。また海を介した九州地方、あるいは四国西南部側とのクロスデイティングを今後一層推し進めるうえにおいても、本例がその糸口となる重要資料の一つとなることを確信する。

（幸泉満夫）

参考文献

石井龍彦編2007『田ノ浦遺跡』山口県埋蔵文化財センター
植田文雄編1996『正楽寺遺跡』能登川町教育委員会
宇野隆夫1992「食器計量の意義と方法」『研究報告』第40集、国立歴史民俗博物館
大北和美編2005『荒川遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター

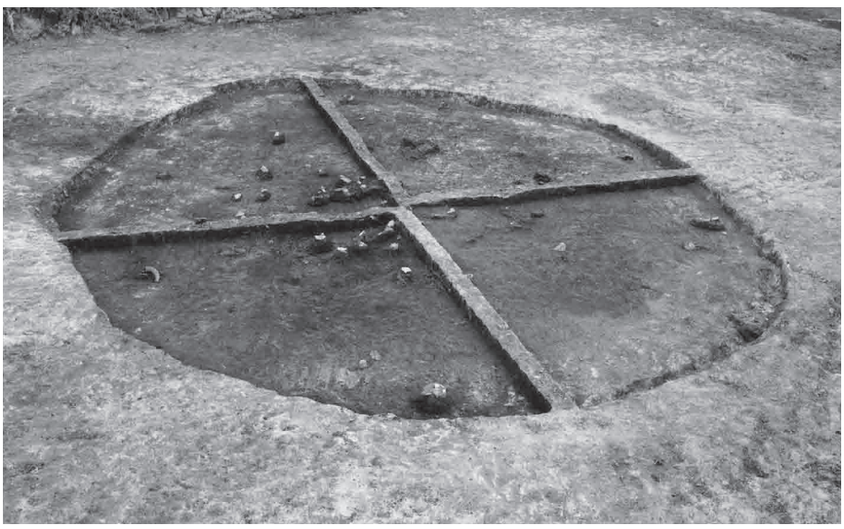
小都　隆1976ａ『洗谷貝塚』福山市教育委員会・洗谷貝塚発掘調査団
小都　隆1976ｂ「芦品郡新市町芋平遺跡について」『芸備』第４集、芸備友の会
鎌木義昌1986「津雲貝塚」『岡山県史』第18巻、岡山県史編纂委員会
木村剛朗・辻内　功・草地牲自1982『平城貝塚第Ⅳ次発掘調査報告書』御荘町教育委員会
木村剛朗1987『四万十川流域の縄文文化研究』幡多埋文研
木村剛朗1995『四国西南沿海部の先史文化』幡多埋文研
久保田一郎・稲田陽介編2007『林原遺跡』島根県埋蔵文化財調査センター
栗田茂敏1989「39.久米窪田森元遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅱ、松山市教育委員会
幸泉満夫1999「西瀬戸内における九州系縄文土器」『眞朱』第３号、徳島県埋蔵文化財センター
幸泉満夫2001「西日本縄文後期土器組成論－瀬戸内地方における沈線文系土器に関する研究－」『考古学研究』第48巻第３号、考古学研究会
幸泉満夫2002「土器底部形態にみる縄文時代後期社会の小地域性」『四国とその周辺の考古学』犬飼徹夫先生古稀記念論集
幸泉満夫・幸泉文子2005「九州の成立期縁帯文土器」『研究報告』第31号、山口県立山口博物館
幸泉満夫2009ａ「中国・四国地方における口胴縄文系土器群の成立と展開」『会誌』第26号、島根考古学会
幸泉満夫2009ｂ「西日本の後期全縄文土器－粗製土器からみた東日本縄文文化の影響－」『古文化談叢』第61集、九州古文化研究会
幸泉満夫2009ｃ「北部九州にみる縄文時代後晩期社会の小地域性」『古文化談叢』第62集、九州古文化研究会
幸泉満夫2010ａ「西日本沈線文系土器集成Ⅳ」『研究報告』第36号、山口県立山口博物館
幸泉満夫2010ｂ「四国」『西日本の縄文土器 後期』真陽社
幸泉満夫2011ａ「土器製作技法にみる環瀬戸内海の縄文土器文化」『大会予稿集』瀬戸内海考古学研究会
幸泉満夫2011ｂ「愛媛県上分西遺跡出土縁帯文土器群の編年学的考察　－瀬戸内地方における平城Ⅱ式土器併行期の様相－」『上分西遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
高橋康文・松本美香編2004『星原市東遺跡・星原市南遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
谷口哲一編2011『田ノ浦遺跡Ⅱ』山口県埋蔵文化財センター
千葉　豊1989「縁帯文土器の成立と展開」『史林』第72巻６号、京都大学文学部内史学研究会
千葉　豊1992「西日本縄文後期土器の二三の問題－瀬戸内地方を中心とした研究の現状と課題－」『古代吉備』第14集、古代吉備研究会
出原恵三編2004『西分増井遺跡Ⅱ』高知県文化財団埋蔵文化財センター
泊　強編2001『貞光前田遺跡』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
中野良一編1994『四国縦貫自動車道埋蔵文化財発掘調査報告書Ⅵ―鶴来が元遺跡 ―』愛媛県埋蔵文化財調査センター
中村友博1976「出土遺物について」『縄手遺跡』２、東大阪市遺跡保護調査会
西尾幸則1989「道後城北ＲＮＢ遺跡」『松山市埋蔵文化財調査年報』Ⅱ、松山市埋文センター
西川真美編2006『高橋佐夜ノ谷Ⅱ遺跡』愛媛県埋蔵文化財調査センター
乗安和二三ほか編1991『桜畠遺跡』山口県教育委員会
橋本貴登2000「矢田八反坪・大出口遺跡」『一般国道196号今治北道路埋蔵文化財調査報告書』愛媛県埋蔵文化財調査センター
橋本久和編1995『芥川遺跡発掘調査報告書』高槻市教育委員会
藤川智之編2003『矢野遺跡Ⅱ』徳島県教育委員会・財団法人徳島県埋蔵文化財センター
藤永正明ほか編1981『林遺跡発掘調査概報』大阪府教育委員会
松崎壽和1951「廣島市比治山貝塚」『廣島縣史跡名勝天然記念物調査報告』第６輯、広島県教育委員会
三森定男1938「先史時代の西部日本（下）」『人類學・先史學講座』第二巻、雄山閣
宮本一夫編1990『文京遺跡第８・９・11次調査』愛媛大学埋蔵文化財調査室
宮本一夫編1994『江口貝塚Ⅱ』愛媛大学法文学部考古学研究室
森下英治編2008『本郷遺跡・川原遺跡』香川県教育委員会
渡辺明夫編1990『永井遺跡』香川県埋蔵文化財調査センター

※ 本節幸泉による論考内容には、平成23年度国立大学法人愛媛大学法文学部人文系担当学部長裁量経費における研究成果の一部が含まれている。

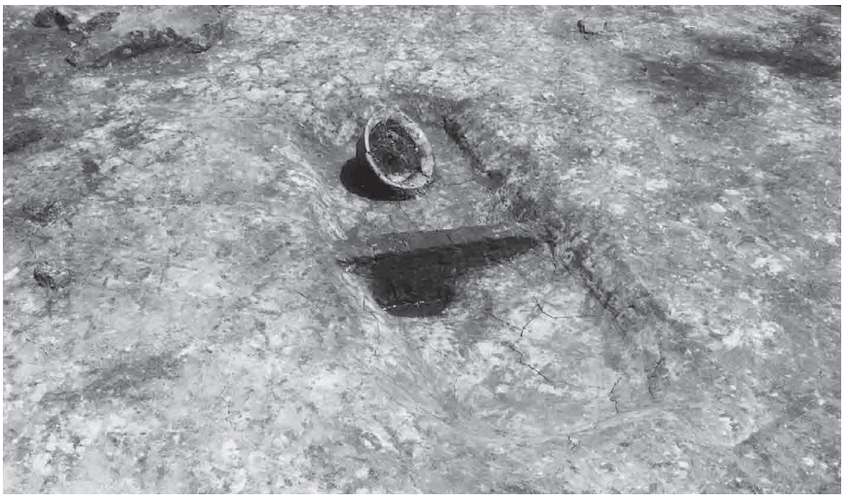
写　真　図　版

調査前の調査地
（北より）

ＳＢ２、ＳＤ１・２検出状況
（西より）



ＳＢ２調査状況
（東より）



ＳＢ２炉址遺物出土状況
（西より）

ＳＢ２完掘状況遠景
（北西より）

ＳＢ２完掘状況近景
（東より）

円形周溝状遺構
ＳＤ１と溝ＳＤ２
（東より）

ＳＢ１検出状況
（南より）

ＳＢ１調査状況
（南より）

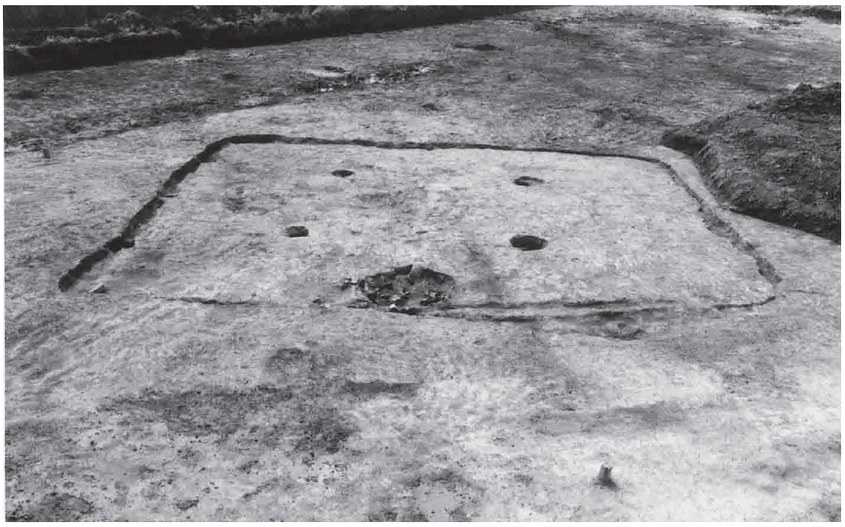
ＳＢ１遺物出土状況（１）
（北東より）

ＳＢ１遺物出土状況（２）
（東より）

ＳＢ１完掘状況（１）
（南より）

ＳＢ１完掘状況（２）
（北東より）

ＳＢ３調査状況（１）
（北東より）

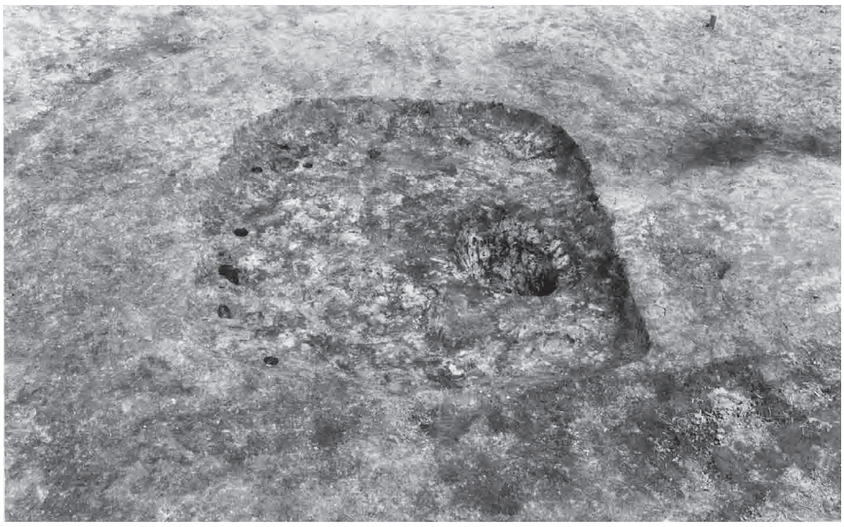


ＳＢ３調査状況（２）
（東より）

ＳＢ３遺物出土状況（１）
（西より）

ＳＢ３遺物出土状況（２）
（西より）

ＳＢ３完掘状況（１）
（南東より）



ＳＢ４完掘状況
（南西より）

集石遺構
（南西より）

集石遺構瓦出土状況近景（１）

集石遺構瓦出土状況近景（2）

Ｔ１調査状況
（西より）

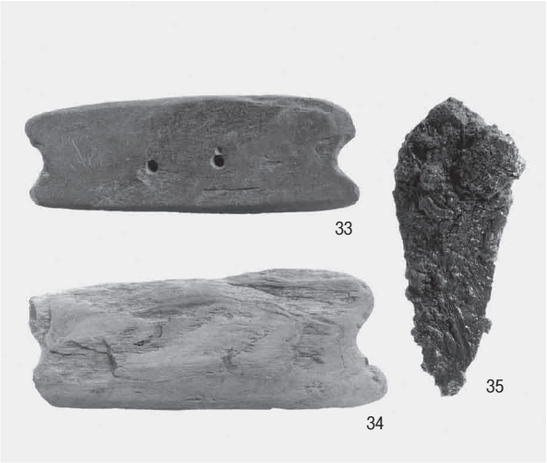
Ｔ２調査風景
（北東より）

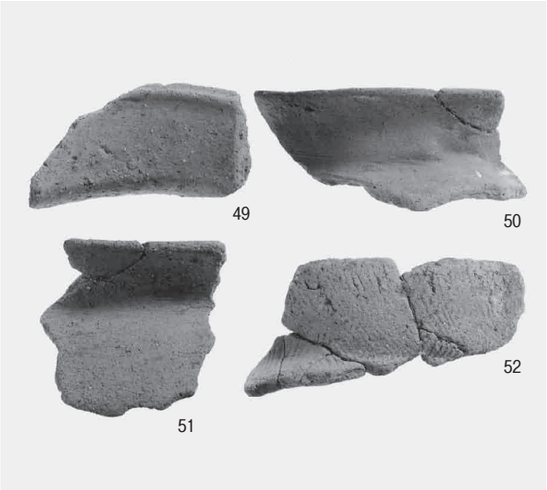
Ｔ２調査状況
（西より）

Ｔ３調査状況
（北より）

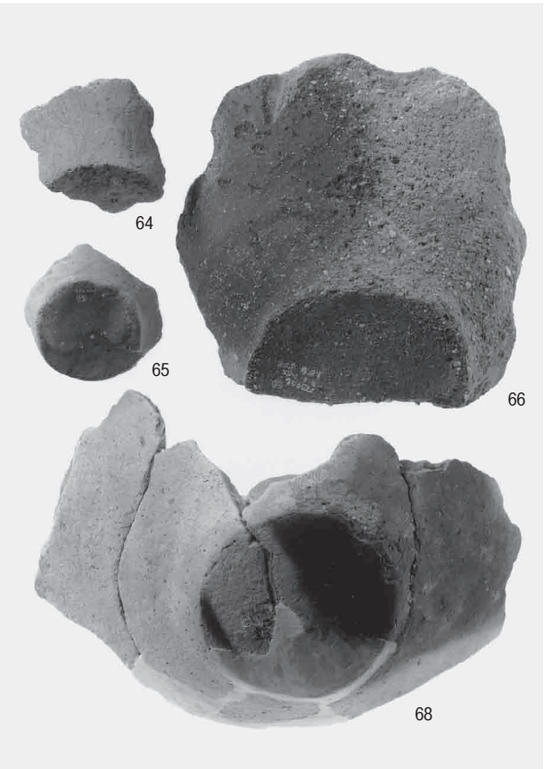
調査地全景
（北より）

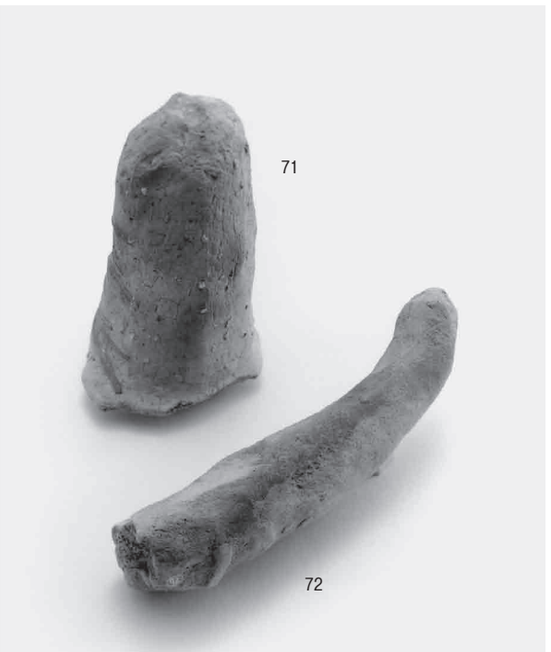
ＳＢ２出土遺物（１）

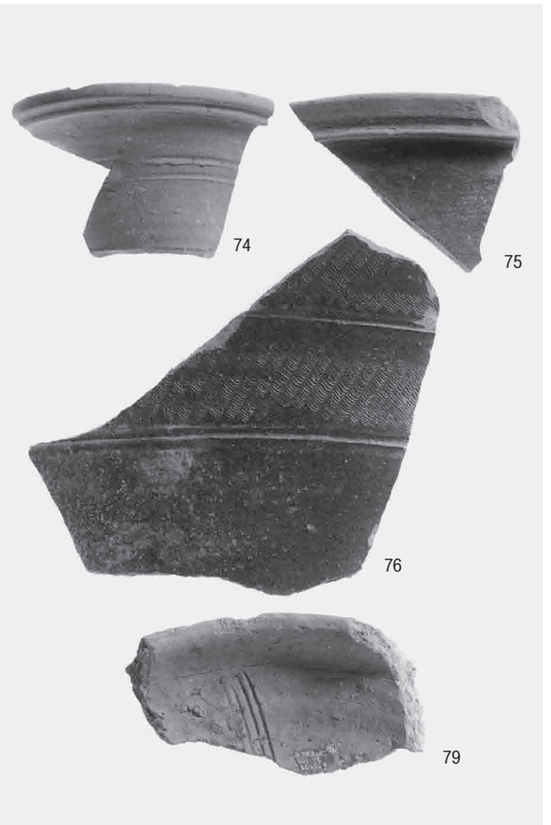




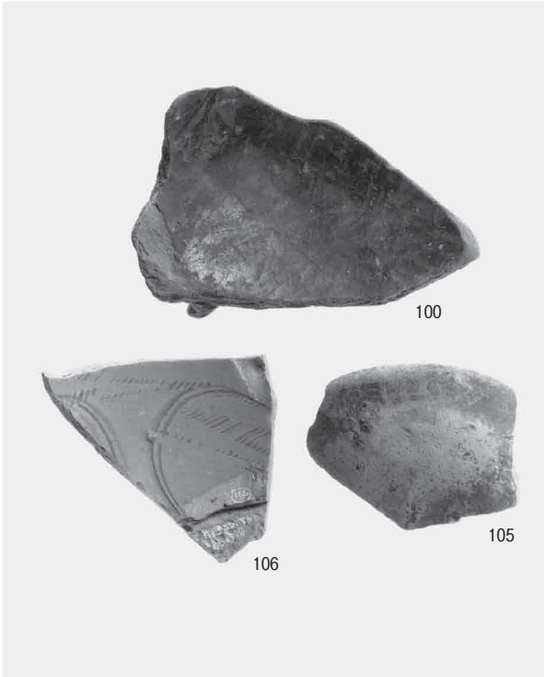
ＳＢ２出土遺物（２）、ＳＢ１・ＳＢ３出土遺物、ＳＢ４出土遺物（１）







ＳＢ４出土遺物（２）、ＳＲ１出土遺物（１）



ＳＲ１出土遺物（２）、集石遺構出土遺物（１）

集石遺構出土遺物（2）

集石遺構出土遺物（3）

調査地遠景
（西より）

表土掘削風景
（南より）

ＳＫ１・ＳＤ５検出状況
（北より）

ＳＤ５完掘状況
（北より）

ＳＫ１遺物出土状況（１）
（南東より）

ＳＫ１遺物出土状況（２）
（南西より）

ＳＫ１遺物出土状況（３）
（南東より）

ＳＫ１遺物出土状況（４）
（北西より）

ＳＫ１下層倒木痕調査状況
（南東より）

ＳＤ４検出状況
（南東より）

ＳＫ１・ＳＤ４調査状況
（南東より）

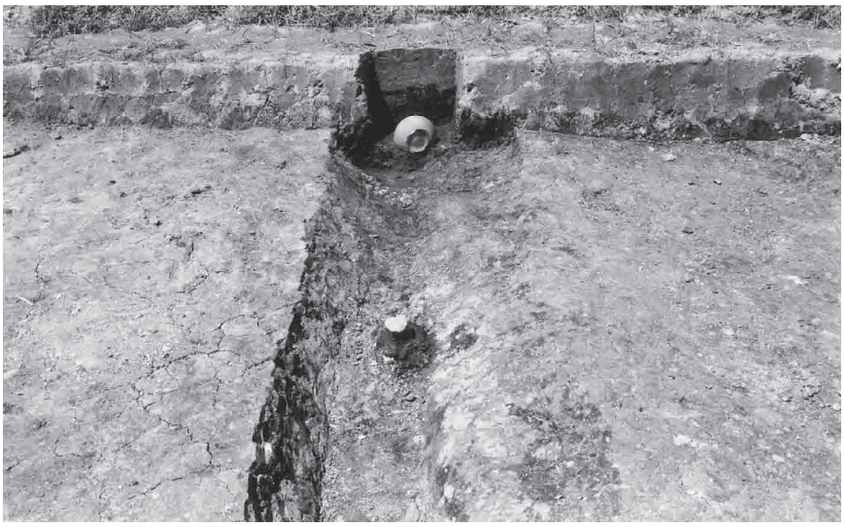
ＳＤ４遺物出土状況（１）
（南より）

ＳＤ４遺物出土状況（２）
（北西より）

ＳＤ４遺物出土状況（３）
（北東より）

ＳＤ１検出状況
（北西より）

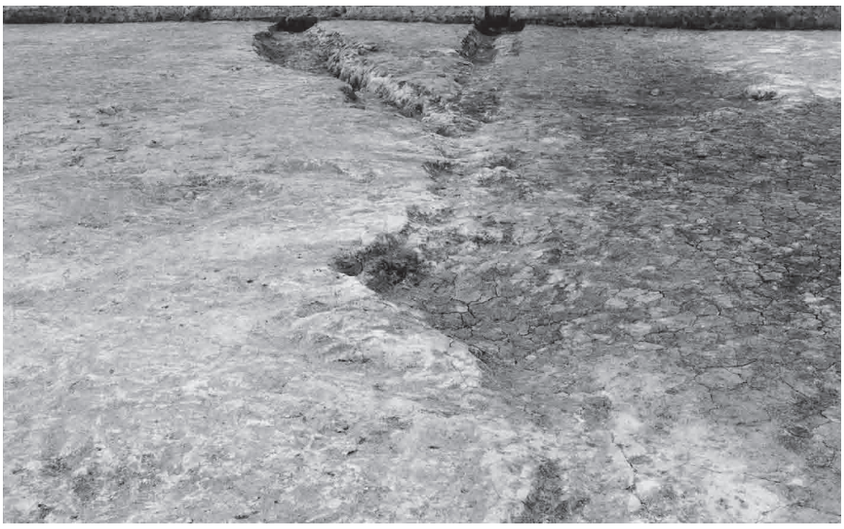
ＳＤ２・３検出状況
（東より）



ＳＤ２遺物出土状況（１）
（東より）

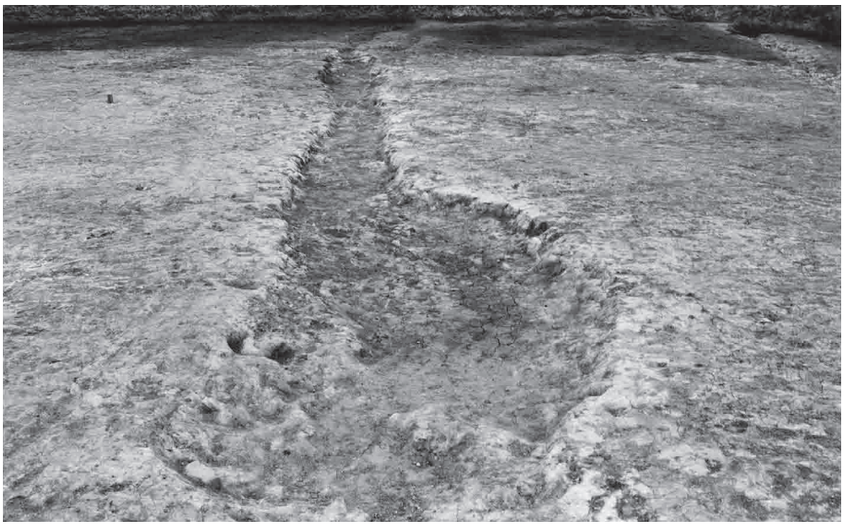
ＳＤ２遺物出土状況（２）

ＳＤ１完掘状況
（西より）

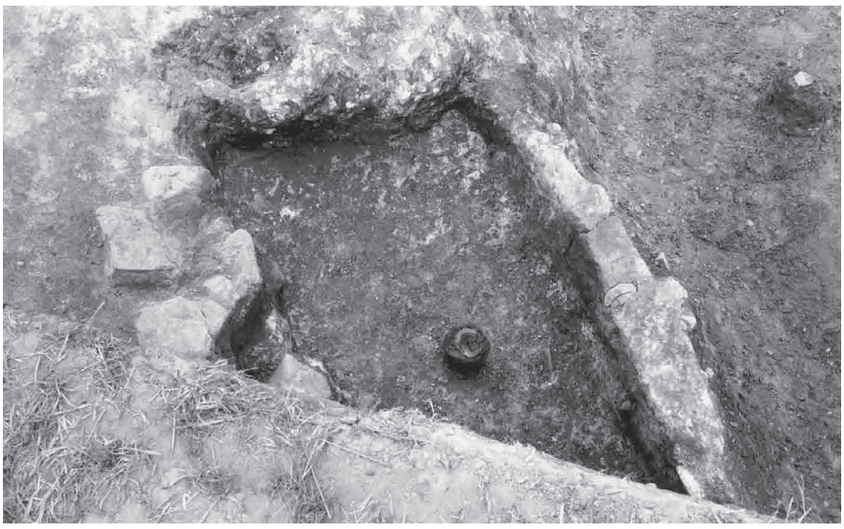


ＳＤ２・３完掘状況
（西より）

ＳＤ２完掘状況
（西より）



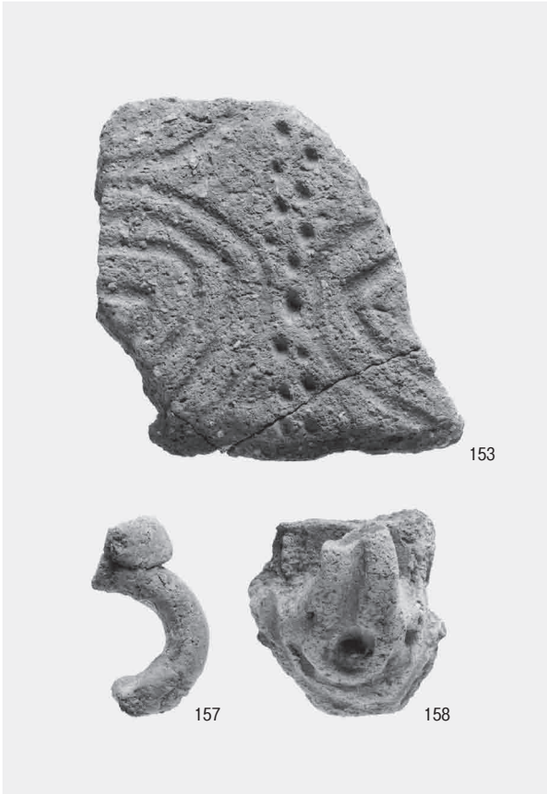
ＳＤ３完掘状況
（西より）



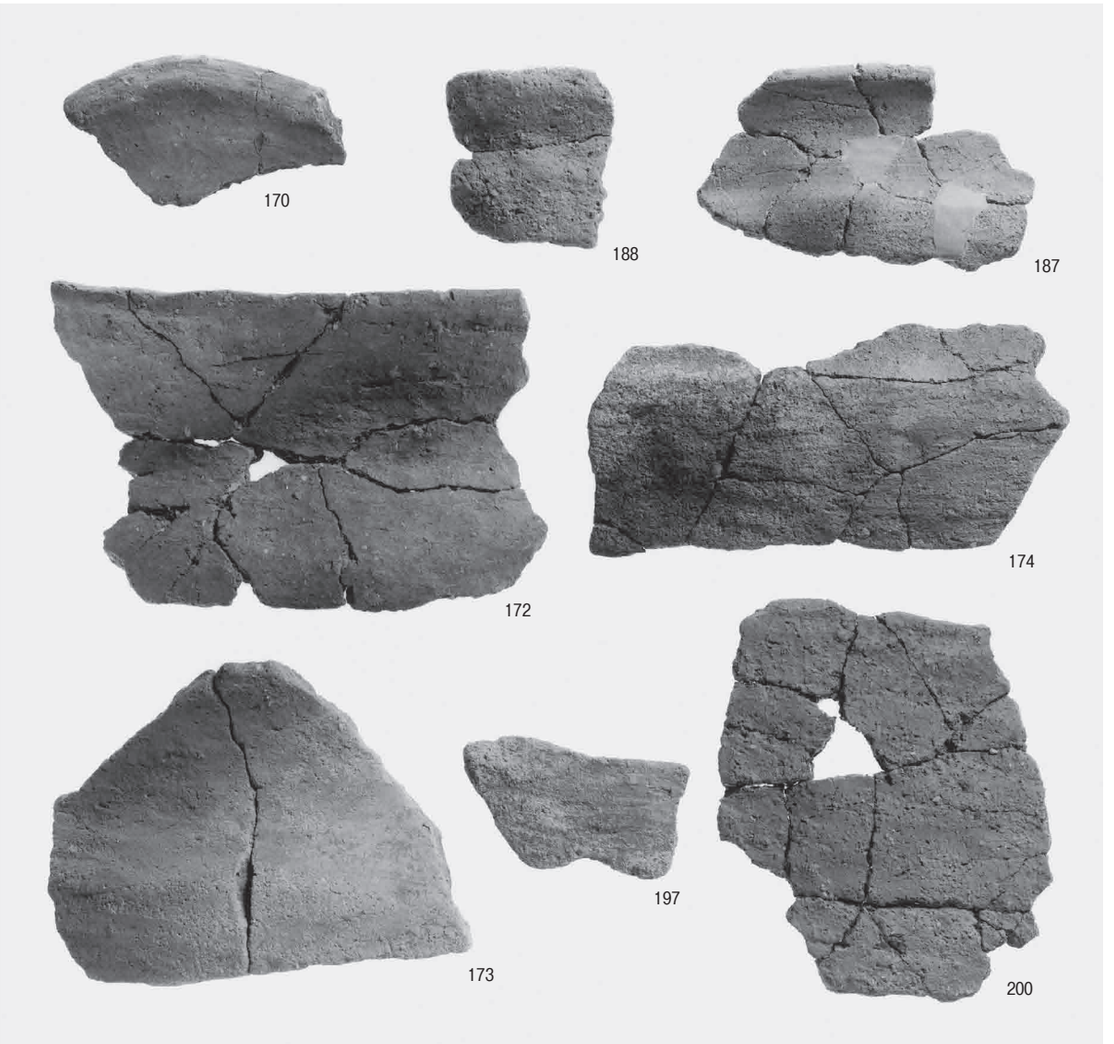
ＳＫ２遺物出土状況
（南より）

ＳＫ４検出状況
（西より）

ＳＫ１出土遺物（１）

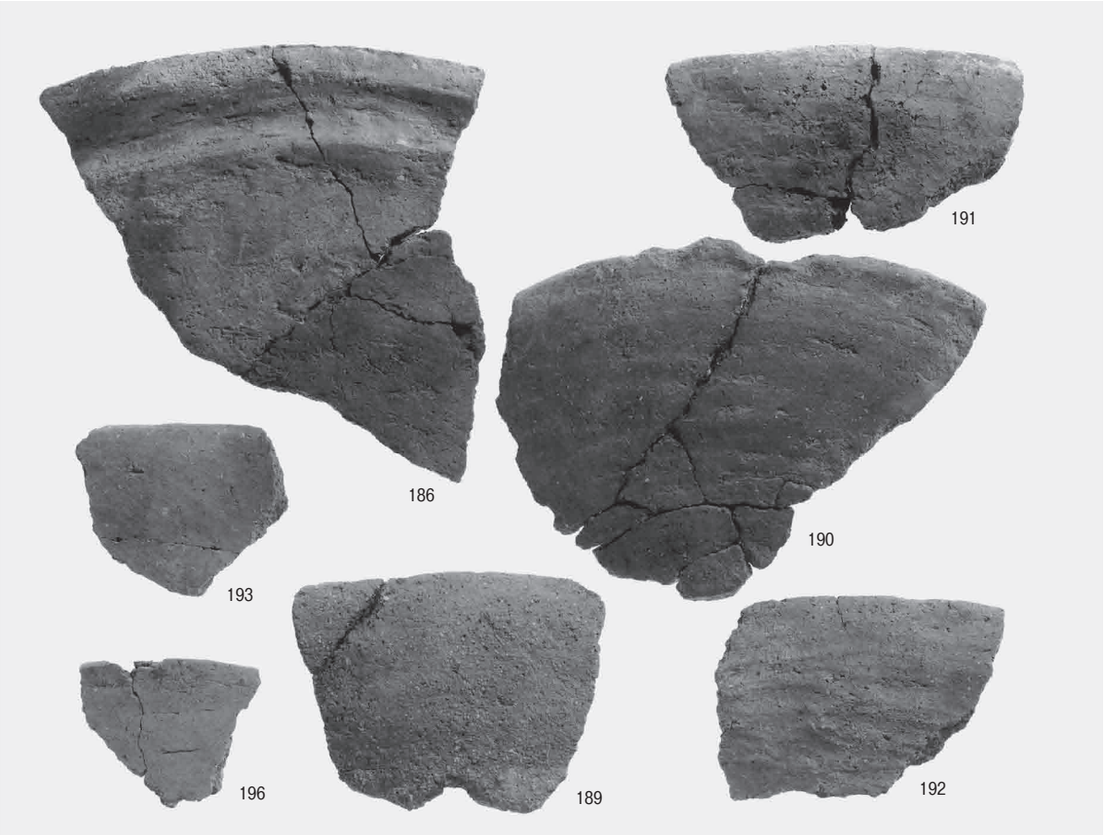


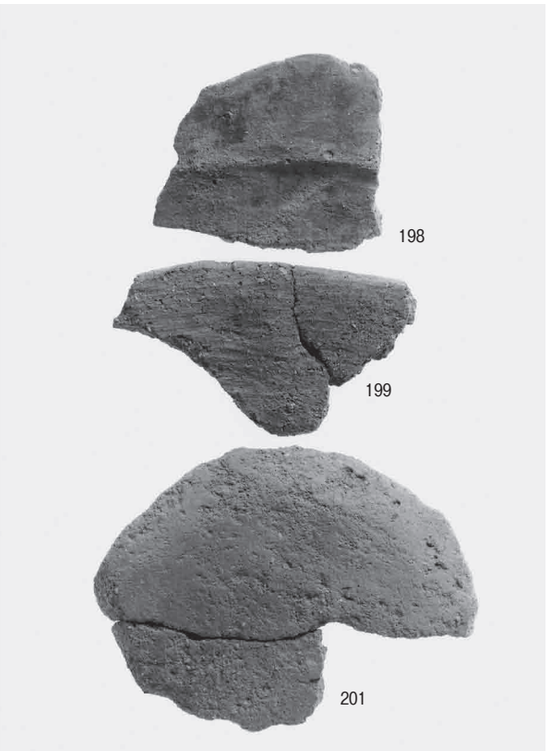
ＳＫ１出土遺物（２）



ＳＫ１出土遺物（３）

ＳＫ１出土遺物（４）





ＳＫ１出土遺物（５）、ＳＤ２出土遺物

ＳＤ４出土遺物

報告書抄録

ふ り が な	みなみくめかたまわりいせき・くめくぼたもりもといせき
書　　名	南久米片廻り遺跡・久米窪田森元遺跡
副 書 名	
巻　　次	
シ リ ー ズ 名	松山市文化財調査報告書
シリーズ番号	第157集
編 著 者 名	栗 田 茂 敏
編 集 機 関	財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団埋蔵文化財センター
所 在 地	〒791－8032　松山市南斎院町乙67－ 6　　TEL089－923－6363
発 行 年 月 日	西暦2012年３月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード		北 緯 °′″	東 経 °′″	調査期間	調査面積 ㎡	調査原因
		市町村	遺跡番号					
南久米 片廻り遺跡	愛媛県松山市 南久米町	38201		33°48′44″	132°47′50″	19850507 ～ 19850522	約920	店舗建設
久米窪田 森元遺跡	愛媛県松山市 久米窪田町	38201		33°48′33″	132°48′40″	19870408 ～ 19870505	約1,600	店舗建設

所収遺跡名	種別	主な時代	主 な 遺 構	主 な 遺 物	特 記 事 項
南久米 片廻り遺跡	集 落	弥 生 古 墳 古代～中世	竪穴建物 竪穴建物 流 路	弥生土器、 石器、鉄器 須恵器、土師器 須恵器、土師器瓦	
久米窪田 森元遺跡	集 落	縄 文 古 代	土 坑 溝	縄文土器 須恵器、土師器	縄文時代後期中葉の土坑から一括性の高い土器群が出土。

要 約	松山市東部で1980年代に行われた店舗用地造成に伴う調査２件。南久米片廻り遺跡では弥生時代後期後葉と古墳時代中期の竪穴建物が検出された。弥生時代では円形周溝状遺構の検出もみている。久米窪田森元遺跡では、縄文時代後期中葉の一括遺物を伴う土坑が調査され、該期の遺跡・遺物が希薄な当地にとっては、瀬戸内津雲Ａ式段階の良好な資料として貴重である。

松山市文化財調査報告書　第157集

南久米片廻り遺跡
久米窪田森元遺跡

平成24年３月31日　発行

編集　財団法人 松山市文化・スポーツ振興財団
埋蔵文化財センター
〒791-8032 松山市南斎院町乙67番地６
TEL(089)923-6363

発行　松山市教育委員会
〒790-0003 松山市三番町６丁目６番地１
TEL(089)948-6605

印刷　不二印刷株式会社
〒790-0054 松山市空港通２丁目13番30号
TEL(089)973-1266